



持続可能な地域づくりのために

統合報告書

2023年3月期

ディスクロージャー誌 [資料編]

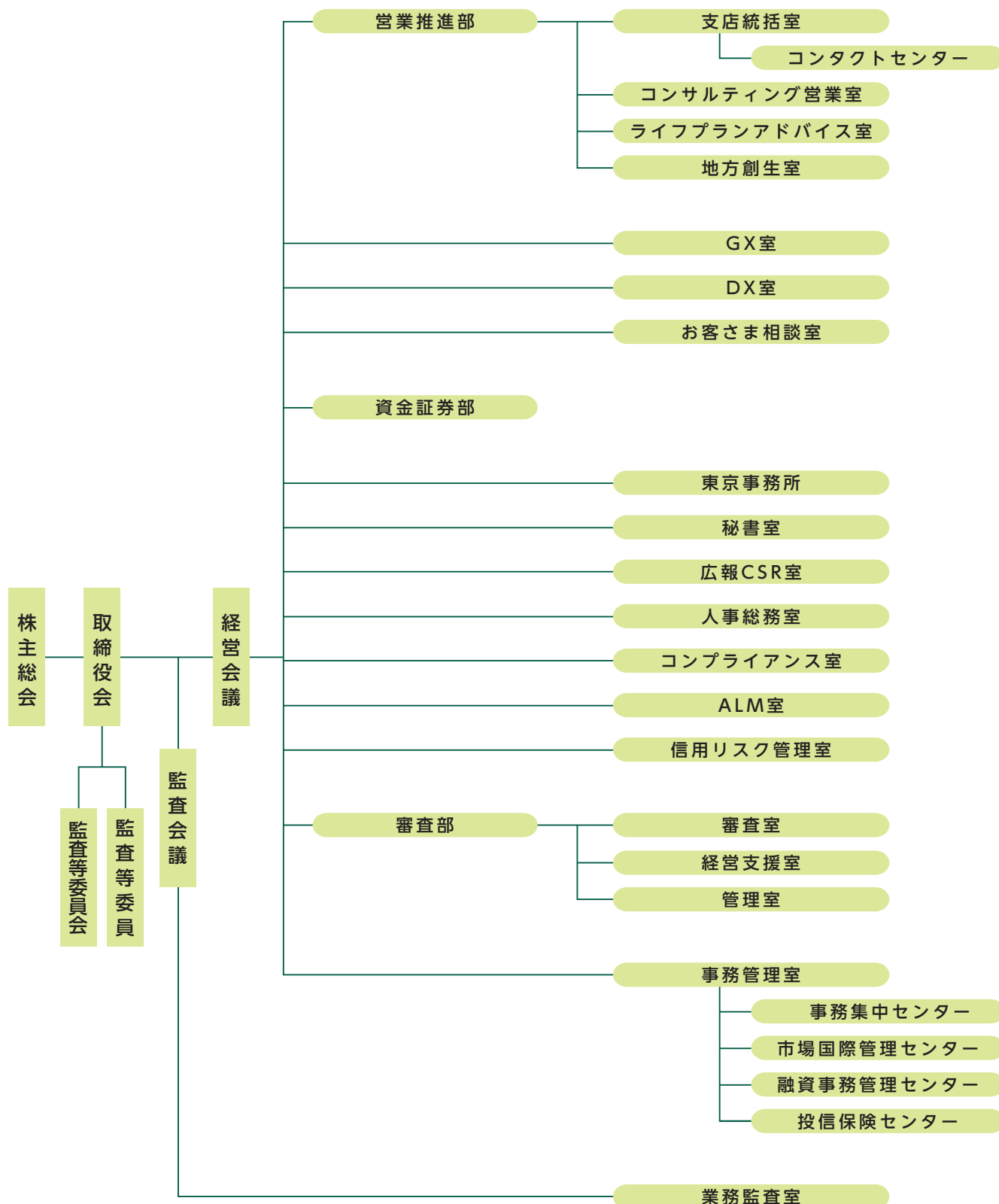
フィデアホールディングス株式会社
株式会社荘内銀行
株式会社北都銀行

Contents

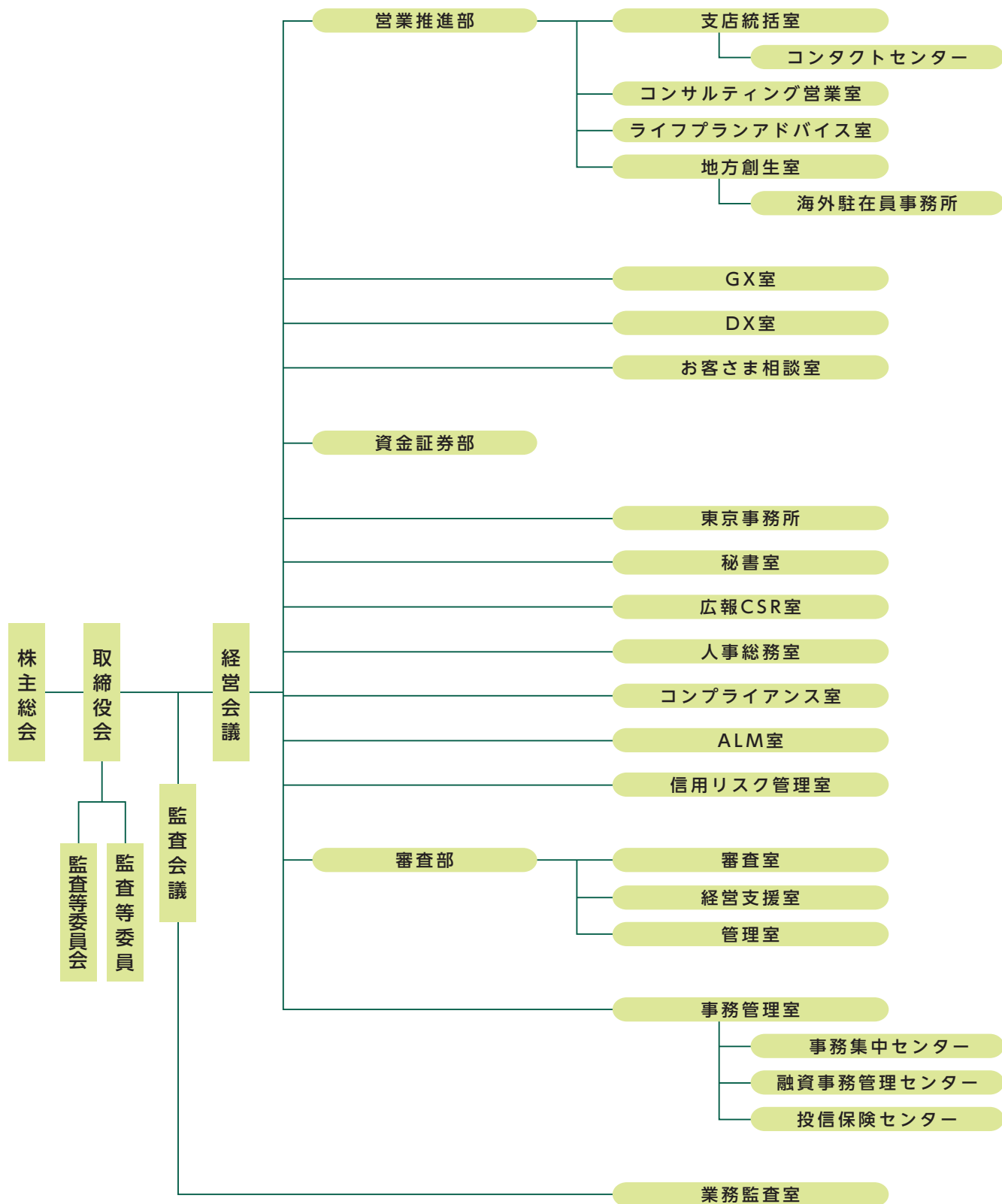
組織の状況	1
株式等の状況	3
手数料	6
業務案内	8
店舗ネットワーク	9
事業の概況（フィデアホールディングス）	13
事業の概況（荘内銀行）	48
事業の概況（北都銀行）	95
索引	141

- 本誌は、銀行法第21条及び第52条の29に基づき作成したディスクロージャー資料です。
- 本誌に記載してある計数は、原則として単位未満を切り捨てのうえ表示しています。ただし、構成比につきましては、端数を調整して表示しているものを含んでいます。





組織図 (2023年7月1日現在)



株式等の状況

資本金及び発行済株式の総数

発行済株式総数 (千株)		資本金 (百万円)
普通株式	18,142	18,000

株式所有者別内訳

〈普通株式〉

区 分	株式の状況 (1単元の株式数：100株)							計	単元未満株式の状況
	政府及び 地方公共団体	金融機関	金融商品 取扱業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他		
					個人以外	個人			
株主数 (人)	4	21	35	1,506	101	30	21,917	23,614	
所有株式数 (単元)	24	39,763	5,271	27,937	21,097	75	82,377	176,544	487,722株
割合 (%)	0.01	22.52	2.99	15.82	11.95	0.04	46.66	100.00	

(注) 1. 自己所有株式81,945株は、「個人その他」に819単元、「単元未満株式の状況」に45株含まれております。

2. 2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、B種優先株式の全株式を取得及び消却したため、種類株式は該当ありません。

株式等の状況

大株主

〈普通株式〉（上位10先）

氏名又は名称	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合
日本マスタートラスト信託銀行株式会社（信託口）	2,486	13.76%
株式会社日本カストディ銀行（信託口）	766	4.24%
フィデアホールディングス従業員持株会	535	2.96%
株式会社日本カストディ銀行（信託口4）	183	1.01%
JP MORGAN CHASE BANK 385781 常任代理人	179	0.99%
公益財団法人克念社	178	0.98%
広野 摂	165	0.91%
庄司 隆弘	163	0.90%
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO 常任代理人	150	0.83%
SSBTC CLIENT OMNIBUS ACCOUNT 常任代理人	149	0.82%
計	4,958	27.45%

(注) 1. 所有株式数は千株未満を切り捨てて表示しております。また、所有株式数の割合は小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。

2. 2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、B種優先株式の全株式を取得及び消却したため、種類株式は該当ありません。

荘内銀行

資本金及び発行済株式の総数

発行済株式総数（千株）	資本金（百万円）
普通株式 121,321	8,500

株式所有者別内訳

〈普通株式〉

区分	株式の状況（1単元の株式数：1,000株）							計	単元未満株式の状況
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取扱業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	—	—	1	—	—	—	1	
所有株式数（単元）	—	—	—	121,321	—	—	—	121,321	649株
割合（%）	—	—	—	100.00	—	—	—	100.00	

大株主

〈普通株式〉

氏名又は名称	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合
フィデアホールディングス株式会社	121,321	100.00%

(注) 所有株式数は千株未満を切り捨てて表示しております。また、所有株式数の割合は小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。

資本金及び発行済株式の総数

発行済株式総数 (千株)		資本金 (百万円)
普通株式	282,339	12,500

株式所有者別内訳

〈普通株式〉

区 分	株式の状況 (1単元の株式数：1,000株)							計	単元未満株式の状況
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取扱業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		
					個人以外	個人			
株主数 (人)	—	—	—	1	—	—	—	1	
所有株式数 (単元)	—	—	—	282,339	—	—	—	282,339	276株
割合 (%)	—	—	—	100.00	—	—	—	100.00	

(注) 2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、C種優先株式の全株式を取得及び消却したため、種類株式は該当ありません。

大株主

〈普通株式〉

氏名又は名称	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合
フィデアホールディングス株式会社	282,339	100.00%

(注) 1. 所有株式数は千株未満を切り捨てて表示しております。また、所有株式数の割合は小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。
 2. 2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、C種優先株式の全株式を取得及び消却したため、種類株式は該当ありません。

手数料



ATM関連手数料等

	ご利用時間	当行カード	他金融機関カード	ゆうちょ銀行カード
平日	8:00から9:00*まで	110円	220円	220円
	9:00*から18:00まで	-	110円	110円
	18:00以降	110円	220円	220円
土曜日	9:00から14:00まで	110円	220円	110円
	14:00以降	110円	220円	220円
日曜日・祝日	終日	110円	220円	220円

※ご利用時間は各コーナーにより異なりますのでご了承ください。
 ※12月31日～1月3日は日曜日・祝日と同じご利用手数料となります。
 ※ゆうちょ銀行カードは8:45となります。

振込手数料等

		3万円未満	3万円以上
同一店内振込	窓口	550円	
	ATM	当行カード110円/現金・他行カード440円	
	FB/荘銀ダイレクト・荘銀ビジネスダイレクト	無料	
当行本支店宛振込	窓口	550円	
	ATM	当行カード330円/現金・他行カード440円	
	FB/荘銀ダイレクト・荘銀ビジネスダイレクト	110円	330円/220円
他行宛振込	窓口	880円	
	ATM	当行カード660円/現金・他行カード770円	
	FB/荘銀ダイレクト・荘銀ビジネスダイレクト	385円/275円	550円/440円
送金、振込の組戻料（一件につき）		880円	

※カードをご利用の上、お振込みの場合は、時間帯に応じて振込手数料の他に別途ATMご利用手数料が加算になります。

その他の手数料

代金取立手数料	同一手形交換所内		支払地が同一市町村内 一件につき	660円
			支払地が同一市町村以外 一件につき	660円
	上記以外	当行本支店宛	一件につき	660円
		他行宛	集中取立一件につき	660円
			個別取立一件につき	1,100円
取立手形店頭呈示料 取立手形組戻料 不渡手形返却料		一件につき	1,100円	
手形・小切手用紙代	当座小切手帳		一冊につき	5,500円
	約束手形 為替手形		一冊につき	5,500円
再発行手数料	通帳		一冊につき	1,100円
	証書		一枚につき	1,100円
	カード		一枚につき	1,100円
預金残高証明書 融資残高証明書、等	継続発行先残高証明書		一業務につき ※業務の区分：預金・融資・外為・債券	550円
	継続発行先以外	当行制定帳票	一業務につき	660円
		当行制定帳票以外	一件につき	3,300円
融資証明書		一件につき	3,300円	
その他の手数料	自己宛小切手発行手数料		一枚につき	1,100円

※代金取立手数料のうち、小切手の取立における自店払い（支払場所が受入店と同一の場合）の手数は無料です。
 ※インターネットバンキング等の手数料、貸金庫使用料・夜間金庫使用料・国債保護預り手数料・その他の手数料等については窓口におたずねください。
 ※「住宅取得資金に係る借入金年末残高証明書」の発行手数料は無料です。

ATM関連手数料等

	ご利用時間	当行カード・提携先カード	他金融機関カード	ゆうちょ銀行カード
平日	8:00から8:45まで	110円	220円	220円
	8:45から18:00まで	-	110円	110円
	18:00以降	110円	220円	220円
土曜日	9:00から14:00まで	110円	220円	110円
	14:00から17:00まで	110円	220円	220円
	17:00以降	110円	220円	220円
日曜日・祝日	終日	110円	220円	220円

※ご利用時間は各コーナーにより異なりますのでご了承ください。
 ※12月31日～1月3日は日曜日・祝日と同じご利用手数料となります。

振込手数料等

		3万円未満	3万円以上
同一店内振込	窓口	550円	550円
	ATM	当行カード110円/現金・他行カード440円	当行カード110円/現金・他行カード440円
	《HOKUTO》マイバンク・ネット (インターネット・モバイルバンキング) ほくと法人IBサービス ホームバンキング/ファームバンキング	無料	無料
	窓口	550円	550円
当行本支店宛振込	ATM	当行カード330円/現金・他行カード440円	当行カード330円/現金・他行カード440円
	《HOKUTO》マイバンク・ネット (インターネット・モバイルバンキング) ほくと法人IBサービス ホームバンキング/ファームバンキング	110円	275円
	窓口	880円	880円
	ATM	当行カード660円/現金・他行カード770円	当行カード660円/現金・他行カード770円
他行宛振込	《HOKUTO》マイバンク・ネット (インターネット・モバイルバンキング) ほくと法人IBサービス ホームバンキング/ファームバンキング	363円	528円
	窓口	880円	880円
	ATM	当行カード660円/現金・他行カード770円	当行カード660円/現金・他行カード770円
	送金、振込の組戻料 (一件につき)	1,100円	

※カードをご利用の上、お振込みの場合は、時間帯に応じて振込手数料の他に別途ATMご利用手数料が加算になります。

その他の手数料

代金取立手数料	当行本支店	同一手形交換地域内	一件につき	440円
		上記以外	一件につき	440円
	他行宛のもの	同一手形交換地域内	一件につき	440円
		上記以外	集中取立一件につき 個別取立一件につき	440円 880円
	取立手形店頭呈示料 取立手形組戻料 不渡手形返却料		一件につき	1,100円
手形・小切手用紙代	当座小切手帳 約束手形 為替手形		一冊につき	4,400円
	再発行手数料	通帳	一冊につき	1,100円
証書		一枚につき	1,100円	
カード		一枚につき	1,100円	
預金残高証明書 融資残高証明書、等	継続発行先残高証明書		一業務につき ※業務の区分：預金・融資・外為・債券	440円
	継続発行先以外	当行制定帳票	一業務につき	660円
		当行制定帳票以外	一件につき	3,300円
		当行制定帳票以外(監査法人向)	一件につき	3,300円
融資証明書		一枚につき	1,100円	
その他の手数料	自己宛小切手発行手数料		一枚につき	550円

※代金取立手数料のうち、小切手の取立における自店払い(支払場所が受入店と同一の場合)の手数料は無料です。
 ※インターネットバンキング等の手数料、貸金庫使用料・夜間金庫使用料・国債保護預り手数料・その他の手数料等については窓口におたずねください。
 ※「住宅取得資金に係る借入金年末残高証明書」の発行手数料は無料です。

業務案内（荘内銀行、北都銀行）

主要な業務の内容（2023年7月31日現在）

●預金業務

預 金	当座預金、普通預金、貯蓄預金、通知預金、定期預金、定期積金、別段預金、納税準備預金、非居住者円預金、外貨預金等を取り扱っております。
譲渡性預金	譲渡可能な定期預金を取り扱っております。
決済用預金	預金保険制度により預け入れ全額保護される預金を取り扱っております。

●貸出業務

貸 付	手形貸付、証書貸付及び当座貸越を取り扱っております。
手形の割引	銀行引受手形、商業手形及び荷付為替手形の割引を取り扱っております。

●商品有価証券売買業務

- 国債等公共債の売買業務を行っております。

●有価証券投資業務

- 預金の支払準備及び資金運用のため国債、地方債、社債、株式、その他の証券に投資しております。

●内国為替業務

- 送金為替、振込及び代金取立等を取り扱っております。

●外国為替業務

- 輸出、輸入及び海外送金その他外国為替に関する各種業務を行っております。

●社債受託及び登録業務

- 担保附社債信託法による社債の受託業務、公社債の募集受託及び登録に関する業務を行っております。
- 特定社債保証制度による無担保社債の受託業務を行っております。

●附帯業務

◎代理業務

1. 日本銀行代理店、日本銀行歳入代理店及び国債代理店業務
2. 地方公共団体の公金取扱業務
3. 独立行政法人勤労者退職金共済機構等の代理店業務
4. 株式払込金の受入代理業務及び株式配当金、公社債元利金の支払代理業務
5. 中小企業金融公庫等の代理貸付業務
6. 信託代理店業務

◎保護預り及び貸金庫業務

◎有価証券の貸付業務

◎債務の保証（支払承諾）

◎公共債の引受

◎国債等公共債、投資信託及び保険商品の窓口販売

◎金融商品仲介業務

◎コマーシャル・ペーパー等の取扱い

◎損害保険の窓口販売業務

◎生命保険の窓口販売業務

◎有料職業紹介業務

店舗ネットワーク (荘内銀行)

店舗数 88 (本支店: 82、出張所: 5、代理店: 1)



△印は自動機の平日、土曜日稼働店です。◎印は自動機の平日、土曜日、日曜日、祝日稼働店です。
各店舗・ATMの営業時間については、当行ホームページをご覧ください。

田川地区

店舗総数19(本支店: 16、出張所: 3)

店舗名	所在地	電話番号
◎本店営業部	997-8611 鶴岡市本町一丁目9番7号	0235-22-5211
宝田支店	(本店営業部内)	
鶴岡東支店	(本店営業部内)	
朝陽町支店	(本店営業部内)	
三瀬支店	(本店営業部内)	
瀬海支店	(本店営業部内)	
ねずが関支店	(本店営業部内)	
藤島支店	(本店営業部内)	
◎北支店	997-0015 鶴岡市末広町9番15号	0235-22-5220
新斎町支店	(北支店内)	
◎鶴岡南支店	997-0816 鶴岡市文園町1番6号	0235-22-3323
くしびき支店	(鶴岡南支店内)	
本町三丁目支店	(鶴岡南支店内)	
◎鶴岡西支店	997-0046 鶴岡市みどり町18番60号	0235-24-3055
鶴岡市役所出張所	997-0035 鶴岡市馬場町9番25号	0235-23-7215
◎大山支店	997-1124 鶴岡市大山二丁目16番33号	0235-33-2005
◎庄内支店	997-1301 東田川郡三川町大字横山字袖東19番1	0235-66-4115
イオン三川店出張所	(庄内支店内)	
青果物市場出張所	997-1321 東田川郡三川町大字押切新田字茨谷地50番地	0235-66-4128

飽海地区

店舗総数14(支店: 13、出張所: 1)

店舗名	所在地	電話番号
◎酒田中央支店	998-0044 酒田市中町二丁目5番10号	0234-22-5521
酒田営業部	(酒田中央支店内)	
緑ヶ丘支店	(酒田中央支店内)	
酒田東支店	(酒田中央支店内)	
イオン酒田南店出張所	(酒田中央支店内)	
秋田支店	(酒田中央支店内)	
◎酒田北支店	998-0006 酒田市ゆたか一丁目15番地の16	0234-35-1855
観音寺支店	(酒田北支店内)	
◎若竹町支店	998-0834 酒田市若竹町二丁目4番5号	0234-23-7501
◎新橋支店	998-0864 酒田市新橋二丁目26番地の18	0234-24-1515
東部酒田支店	(新橋支店内)	
平田支店	(新橋支店内)	
◎余目支店	999-7781 東田川郡庄内町余目字町17番地1	0234-43-2455
◎遊佐支店	999-8301 飽海郡遊佐町遊佐字京田103番地	0234-72-2511

最上地区

店舗総数5(支店: 5)

店舗名	所在地	電話番号
◎新庄支店	996-0073 新庄市栄町6番1号	0233-22-1901
真室川支店	(新庄支店内)	
おくら支店	(新庄支店内)	
◎金山支店	999-5402 最上郡金山町大字金山407番地	0233-52-2005
◎もがみ町支店	999-6101 最上郡最上町大字向町605番5	0233-43-2055

山形・上山区

店舗総数14(支店: 13、代理店: 1)

店舗名	所在地	電話番号
◎山形営業部	990-0043 山形市本町一丁目4番21号	023-641-6221
山形南支店	(山形営業部内)	
◎山形営業部 リリー諏訪町代理店	990-0033 山形市諏訪町二丁目1番3号	023-615-3424
◎北山形支店	990-0052 山形市円応寺町5番7号	023-631-3958
北町支店	(北山形支店内)	
◎県庁前支店	990-0023 山形市松波四丁目1番15号	023-632-4418
◎ときめき通り支店	990-0061 山形市五十鈴三丁目1-10	023-633-3715
鈴川支店	(ときめき通り支店内)	
イオン山形北支店	(ときめき通り支店内)	
◎あかねヶ丘支店	990-2481 山形市あかねヶ丘三丁目2番1号	023-644-4466
露城支店	(あかねヶ丘支店内)	
◎桜田支店	990-2324 山形市青田南24番40号	023-633-2933
イオン山形南支店	(桜田支店内)	
◎上山支店	999-3153 上市市十日町2番4号	023-672-2202

村山北地区

店舗総数8(支店: 8)

店舗名	所在地	電話番号
◎天童中央支店	994-0026 天童市東本町一丁目2番1号	023-654-1311
天童支店	(天童中央支店内)	
長岡支店	(天童中央支店内)	
イオンモール天童支店	(天童中央支店内)	
◎寒河江支店	991-0031 寒河江市本町二丁目8番44号	0237-86-3105
◎橋岡支店	995-0034 村山市橋岡五日町5番10号	0237-55-2521
◎東根支店	999-3720 東根市さくらんぼ駅前二丁目17番19号	0237-43-4141
◎河北支店	999-3512 西村山郡河北町谷地中央二丁目1番11号	0237-72-7611

置賜地区

店舗総数6(支店: 6)

店舗名	所在地	電話番号
◎米沢中央支店	992-0012 米沢市金池五丁目7番12号	0238-24-5290
米沢支店	(米沢中央支店内)	
米沢西支店	(米沢中央支店内)	
イオンタウン南陽支店	(米沢中央支店内)	
イオンタウン米沢支店	(米沢中央支店内)	
◎長井支店	993-0006 長井市あら町4番57号	0238-84-2380

山形県外

店舗総数21(支店: 20、出張所: 1)

店舗名	所在地	電話番号
◎仙台支店	980-0021 宮城県仙台市青葉区中央三丁目1番24号	022-222-5161
イオン中山支店	(仙台支店内)	
栗生支店	(仙台支店内)	
荒井支店	(仙台支店内)	
イオン石巻支店	(仙台支店内)	
イオン多賀城支店	(仙台支店内)	
◎桂ガーデンプラザ支店	981-3134 宮城県仙台市泉区桂一丁目1番1	022-772-2056
泉中央支店	(桂ガーデンプラザ支店内)	
吉岡支店	(桂ガーデンプラザ支店内)	
◎長町支店	982-0011 宮城県仙台市太白区長町七丁目19番45号	022-246-3101
名取エアリ支店	(長町支店内)	
ザ・モール仙台長町出張所	(長町支店内)	
◎明石台支店	981-3332 宮城県仙台市明石台六丁目3番6	022-772-8212
イオン富谷支店	(明石台支店内)	
イオン利府支店	(明石台支店内)	
◎福島支店	960-8053 福島県福島市三河南町6番7号	024-534-7191
郡山支店	(福島支店内)	
東京支店	103-0022 東京都中央区日本橋室町三丁目4番7号	03-5860-9915
	日本橋室町プラザビル2階	
吉祥寺支店	(東京支店内)	
イオン葛西支店	(東京支店内)	
イオン板橋前野町支店	(東京支店内)	

その他

店舗総数1(支店: 1)

店舗名	所在地	電話番号
わたしの支店	997-8611 鶴岡市本町一丁目9番7号(4階コンタクトセンター内)	0235-28-2431

(2023年7月31日現在)

△印は自動機の平日、土曜日稼働店です。◎印は自動機の平日、土曜日、日曜日、祝日稼働店です。
各店舗・ATMの営業時間については、当行ホームページをご覧ください。

秋田市内			店舗総数29(本支店: 29)
店舗名	所在地	電話番号	
◎本店営業部	010-0001 秋田県秋田市中通三丁目1番41号	(018)833-4211	
榎山支店	(本店営業部内)		
◎秋田駅前支店	010-0001 秋田県秋田市中通二丁目5番1号	(018)833-6171	
◎山王支店	010-0951 秋田県秋田市山王六丁目2番8号	(018)865-5055	
川元支店	(山王支店内)		
割山支店	(山王支店内)		
◎秋田西支店	010-0973 秋田県秋田市八橋本町三丁目3番23号	(018)863-3161	
◎新国道支店	010-0916 秋田県秋田市泉北一丁目3番11号	(018)823-6215	
◎泉支店	010-0918 秋田県秋田市泉南二丁目13番25号	(018)824-6178	
通町支店	(泉支店内)		
◎牛島支店	010-0062 秋田県秋田市牛島東六丁目2番11号	(018)835-5421	
茨島支店	(牛島支店内)		
◎秋田南支店	010-1421 秋田県秋田市仁井田本町五丁目8番25号	(018)839-3355	
河辺支店	(秋田南支店内)		
◎御所野支店	010-1413 秋田県秋田市御所野地蔵田一丁目1番1号(イオンモール秋田内)	(018)826-1161	
◎秋田東支店	010-0041 秋田県秋田市広面字高田322番地	(018)837-3111	
明田支店	(秋田東支店内)		
桜支店	(秋田東支店内)		
広面支店	(秋田東支店内)		
◎手形支店	010-0864 秋田県秋田市手形住吉町1番27号	(018)832-5076	
手形北支店	(手形支店内)		
◎外旭川支店	010-0802 秋田県秋田市外旭川字松崎127番地5	(018)868-1921	
△中央市場支店	010-0802 秋田県秋田市外旭川字待合28番地	(018)869-5211	
◎土崎支店	011-0946 秋田県秋田市土崎港中央一丁目17番14号	(018)845-1128	
高清水支店	(土崎支店内)		
将軍野支店	(土崎支店内)		
土崎南支店	(土崎支店内)		
◎秋田北支店	011-0941 秋田県秋田市土崎港北七丁目5番33号	(018)845-6061	
◎新屋支店	010-1638 秋田県秋田市新屋表町10番4号	(018)828-5000	

鹿角地区			店舗総数2(支店: 2)
店舗名	所在地	電話番号	
◎鹿角支店	018-5201 秋田県鹿角市花輪字下花輪158番地1	(0186)23-3181	
毛馬内支店	(鹿角支店内)		

大仙・仙北地区			店舗総数8(支店: 8)
店舗名	所在地	電話番号	
◎大曲支店	014-0024 秋田県大仙市大曲中通町1番14号	(0187)62-4411	
仙北支店	(大曲支店内)		
太田支店	(大曲支店内)		
◎大曲南支店	014-0046 秋田県大仙市大曲町1番22号	(0187)62-4422	
大曲プラザ支店	(大曲南支店内)		
◎角館支店	014-0318 秋田県仙北市角館町中町38番地1	(0187)54-2141	
◎田沢湖支店	014-1201 秋田県仙北市田沢湖生保内字街道ノ上87番地の3	(0187)43-1151	
◎美郷支店	019-1404 秋田県仙北郡美郷町六郷字馬町78番地	(0187)84-0435	

横手地区			店舗総数10(支店: 8、出張所: 2)
店舗名	所在地	電話番号	
◎横手支店	013-0021 秋田県横手市大町7番8号	(0182)32-3031	
横手市本庁舎出張所	013-0023 秋田県横手市中央町8番2号(横手市役所内)	(0182)33-2813	
横手駅前支店	(横手支店内)		
横手市役所出張所	(横手支店内)		
◎横手西支店	013-0060 秋田県横手市条里一丁目13番25号	(0182)33-6020	
大森支店	(横手西支店内)		
◎増田支店	019-0701 秋田県横手市増田町増田字七日町127番地	(0182)45-3031	
◎十文字支店	019-0524 秋田県横手市十文字町字本町13番3	(0182)42-0044	
◎浅舞支店	013-0105 秋田県横手市平鹿町浅舞字浅舞245番地	(0182)24-1301	
沼館支店	(浅舞支店内)		

男鹿・潟上・南秋田地区			店舗総数6(支店: 6)
店舗名	所在地	電話番号	
◎男鹿支店	010-0511 秋田県男鹿市船川港船川字栄町102番地	(0185)23-2215	
◎船越支店	010-0341 秋田県男鹿市船越字内子81番地1	(0185)35-3311	
◎昭和支店	018-1401 秋田県潟上市昭和久保字街道下68番地	(018)877-3130	
飯塚支店	(昭和支店内)		
◎八郎潟支店	018-1622 秋田県南秋田郡八郎潟町字一日市399番地10	(018)875-3120	
五城目支店	(八郎潟支店内)		

湯沢・雄勝地区			店舗総数6(支店: 5、出張所: 1)
店舗名	所在地	電話番号	
◎湯沢支店	012-0841 秋田県湯沢市大町二丁目1番13号	(0183)73-3101	
湯沢市新所出張所	012-8501 秋田県湯沢市佐竹町1番1号(湯沢市役所内)	(0183)73-5910	
横堀支店	(湯沢支店内)		
湯沢北支店	(湯沢支店内)		
◎稲川支店	012-0105 秋田県湯沢市川連町字平城下26番地の3	(0183)42-4855	
◎西馬音内支店	012-1131 秋田県雄勝郡羽後町西馬音内字本町46番地4	(0183)62-2100	

能代・山本地区			店舗総数5(支店: 5)
店舗名	所在地	電話番号	
◎能代支店	016-0825 秋田県能代市柳町11番1号	(0185)52-4343	
能代駅前支店	(能代支店内)		
二ツ井支店	(能代支店内)		
◎三種支店	018-2104 秋田県山本郡三種町鹿渡字西小瀬川1162番地1	(0185)87-2711	
山本支店	(三種支店内)		

由利本荘・にかほ地区			店舗総数9(支店: 9)
店舗名	所在地	電話番号	
◎本荘支店	015-0072 秋田県由利本荘市裏尾崎町51番地の2	(0184)22-0531	
本荘石盛支店	(本荘支店内)		
岩城支店	(本荘支店内)		
西目支店	(本荘支店内)		
◎本荘東支店	015-0852 秋田県由利本荘市一番堰159番地1	(0184)74-6727	
◎仁賀保支店	018-0402 秋田県にかほ市平沢字清水18番地3	(0184)35-2545	
◎象潟支店	018-0115 秋田県にかほ市象潟町字後田77番地1	(0184)43-2207	
金浦支店	(象潟支店内)		
酒田支店	(象潟支店内)		

大館・北秋田地区			店舗総数8(支店: 8)
店舗名	所在地	電話番号	
◎大館支店	017-0841 秋田県大館市字大町86番地	(0186)42-2216	
扇田支店	(大館支店内)		
大館東支店	(大館支店内)		
◎大館駅前支店	017-0044 秋田県大館市御成町三丁目6番79号	(0186)42-2522	
大館プラザ支店	(大館駅前支店内)		
◎鷹巣支店	018-3302 秋田県北秋田市栄字前綱85番地1	(0186)62-1352	
米内沢支店	(鷹巣支店内)		
合川支店	(鷹巣支店内)		

秋田県外			店舗総数2(支店: 2)
店舗名	所在地	電話番号	
◎仙台支店	980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町一丁目3番1号	(022)221-1201	
東京支店	103-0022 東京都中央区日本橋室町三丁目4番7号 日本橋室町プラザビル2階	(03)3279-0451	

その他			店舗総数1(支店: 1)
店舗名	所在地	電話番号	
あきたびじん支店	010-0923 秋田県秋田市旭北鎮町2-1	(0120)891-036	

〈専門ショップ〉

荘内銀行

◆鶴岡ロースクエア(鶴岡西支店内) 997-0046 山形県鶴岡市みどり町18番60号	(0235)25-3399
◆酒田ロースクエア(若竹町支店内) 998-0834 山形県若竹町二丁目4番5号	(0234)31-8651
◆山形住宅ロースクエア(ときめき通り支店内) 990-0061 山形県山形市五十鈴三丁目1番10号	(023)631-3713
◆天童住宅ロースクエア(天童中央支店内) 994-0026 山形県天童市東本町一丁目2番1号	(023)652-0451
◆宮城ロースクエア(桂ガーデンプラザ支店内) 981-3134 宮城県仙台市泉区桂一丁目1番1	(022)341-8505

◎荘内銀行を所属銀行とする銀行代理業者の商号、名称又は氏名

リリーほくと商事株式会社

〈ATMネットワーク〉

田川地区店舗外CD・ATM

■鶴岡市	◎主婦の店美原店
◎Sモール	◎コープ青柳
◎荘内病院	◎主婦の店新斎店
鶴岡市庁舎	◎鶴岡市温海庁舎
◎ショッピングセンターボイス	◎ねずが関
◎主婦の店鶴岡駅前店	◎マックスバリュ藤島店
◎鶴岡協同の家こびあ	◎鶴岡市藤島庁舎
◎ヤマザワくしびき	◎ファミリーマート鶴岡宝田店
◎主婦の店ミーナ店	◎茅原
◎マックスバリュ白山店	◎三瀬
◎主婦の店バル店	◎イオンモール三川
◎ヤマザワ鶴岡店	◎庄内たがわ農協 朝日支所
◎マックスバリュ鶴岡南店	◎コープ切添
◎鶴岡市羽黒庁舎	
	■庄内町
	◎ヤマザワ余目店

山形・上山地区店舗外CD・ATM

■山形市	山形県庁
山形市役所	◎山形県立中央病院
◎山形済生病院	◎ヨークベニマル落合店
◎諏訪町	◎イオン山形北店
山形大学小白川	◎イオンモール山形南店
◎山形西	△済生館病院
◎コープ鈴川	
◎ヤマザワ北町店	■上山市
	◎ヨークベニマル上山店

村山北地区店舗外CD・ATM

■寒河江市	◎宮脇書店天童店
◎チャンピオン寒河江市	◎イオンモール天童
◎マックスバリュ寒河江西店	
	■東根市
	◎ヤマザワ神町店
■村山市	
◎村山市役所	■河北町
	◎ヤマザワ谷地店
■天童市	
◎ららパーク天童	

飽海地区店舗外CD・ATM

■酒田市	◎錦町
◎庄内空港	◎コープなかのくち
◎日本海総合病院	◎ト一屋みずほ通り店
酒田市役所	◎イオン酒田南店
◎中町	◎観音寺
◎セイムス酒田北千日店	◎酒田市平田総合支所
◎東北公益文科大学	◎松山
◎ヤマザワ旭新町店	◎緑ヶ丘
◎ト一屋 新橋店	
◎卸町	■遊佐町
	◎遊佐エルパ

置賜地区店舗外CD・ATM

■米沢市	■南陽市
◎ヤマザワ花沢町店	◎マックスバリュ南陽店
◎舟山病院	
◎米沢	■川西市
	△公立置賜総合病院

最上地区店舗外CD・ATM

■新庄市	◎大蔵村役場
△県立新庄病院	◎新庄駅舎ゆめりあ
◎マルシェゴノメ新庄店	
◎ヤマザワ新庄店	■真室川町
	◎マックスバリュ真室川店

山形県外CD・ATM

◎イオンモール富谷	◎イオンモール石巻
◎秋田	

◎印 : 平日、土曜日、日曜日、祝日稼働

△印 : 平日、土曜日稼働

印なし : 平日のみ稼働

各店舗・ATMの営業時間については、当行ホームページをご覧ください。

(2023年7月31日現在)

〈専門ショップ〉

北都銀行

- ◆北都のほけん相談 御所野店
010-1413 秋田県秋田市御所野地蔵田一丁目1番1号 (018)826-1161
(イオンモール秋田1F 御所野支店内)
- ◆北都のほけん相談 秋田駅前店
010-0001 秋田県秋田市中通二丁目5番1号(秋田駅前支店内) (0120)123-865
- ◆北都のほけん相談 泉店
010-0918 秋田県秋田市泉南二丁目13番25号(泉支店内) (018)824-6178
- ◆北都のほけん相談 大館店
017-0044 秋田県大館市御成町三丁目6番79号(大館駅前支店内) (0186)42-1881
- ◆北都のほけん相談 横手店
013-0060 秋田県横手市糸里一丁目13番25号(横手西支店内) (0182)33-6020
- ◆北都のほけん相談 本荘店
015-0852 秋田県由利本荘市一番堰159番地1(本荘東支店内) (0184)74-6728

〈ATMネットワーク〉

秋田市内店舗外CD・ATM

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■中通・山王・八橋・泉地区 ◎秋田中央ビルディング(秋田西武) △秋田市市民市場 △中通病院(共同ATM) 秋田県庁(共同ATM) 秋田市役所 ◎ドン・キホーテ秋田店 秋田魁新報社(共同ATM) ◎マルダイ八橋店 ◎いとく新国道店 ◎グランマート泉店 | <ul style="list-style-type: none"> ■檜山・川尻・割山・茨島地区 ◎檜山 ◎イオン秋田中央店 ◎いとく川尻店 △たけや製パン前 ◎ナイス割山店 ◎コープあきた茨島店 ◎イオンタウン茨島パワーセンター |
| <ul style="list-style-type: none"> ■東通・広面地区 ◎明田 ◎イオンスタイル広面店 ◎いとく秋田東店 ◎ナイス山手台店 △秋田大学病院 秋田大学(共同ATM) | <ul style="list-style-type: none"> ■土崎地区 ◎コープあきた土崎店 ◎イオン土崎港店 ◎いとく土崎みなと店 ◎いとく自衛隊通店 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ■御所野・新屋・河辺地区 ◎イオンモール秋田 ◎スーパーセンターアマノ御所野店 ◎プレステージインターナショナル(企業内) ◎河辺市民サービスセンター |

能代・山本・潟上・南秋田地区店舗外CD・ATM

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■能代市 ◎ショッピングタウンアクロス能代 ◎いとく能代北店 ◎テラタバイパス店 ◎いとくニツ井ショッピングセンター ◎能代駅前 | <ul style="list-style-type: none"> ■潟上市 ◎ナイス追分店 ◎メルシティ潟上 |
| <ul style="list-style-type: none"> ■三種町 ◎山本 | <ul style="list-style-type: none"> ■五城目町 ◎イオンスーパーセンター五城目店 |

大館・鹿角・北秋田地区店舗外CD・ATM

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■大館市 ◎いとく大館東店 ◎いとく比内店 ◎イオンタウン大館西店 ◎いとく大館ショッピングセンター ◎ザ・ビッグ釈迦内店 ◎ザ・ビッグ大館南店 ◎イオンスーパーセンター大館店 | <ul style="list-style-type: none"> ■鹿角市 ◎いとく鹿角ショッピングセンター ◎十和田市民センター |
| | <ul style="list-style-type: none"> ■北秋田市 ◎北秋田市合川庁舎 ◎よないざわショッピングモール ◎いとくたかのすモール |

大仙・仙北地区店舗外CD・ATM

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■大仙市 ◎イーストモールタカヤナギ ◎大曲北 ◎大曲ショッピングセンター ◎イオン中仙店 ◎大仙市太田支所 ◎イオンモール大曲 | <ul style="list-style-type: none"> ■仙北市 ◎ワンダーモールタカヤナギ(角館) |
| | <ul style="list-style-type: none"> ■美郷町 ◎イオンスーパーセンター美郷店 |

横手地区店舗外CD・ATM

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■横手市 ◎横手駅前 ◎横手市大森庁舎 △横手卸センター ◎イオンスーパーセンター横手南店 | <ul style="list-style-type: none"> ◎よねや南店 ◎スーパーモールラッキー ◎グランマート十文字店 ◎マップスパリュ新雄物川店 ◎よねやハッピーモール |
|---|---|

湯沢地区店舗外CD・ATM

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■湯沢市 ◎湯沢市役所 ◎イオンスーパーセンター湯沢店 ◎グランマート湯沢インター店 ◎よねや千石大橋店 ◎道の駅おがち ◎パザール横堀店 | <ul style="list-style-type: none"> ■羽後町 ◎端縫いの郷 ◎西馬音内ショッピングセンター |
|---|---|

由利本荘・にかほ地区店舗外CD・ATM

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■由利本荘市 ◎イオンスーパーセンター本荘店 ◎グランマート石脇店 ◎グランマート一番堰店 ◎マップスパリュ新西目店 ◎ナイス本荘インター店 ◎岩城総合支所 | <ul style="list-style-type: none"> ■にかほ市 TDKにかほ工場前 ◎天ヶ町 にかほ市象潟庁舎 ◎にかほ市金浦庁舎 |
|--|---|

◎印 : 平日、土曜日、日曜日、祝日稼働

△印 : 平日、土曜日稼働

印なし : 平日のみ稼働

各店舗・ATMの営業時間については、当行ホームページをご覧ください。

事業の概況（フィデアホールディングス）

業績の概況（2022年度）

（金融経済環境）

当連結会計年度における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症の影響など一部に弱さがみられる中、緩やかな持ち直しの動きが続き、輸出などに弱い動きがみられるものの、住宅建設、公共投資が底堅い動きとなったほか、個人消費や設備投資は持ち直しの動きが続き、生産活動は総じてみれば持ち直し基調にあり、雇用環境の改善が続きます。

また、当社グループの主たる営業エリアである東北地方の経済においても、厳しい状況から緩やかな持ち直しの動きが続き、住宅投資の弱い動きが続いたものの、個人消費が持ち直し、生産活動は総じてみれば持ち直し基調にあり、雇用環境の改善が続きます。

なお、金融面につきましては、世界的なインフレ進展を受けてFRBやECBが大幅な利上げを継続するなか、日本銀行も12月にイールドカーブコントロールの変動幅を拡大（±0.25%→±0.50%）させると異次元金融緩和の転換が意識され、10年物国債金利は一時0.5%を超えて上昇するなど幅広い年限で上昇いたしました。日経平均株価は世界的な金融引締やウクライナ情勢の長期化が重石となった一方、コロナ禍からのインバウンド需要の回復、大幅な円安進行や良好な企業業績が相場を下支えし、ボックス圏での推移となりました。年度末にかけて米欧金融市場の混乱が重石となる場面が見られましたが、過度な懸念が後退するなかで小幅に上昇して年度の取引を終えております。

（業績）

当社グループの当連結会計年度の連結業績につきましては、連結経常収益は、有価証券利息配当金など資金運用収益を中心に前期比3億17百万円（0.6%）増加し514億11百万円となりました。また、連結経常費用は、国債等債券売却損などその他業務費用を中心に前期比13億47百万円（3.0%）増加し458億68百万円となりました。

資金利益は、主に預貸金利息差と有価証券利息配当金により構成されておりますが、前期比15億84百万円増加いたしました。貸出金利回りの低下により預貸金利息差が減少推移となる一方で、有価証券利息配当金が投資信託の解約損益を中心に増加いたしました。

役務取引等利益は、生命保険販売が伸長し預かり資産関連手数料が増加したほか、シンジケートローン及び事業承継、M&Aなど法人関連手数料が増加しております。

第4次中期経営計画の柱である経費の削減につきましては、前期比12億88百万円減少と計画を上回って進捗いたしました。人員の自然減を反映し人件費が減少したほか、投資案件の見直しや店舗統合効果などから物件費が減少しております。

与信関係費用は、お取引先の信用状況を反映し個別貸倒引当金繰入額が減少したことなどから、前期比5億11百万円減少しております。

また、市場部門につきましては、2022年に入って以降、金利環境の変化やウクライナ情勢に伴う金融市場の動向に対応し有価証券ポートフォリオの再構築を進めていることなどから、国債等債券損益及び株式等関係損益を中心に市場部門損益が減少しております。

以上を主な要因として、連結経常利益は前期比10億29百万円（15.6%）減少し55億43百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は前期比2億40百万円（6.8%）減少し32億66百万円となりました。

（財政状態）

当連結会計年度末における資産は前連結会計年度末比2,453億円（7.5%）減少の3兆198億円、負債は前連結会計年度末比2,267億円（7.1%）減少の2兆9,292億円、純資産は前連結会計年度末比186億円（17.0%）減少の906億円となりました。主な内訳は次のとおりであります。

・預金等（譲渡性預金を含む）

預金等（譲渡性預金を含む）の当連結会計年度末残高は個人預金及び法人預金を中心に前連結会計年度末比155億円（0.5%）増加し2兆7,273億円となりました。

・貸出金

貸出金の当連結会計年度末残高は営業地盤である山形県内及び秋田県内の事業性貸出を中心に前連結会計年度末比1,800億円（10.5%）増加し1兆8,921億円となりました。

・有価証券

有価証券の当連結会計年度末残高は前連結会計年度末比202億円（2.9%）減少し6,601億円となりました。

事業の概況（フィデアホールディングス）

2022年度までの3か年計画、第4次中期経営計画においてコンサルティング営業の実践に取り組むとともに、新型コロナウイルスの感染拡大対策を含めお取引先の資金ニーズに積極的に対応する中で、営業地盤である山形県内、秋田県内において事業性貸出が増加するとともに個人預金が増加しております。有価証券残高は、金利環境の変化、金融市場の動向を踏まえ、国債、地方債を中心に減少しております。

また、当社グループは、主に預金により資金調達を行い、事業性評価活動やコンサルティング営業の徹底により地域において金融仲介機能を発揮し、山形県、秋田県における県内事業性貸出金を中心とした資金運用を行っております。貸出金以外の運用資金について、主に有価証券により運用しておりますが、マイナス金利政策導入後は厳しい運用環境が継続しております。これまで有価証券運用の主体であった国債がマイナス金利となる中で、外国証券及び投資信託など運用資産の多様化を図るとともに、コールマーケットなどでのマイナス金利運用に伴う利息支払いを抑制することが可能な中央政府向けゼロ金利貸出においても運用しております。

（キャッシュ・フロー）

当連結会計年度の営業活動によるキャッシュ・フローは、貸出金の増加や借入金の減少等により、4,045億39百万円の支出（前連結会計年度比4,904億41百万円の増加）となりました。また、投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の売却及び償還による収入が取得による支出を上回ったこと等により、9億13百万円の収入（前連結会計年度比337億86百万円の減少）となりました。財務活動によるキャッシュ・フローは、自己株式の取得による支出や配当金の支払等により、72億35百万円の支出（前連結会計年度比2億14百万円の増加）となりました。

以上の結果、現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、前連結会計年度末比4,108億54百万円減少の3,120億37百万円となりました。

なお、当社グループにおいては、資本の財源について、期間損益の安定成長により自己資本の更なる積み上げを図っております。また、資金の流動性について、日次管理によりリスクの状況を把握し、定期的にALM会議、リスクマネジメント会議及び取締役会などにおいて報告、協議を実施するなど、適切なリスク管理体制を構築しております。

また、設備投資の資金調達の方法は自己資金であります。

主要な経営指標等の推移（連結）

（単位：百万円）

	2019年3月期	2020年3月期	2021年3月期	2022年3月期	2023年3月期
連結経常収益	48,883	50,864	53,191	51,094	51,411
連結経常利益	5,081	2,872	6,894	6,572	5,543
親会社株主に帰属する当期純利益	3,785	1,346	3,314	3,506	3,266
連結包括利益	4,957	△6,505	9,475	△3,959	△11,506
連結純資産額	119,508	111,800	120,073	109,233	90,621
連結総資産額	2,731,298	2,714,985	3,221,460	3,265,199	3,019,852
連結自己資本比率（国内基準）	9.50%	9.26%	9.61%	9.52%	9.20%

（注）連結自己資本比率は、銀行法第52条の25の規定に基づく平成18年金融庁告示第20号に定められた算式に基づき算出しております。当社は国内基準を採用しております。

連結計算書類（連結貸借対照表、連結損益計算書及び連結株主資本等変動計算書）は、会社法第396条第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。連結財務諸表（連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結キャッシュ・フロー計算書）は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。

連結財務諸表

連結財務諸表

◆連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
■資産の部		
現金預け金	725,949	316,923
買入金銭債権	3,811	4,016
商品有価証券	589	606
金銭の信託	51,717	57,981
有価証券	680,385	660,141
貸出金	1,712,140	1,892,149
外国為替	1,963	1,529
リース債権及びリース投資資産	5,091	6,250
その他資産	49,641	46,203
有形固定資産	23,518	21,317
建物	12,951	11,901
土地	8,290	7,246
リース資産	21	11
建設仮勘定	-	1
その他の有形固定資産	2,254	2,156
無形固定資産	2,280	1,860
ソフトウェア	2,090	1,708
のれん	44	14
その他の無形固定資産	145	137
退職給付に係る資産	1,081	1,299
繰延税金資産	2,662	4,346
支払承諾見返	17,958	19,065
貸倒引当金	△13,593	△13,841
資産の部合計	3,265,199	3,019,852
■負債の部		
預金	2,656,962	2,663,710
譲渡性預金	54,867	63,680
債券貸借取引受入担保金	52,825	41,651
借入金	343,800	116,000
外国為替	58	44
その他負債	25,758	23,441
役員賞与引当金	45	42
退職給付に係る負債	645	750
睡眠預金払戻損失引当金	126	58
偶発損失引当金	459	386
繰延税金負債	2,040	12
再評価に係る繰延税金負債	416	385
支払承諾	17,958	19,065
負債の部合計	3,155,965	2,929,230
■純資産の部		
資本金	18,000	18,000
資本剰余金	23,550	18,161
利益剰余金	55,942	57,858
自己株式	△24	△105
株主資本合計	97,468	93,914
その他有価証券評価差額金	10,317	△4,458
繰延ヘッジ損益	△203	△206
土地再評価差額金	914	850
退職給付に係る調整累計額	421	412
その他の包括利益累計額合計	11,449	△3,402
非支配株主持分	314	109
純資産の部合計	109,233	90,621
負債及び純資産の部合計	3,265,199	3,019,852

◆連結損益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年4月1日から 2022年3月31日まで)	当連結会計年度 (2022年4月1日から 2023年3月31日まで)
経常収益	51,094	51,411
資金運用収益	30,504	32,365
貸出金利息	18,450	17,859
有価証券利息配当金	11,366	14,282
コールローン利息及び買入手形利息	△0	△16
預け金利息	679	222
その他の受入利息	9	17
役員取引等収益	8,500	8,628
その他業務収益	7,641	7,539
その他経常収益	4,446	2,877
償却債権取立益	106	79
その他の経常収益	4,339	2,798
経常費用	44,521	45,868
資金調達費用	164	441
預金利息	135	113
譲渡性預金利息	4	3
コールマネー利息及び売渡手形利息	△25	△16
債券貸借取引支払利息	42	168
借入金利息	0	0
その他の支払利息	7	172
役員取引等費用	3,457	3,365
その他業務費用	9,842	13,803
営業経費	25,702	24,253
その他経常費用	5,354	4,005
貸倒引当金繰入額	2,116	1,800
その他の経常費用	3,237	2,204
経常利益	6,572	5,543
特別利益	6	26
固定資産処分益	2	26
補助金収入	3	-
特別損失	950	1,040
固定資産処分損	287	559
減損損失	659	480
固定資産圧縮損	3	-
税金等調整前当期純利益	5,628	4,528
法人税、住民税及び事業税	1,579	997
法人税等調整額	517	249
法人税等合計	2,097	1,247
当期純利益	3,531	3,281
非支配株主に帰属する当期純利益	25	15
親会社株主に帰属する当期純利益	3,506	3,266

◆連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年4月1日から 2022年3月31日まで)	当連結会計年度 (2022年4月1日から 2023年3月31日まで)
当期純利益	3,531	3,281
その他の包括利益	△7,491	△14,788
その他有価証券評価差額金	△7,943	△14,776
繰延ヘッジ損益	184	△2
退職給付に係る調整額	267	△9
包括利益	△3,959	△11,506
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△3,981	△11,521
非支配株主に係る包括利益	21	14

連結財務諸表

◆連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度 (2021年4月1日から2022年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	18,000	29,197	53,564	△6	100,756
会計方針の変更による 累積的影響額			96		96
会計方針の変更を反映した 当期首残高	18,000	29,197	53,660	△6	100,852
当期変動額					
剰余金の配当			△1,310		△1,310
親会社株主に帰属する当期純利益			3,506		3,506
自己株式の取得				△5,665	△5,665
自己株式の処分		△0		0	0
自己株式の消却		△5,647		5,647	-
土地再評価差額金の取崩			86		86
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)					
当期変動額合計	-	△5,647	2,281	△18	△3,383
当期末残高	18,000	23,550	55,942	△24	97,468

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	18,255	△387	1,000	154	19,023	293	120,073
会計方針の変更による 累積的影響額							96
会計方針の変更を反映した 当期首残高	18,255	△387	1,000	154	19,023	293	120,169
当期変動額							
剰余金の配当							△1,310
親会社株主に帰属する当期純利益							3,506
自己株式の取得							△5,665
自己株式の処分							0
自己株式の消却							-
土地再評価差額金の取崩							86
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	△7,938	184	△86	267	△7,573	21	△7,552
当期変動額合計	△7,938	184	△86	267	△7,573	21	△10,935
当期末残高	10,317	△203	914	421	11,449	314	109,233

当連結会計年度 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	18,000	23,550	55,942	△24	97,468
当期変動額					
剰余金の配当			△1,414		△1,414
親会社株主に帰属する当期純利益			3,266		3,266
自己株式の取得				△5,553	△5,553
自己株式の処分		0		54	55
自己株式の消却		△5,418		5,418	—
連結子会社の自己株式の取得による持分の増減		28			28
土地再評価差額金の取崩			64		64
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)					
当期変動額合計	—	△5,389	1,915	△80	△3,554
当期末残高	18,000	18,161	57,858	△105	93,914

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	10,317	△203	914	421	11,449	314	109,233
当期変動額							
剰余金の配当							△1,414
親会社株主に帰属する当期純利益							3,266
自己株式の取得							△5,553
自己株式の処分							55
自己株式の消却							—
連結子会社の自己株式の取得による持分の増減							28
土地再評価差額金の取崩							64
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	△14,775	△2	△64	△9	△14,851	△205	△15,057
当期変動額合計	△14,775	△2	△64	△9	△14,851	△205	△18,611
当期末残高	△4,458	△206	850	412	△3,402	109	90,621

連結財務諸表

◆連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年4月1日から 2022年3月31日まで)	当連結会計年度 (2022年4月1日から 2023年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	5,628	4,528
減価償却費	1,925	1,920
減損損失	659	480
のれん償却額	29	29
貸倒引当金の増減(△)	44	247
役員賞与引当金の増減額(△は減少)	15	△2
退職給付に係る資産の増減額(△は増加)	△37	△197
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	60	42
睡眠預金払戻損失引当金の増減(△)	△112	△68
偶発損失引当金の増減(△)	16	△73
資金運用収益	△30,504	△32,365
資金調達費用	164	441
有価証券関係損益(△)	2,019	4,946
金銭の信託の運用損益(△は運用益)	△297	△338
為替差損益(△は益)	△9	△7
固定資産処分損益(△は益)	284	533
固定資産圧縮損	3	—
補助金収入	△3	—
貸出金の純増(△)減	19,084	△180,009
預金の純増減(△)	63,606	6,747
譲渡性預金の純増減(△)	△2,285	8,812
商品有価証券の純増(△)減	△36	△16
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減(△)	20,100	△227,800
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減	△27	△1,828
コールローン等の純増(△)減	△35	△204
債券貸借取引受入担保金の純増減(△)	△23,174	△11,173
外国為替(資産)の純増(△)減	△358	433
外国為替(負債)の純増減(△)	42	△14
リース債権及びリース投資資産の純増(△)減	△842	△1,158
資金運用による収入	30,785	32,386
資金調達による支出	△211	△382
その他	1,218	△7,820
小計	87,752	△401,911
法人税等の支払額	△1,849	△2,628
営業活動によるキャッシュ・フロー	85,902	△404,539
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△478,619	△504,010
有価証券の売却による収入	410,524	317,768
有価証券の償還による収入	108,551	193,459
金銭の信託の増加による支出	△4,000	△7,000
金銭の信託の減少による収入	105	981
有形固定資産の取得による支出	△1,384	△616
有形固定資産の売却による収入	46	662
無形固定資産の取得による支出	△528	△331
無形固定資産の売却による収入	0	—
補助金による収入	3	—
投資活動によるキャッシュ・フロー	34,700	913
財務活動によるキャッシュ・フロー		
リース債務の返済による支出	△47	△80
配当金の支払額	△1,308	△1,411
自己株式の取得による支出	△5,665	△5,553
自己株式の売却による収入	0	0
子会社の自己株式の取得による支出	—	△191
財務活動によるキャッシュ・フロー	△7,021	△7,235
現金及び現金同等物に係る換算差額	9	7
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	113,590	△410,854
現金及び現金同等物の期首残高	609,301	722,891
現金及び現金同等物の期末残高	722,891	312,037

(当連結会計年度)

注記事項

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項】

1. 連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社 6社
株式会社荘内銀行
株式会社北都銀行
フィデアカード株式会社
フィデアリース株式会社
株式会社フィデア情報総研
株式会社フィデアキャピタル
- (2) 非連結子会社 4社
荘銀あぐり応援ファンド投資事業有限責任組合
荘銀地域協奏ファンド投資事業組合
北都成長応援ファンド投資事業組合
フィデア地方創生ファンド投資事業組合
非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

- (1) 持分法適用の非連結子会社
該当事項はありません。
- (2) 持分法適用の関連会社
該当事項はありません。
- (3) 持分法非適用の非連結子会社 4社
荘銀あぐり応援ファンド投資事業有限責任組合
荘銀地域協奏ファンド投資事業組合
北都成長応援ファンド投資事業組合
フィデア地方創生ファンド投資事業組合
持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。
- (4) 持分法非適用の関連会社
該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は次のとおりであります。
3月末日 6社

4. 会計方針に関する事項

- (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。
- (2) 有価証券の評価基準及び評価方法
 - (イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他有価証券については時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - (ロ) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
- (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
- (4) 固定資産の減価償却の方法
 - ① 有形固定資産（リース資産を除く）
当社及び連結子会社の有形固定資産は、定額法を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建 物：5年～50年
その他：4年～20年
 - ② 無形固定資産（リース資産を除く）
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間（主として5年）に基づいて償却しております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

銀行業を営む連結子会社及び主要な連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

① 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、原則、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

なお、株式会社北都銀行及び一部の連結子会社における破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は13,148百万円であります。

② 現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額（以下、「非保全額」という。）のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。具体的には、

(イ) 非保全額に対して今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

(ロ) 上記の債務者に係る債権のうち、非保全額が一定額以上の債務者に係る債権については、上記(イ)で算定した予想損失額に基づく貸倒引当金の十分性を個別に検証し、必要に応じて、債務者の財政状態に基づき合理的に見積もられた回収可能額を非保全額から控除した残額を計上しております。

③ 貸出条件緩和債権等を有する債務者に係る債権については、今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

④ 上記以外の債権については、今後1年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

⑤ その他の連結子会社の貸倒引当金については貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署の協力の下に資産査定部署が資産査定を実施した上で、資産査定部署より独立した資産監査部署で査定結果を監査しております。

(6) 役員賞与引当金の計上基準

役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込み額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(7) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

(8) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度に係る信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来発生する可能性のある負担金支払見積額を計上しております。

(9) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年～13年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生時の翌連結会計年度から損益処理

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

連結財務諸表

(10) 重要な収益及び費用の計上基準

当社及び連結子会社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務は、預金・貸出業務、為替業務、証券関連業務、代理業務、保護預り・貸金庫業務等の各種サービスの提供であります。

ATM利用手数料や口座振替手数料（預金・貸出業務）、国内外の送金手数料（為替業務）、公社債引受手数料（証券関連業務）、投資信託や保険の販売手数料（代理業務）等については取引が発生又は関連サービスが提供された時点において履行義務を充足するものとして収益を認識しております。また、貸金庫手数料（保護預り・貸金庫業務）等、関連サービスが提供される期間にわたって履行義務を充足するものについては、当該期間にわたって収益を認識しております。

(11) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

連結子会社の外貨建資産・負債については、それぞれの決算日等の為替相場による円換算額を付しております。

外貨建その他有価証券のうち債券に係る換算差額について、外国通貨による時価の変動を評価差額として処理し、それ以外を外国為替売買損益（「その他業務収益」又は「その他業務費用」）として処理しております。

(12) 重要なヘッジ会計の方法

(i) 金利リスク・ヘッジ

銀行業を営む連結子会社における金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日。以下、「業種別委員会実務指針第24号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の（残存）期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。その他有価証券に区分している固定金利の債券の相場変動を相殺するヘッジにおいては、同一種類毎にヘッジ対象を識別し、金利スワップ取引をヘッジ手段として指定しております。ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件がほぼ同一となるようなヘッジ指定を行っているため、高い有効性があるとみなしており、これをもって有効性の判定に代えております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

(ii) 為替変動リスク・ヘッジ

銀行業を営む連結子会社における外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 令和2年10月8日。以下、「業種別委員会実務指針第25号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

また、外貨建その他有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして時価ヘッジを適用しております。

(iii) 株価変動リスク・ヘッジ

銀行業を営む連結子会社のその他有価証券のうち、保有する株式から生じる株価変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、株式先渡取引等をヘッジ手段とする繰延ヘッジによっております。

なお、ヘッジ有効性評価の方法については、原則としてヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とを定期的に比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。ただし、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件が同一であり、ヘッジに高い有効性があることが明らかなものについては、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

(13) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。ただし、のれんの金額に重要性が乏しい場合には、発生年度に全額償却しております。

(14) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(15) 関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

(i) 投資信託の解約・償還に伴う損益について、期中収益分配金等を含めた投資信託全体で益の場合は「有価証券利息配当金」に計上し、損の場合は国債等債券償還損（「その他業務費用」）に計上しております。

(ii) 当社の取締役（社外取締役及び監査委員を除く）及び執行役、並びに銀行業を営む連結子会社の取締役（社外取締役及び監査等委員を除く）及び執行役員に対する譲渡制限付株式報酬に係る費用は、付与日における当社株式の時価で測定しております。また、費用処理については、対象勤務期間にわたって人件費（「営業経費」）に計上しております。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当連結会計年度に係る連結財務諸表にその額を計上した項目であって、翌連結会計年度に係る連結財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

1. 貸倒引当金

(1) 当連結会計年度に係る連結財務諸表に計上した額

貸倒引当金 13,841百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

貸倒引当金の算出方法は、注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）「4. 会計方針に関する事項」〔(5)貸倒引当金の計上基準〕に記載しております。

② 主要な仮定

貸倒引当金の算定にあたり、債務者の区分の判断が特に重要となります。

債務者の区分の判断に用いた主要な仮定は、「貸出先の将来の業績見通し」であります。「貸出先の将来の業績見通し」は、個々の債務者の経営成績、財政状態、貸出条件、返済履行状況、経営改善計画の策定や進捗状況といった定量的要素及び定性的要素に関する情報を収集し、それらを踏まえて総合的に判断した上で、各債務者の収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。

なお、新型コロナウイルスの感染の影響に伴い、主に貸出金等の信用リスクに一定の影響を及ぼす可能性があります。新型コロナウイルス感染症の経済への影響は一部の企業等において今後数年程度続くものと想定しておりますが、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけの変更や政府や地方公共団体の経済対策及び金融機関の支援等により経済活動は改善していくという仮定のもと貸倒引当金を算定しております。

③ 翌連結会計年度に係る連結財務諸表に及ぼす影響

主要な仮定である「貸出先の将来の業績見通し」は、不確実性が高く、貸出先の状況や新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、債務者の区分の判断に重要な影響を与えるリスクがあります。債務者の区分が変動した場合には、翌連結会計年度に係る連結財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

なお、新型コロナウイルス感染症に係る見積りは当連結会計年度末時点において得られる情報により想定される事象を網羅し算定しておりますが、現在の経済環境下においては見積りに用いた仮定の不確実性は高く、感染の状況、期間及びその他経済への影響度合いなどが変化した場合には、翌連結会計年度に係る連結財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

2. 繰延税金資産

(1) 当連結会計年度に係る連結財務諸表に計上した額

繰延税金資産 4,346百万円

繰延税金負債 12百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

繰延税金資産とは、連結貸借対照表に計上される資産及び負債の金額と課税所得計算上の資産及び負債の金額との差額である一時差異及び税務上の繰越欠損金のうち、当該一時差異等が解消する時にその期の課税所得を減額させ、税金負担額を軽減することが認められる範囲内で計上する資産であります。そのため、繰延税金資産は将来の税金負担額を軽減する効果を有するかどうかについて回収可能性の判断を行い、その上で回収が見込まれる金額を計上しております。また、将来の回収の見込みについては毎期見直しを行っております。

具体的には、将来の合理的な見積可能期間（5年）の一時差異等加減算前課税所得の見積額に基づいて、当該見積可能期間の一時差異等のスケジュールリングの結果、繰延税金資産を見積もっております。スケジュールリングに関しては特に個別貸倒引当金に関する将来減算一時差異等が重要であり、一定金額以上の個別貸倒引当金に関しては税務上の損金の算入要件の充足内容及び時期を詳細に分析したうえでスケジュールリングしております。

② 主要な仮定

繰延税金資産の回収可能性の判断にあたり、将来の課税所得の見積りが特に重要となります。

将来の課税所得の見積りは、当社グループの利益計画に基づいており、当該計画は過去実績及び市場実勢利回り並びに新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等を考慮して策定されております。当該計画策定に用いた主要な仮定は、「お客さま支援の徹底と経営基盤強化」という基本方針のもと設定している「顧客支援力の強化による収益拡大の見通し」、「経費構造改革による人件費などの経費削減の見通し」であります。なお、利益計画達成の不確実性を考慮し、当該計画に対して一定のストレスを付加して繰延税金資産の回収可能性を判断しております。

③ 翌連結会計年度に係る連結財務諸表に及ぼす影響

繰延税金資産の回収可能性の判断は、毎決算期末時点において実施しておりますが、主要な仮定である「顧客支援力の強化による収益拡大の見通し」、「経費構造改革による人件費などの経費削減の見通し」は、不確実性が高く、新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、利益計画に基づく将来の課税所得の見積りが変動することにより、繰延税金資産の回収可能性の判断に重要な影響を与えるリスクがあります。将来において将来減算一時差異等を解消させるほどの十分な課税所得が見積もれないことにより、前連結会計年度に計上した繰延税金資産の一部、又は全額の回収ができないと判断した場合には、当社グループの繰延税金資産を取り崩し、同額を法人税等調整額として計上することとなります。

3. 固定資産の減損

(1) 当連結会計年度に係る連結財務諸表に計上した額
減損損失 480百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

固定資産の減損の算出方法は、注記事項「(連結損益計算書関係)」に記載しております。

② 主要な仮定

減損損失を認識するかどうかの判定に際して見積られる将来キャッシュ・フロー及び使用価値の算定において見積られる将来キャッシュ・フローは、企業に固有の事情を反映した合理的で説明可能な仮定及び予測に基づいて見積る必要がありますが、当該将来キャッシュ・フローは、上記「2. 繰延税金資産」で記載した繰延税金資産の回収可能性を判断するための一定のストレスを付加した利益計画に基づいて算出しております。

③ 翌連結会計年度に係る連結財務諸表に及ぼす影響

上記「2. 繰延税金資産」で記載した利益計画の策定に用いた主要な仮定は、不確実性が高く、新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、利益計画に基づく将来のキャッシュ・フローの見積りが変動することにより、減損損失の認識の判定及び使用価値の算定に重要な影響を与えるリスクがあります。将来キャッシュ・フローの見積額が減少することとなった場合には、追加的な減損処理が必要となる可能性があります。

(会計方針の変更)

(時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日。以下、「時価算定会計基準適用指針」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。これによる当連結会計年度の連結財務諸表への影響はありません。

なお、「金融商品関係」注記の金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項における投資信託に関する注記事項においては、時価算定会計基準適用指針第27-3項に従って、前連結会計年度に係るものについては記載していません。

また、当該注記において、前連結会計年度は、「外国証券」を有価証券の

「その他」に含めて表示してはありますが、金融商品をより詳細に区分して表示するため、当連結会計年度から「外国証券」として区分して表示することとしております。

(連結貸借対照表関係)

1. 非連結子会社の出資金の総額は、500百万円であります。

2. 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、連結貸借対照表の「有価証券」中の社債(その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)によるものに限る。)、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)であります。

破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	8,683百万円
危険債権額	27,189百万円
三月以上延滞債権額	一百万円
貸出条件緩和債権額	891百万円
合計額	36,764百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。

なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

3. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は2,499百万円であります。

4. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	
有価証券	157,783百万円
担保資産に対応する債務	
債券貸借取引受入担保金	41,651百万円
借入金	116,000百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券99,397百万円、現金預け金8百万円、その他資産32,000百万円を差し入れております。

また、その他資産には、保証金294百万円が含まれております。

5. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は298,319百万円であります。

このうち原契約期間が1年以内のもの(又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)が280,781百万円であります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

連結財務諸表

6. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、株式会社荘内銀行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日
1999年9月30日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第3号に定める土地課税台帳に登録されている価格に基づいて、（奥行価格補正、時点修正、近隣売買事例等による補正等）合理的な調整を行って算出する方法及び同条第5号に定める不動産鑑定士による鑑定評価によって算出する方法を併用しております。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額
858百万円

7. 有形固定資産の減価償却累計額 29,179百万円

8. 有形固定資産の圧縮記帳額 957百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額) (一百万円)

9. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額は、31,603百万円であります。

(連結損益計算書関係)

1. 営業経費には、給料・手当10,718百万円、退職給付費用257百万円、業務委託費2,596百万円を含んでおります。

2. その他の経常費用には、株式等売却損1,400百万円を含んでおります。

3. 減損損失は次のとおりであります。

区分	地域	主な用途	種類	減損損失
稼働資産	秋田県内	営業店舗4カ所	土地及び建物	147百万円
稼働資産	山形県内	営業店舗2カ所	土地及び建物	119百万円
共用資産	山形県内	共用資産3カ所	土地及び建物	205百万円
遊休資産	山形県内	遊休資産1カ所	建物	7百万円
合計				480百万円

営業活動から生ずる損益の減少によるキャッシュ・フローの低下や遊休状態、売却方針の決定等となった上記資産について、帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額480百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

銀行業を営む連結子会社の営業店舗については、管理会計上の最小区分である営業店単位（ただし、連携して営業を行っている営業店グループは当該グループ単位、同一建物内で複数店舗が営業している営業店グループは当該グループ単位）でグルーピングを行っております。また、遊休資産や売却予定資産は、各資産を最小の単位としております。本部、事務センター等については、複数の資産又は資産グループの将来キャッシュ・フローの生成に寄与する資産であるため共用資産としております。

当社及び銀行業以外の連結子会社は、原則として各社単位でグルーピングを行っております。

当該資産グループの回収可能額は、正味売却価額により測定しており、不動産鑑定評価額や路線価等の市場価格を適切に反映している価額から処分費用見込額を控除して算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金	
当期発生額	△23,664百万円
組替調整額	4,929百万円
税効果調整前	△18,735百万円
税効果額	3,959百万円
その他有価証券評価差額金	△14,776百万円
繰延ヘッジ損益	
当期発生額	△3百万円
組替調整額	－百万円
税効果調整前	△3百万円
税効果額	1百万円
繰延ヘッジ損益	△2百万円
退職給付に係る調整額	
当期発生額	121百万円
組替調整額	△163百万円
税効果調整前	△41百万円
税効果額	32百万円
退職給付に係る調整額	△9百万円
その他の包括利益合計	△14,788百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項
(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	18,142	－	－	18,142	
B種優先株式	1,250	－	1,250	－	(注)1
合計	19,392	－	1,250	18,142	
自己株式					
普通株式	17	107	42	81	(注)2,3
B種優先株式	－	1,250	1,250	－	(注)4
合計	17	1,357	1,292	81	

(注) 1. B種優先株式の発行済株式の減少1,250千株は、自己株式の消却によるものであります。
2. 普通株式の自己株式の増加株式数は市場買付によるもの100千株及び単元未満株式買取請求によるもの7千株であります。
3. 普通株式の自己株式の減少株式数は譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分によるもの42千株及び単元未満株式買取請求によるもの0千株であります。
4. B種優先株式の自己株式の増加1,250千株は2023年2月24日開催の取締役会決議に基づく取得によるものであります。また、減少1,250千株は消却によるものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年 5月13日 取締役会	普通株式	679	37.50	2022年 3月31日	2022年 6月2日
	B種優先株式	28	23.12	2022年 3月31日	2022年 6月2日
2022年 11月10日 取締役会	普通株式	677	37.50	2022年 9月30日	2022年 12月5日
	B種優先株式	29	23.20	2022年 9月30日	2022年 12月5日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年5月12日取締役会	普通株式	677	利益剰余金	37.50	2023年3月31日	2023年6月2日

(注) 2023年2月24日開催の取締役会決議に基づきB種優先株式の全株式を取得及び消却したため、種類株式は該当ありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	316,923百万円
預け金(日銀預け金を除く)	△4,886百万円
現金及び現金同等物	312,037百万円

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

1. リース資産の内容

・有形固定資産

主として電子計算機等であります。

2. リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項」の「(4)固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、主として国内の法人や個人のお客さまへの貸出及び債券や株式、投資信託等の有価証券による運用等の銀行業務を中心とした金融情報サービスを行っております。これらの事業を健全に行っていくため、経営体力の範囲内でリスクを許容し、収益力の向上を目指しております。

当社グループでは、主として金利変動等を伴う金融資産及び金融負債を保有していることから、金利変動等による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合管理(ALM)を行うほか、必要に応じてデリバティブ取引を実施しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する金融資産には、主として国内の法人及び個人のお客さまに対する貸出金があり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託及び組合出資金であり、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

主な金融負債である預金及び譲渡性預金は、主として国内の法人及び個人のお客さまの預け入れによるものです。集中的な預金の解約等による流動性リスクに留意する必要がありますが、預金等の大部分は個人のお客さまによるもので小口分散されているほか、大口預金の比率を一定以下にコントロールする等により当該リスクを抑制しております。

デリバティブ取引には、ALMの一環で行っている金利スワップ取引、及びその他有価証券で保有する債券に対する先物取引、オプション取引等があります。デリバティブ取引は、投機的な取引を目的とするものではなく、主としてヘッジ目的で実施しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当社グループでは、「リスク管理基本方針」及び各種リスク管理規程を定め、以下のリスク管理を実施する体制を整備しております。

① 信用リスクの管理

当社グループは、「クレジットポリシー」及び「信用リスク管理規程」等に従い、貸出金について、個別案件毎の与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、自己査定等の事後管理、保証や担保の設定、問題債権への対応、与信集中リスク管理等と信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店のほか融資担当部門により行われ、また、定期的に経営会議等を開催し、審議・報告を行っております。さらに、与信管理の状況については監査担当部門がチェックしております。

② 市場リスクの管理

市場取引については、フロントオフィス、ミドルオフィス及びバックオフィスをそれぞれ独立した部署とし、相互に牽制する体制としております。

(イ) 金利リスクの管理

当社グループは、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。「市場リスク管理規程」等の規程に従い、金利リスク量を計測するとともに、定期的にギャップ分析や感応度分析等によりモニタリングを実施し、定期的に経営会議等に報告しております。また、現状分析を踏まえた今後の対応等の協議を行っております。

(ロ) 為替リスクの管理

当社グループは、「市場リスク管理規程」等に従い、為替の変動リスクに関して、総合持高、損失限度額を設定する、若しくはヘッジ取引を行う等により管理しております。

(ハ) 価格変動リスクの管理

当社グループは、「市場リスク管理規程」等に従い、価格変動リスクを管理しております。有価証券のリスクはバリュー・アット・リスク(VaR)、10BPV等リスク指標に基づいて、予め設定した限度額に対する使用状況をリスク管理部門が日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(ニ) デリバティブ取引

デリバティブ取引の取扱いにつきましては、取引の執行、ヘッジ取引の有効性検証、事務管理に係る部門を分離し、取扱規程に基づいた運用・管理のもとに行っております。

(ホ) 市場リスクに係る定量的情報

トレーディング目的以外の金融商品

当社グループでは時価が日次で変動する商品を多数保有し、その変動額も他のリスクカテゴリーと比較して大きいため、VaRを用いた市場リスク量を日次(預金・貸出金等の金利リスク量は月次)で把握・管理しております。当社グループの市場リスク量は、子銀行である荘内銀行及び北都銀行の市場リスク量を合算した値として管理しております。

2023年3月期の当社グループのバンキング業務の市場リスク量は次のとおりであります。

<バンキング勘定のリスク量>

(単位: 億円)

	平均	最大	最小	年度末
預金・貸出金等	0	0	0	0
有価証券	318	381	271	378
債券	116	194	68	192
株式	39	49	24	31
その他	230	297	191	297

(*1) VaRの計測手法は、原則として「分散共分散手法」で計測しております。

(*2) 保有期間は、有価証券のうち市場流動性の高い金融商品(国債、地方債、上場株式(除く政策投資)等)は60営業日(上場株式のうち政策投資銘柄は250営業日)、市場流動性の低い金融商品及び預金・貸出金等は125営業日及び250営業日で算出しております。

(*3) 信頼区間は99%、変動率を計測するための市場データの抽出期間は250営業日を使用しております。

(*4) 有価証券の「債券」と「株式」のリスクファクター間で相関を考慮しているため、合計値が合致しません。

(*5) 現在の預金・貸出等の金利リスク量は、金利上昇リスクではなく、金利低下リスクを表すものとなっております。内部管理上は金利上昇リスクを管理することとしており、預金・貸出等の金利リスク量を「0」としております。

なお、当社グループでは、有価証券のVaRについて、市場リスク量の計測モデルの正確性を検証するため、モデルが計測した保有期間1日のVaRと実際の損失を比較するバックテストを子銀行毎に実施しております。

現在使用している計測モデルは、相応の精度により市場リスクを捕捉しているものと考えられますが、変動率(ボラティリティ)の上昇により、リスク量(VaR)の増加が見込まれる局面では、随時対応を図り保守的に運営してまいります。

VaRによるリスク管理を行うにあたっては、特に以下の点に十分留意して活用することとしております。

(i) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、統計的な仮定に基づいて算定したものであり、前提条件や算定方法等によって異なる値となること

連結財務諸表

(ii) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、前提条件等に基づいて算定した統計的な値であり、最大損失額の予測を意図するものではないこと（信頼区間に応じた頻度で損益がVaRを上回ることが想定されること）

(iii) 将来の市場の状況は、過去とは大きく異なることがあること
なお、トレーディング目的の金融商品につきましては、いずれの子銀行においても保有残高が極めて少なく、経営に与える重要性が限定的であるため開示対象外としております。

③ 流動性リスクの管理

当社グループは、「流動性リスク管理規程」等に従い、流動性リスク管理に係る限度額を設定し、実績を日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は、次表には含めておりません（注1）参照）。また、現金預け金、買入金銭債権、外国為替（資産・負債）、債券貸借取引受入担保金は、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額の注記を省略しております。

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 商品有価証券			
売買目的有価証券	606	606	—
(2) 金銭的信託	57,981	57,981	—
(3) 有価証券（*1）			
その他有価証券	655,663	655,663	—
(4) 貸出金	1,892,149		
貸倒引当金（*2）	△13,400		
	1,878,749	1,898,241	19,492
資産計	2,593,001	2,612,493	19,492
(1) 預金	2,663,710	2,663,712	1
(2) 譲渡性預金	63,680	63,680	—
(3) 借入金	116,000	115,956	△43
負債計	2,843,390	2,843,349	△41
デリバティブ取引（*3）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(337)	(337)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	236	236	—
デリバティブ取引計	(100)	(100)	—

(*1) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24-3項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託が含まれております。なお、第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は該当ありません。

(*2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(*3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	当連結会計年度 (2023年3月31日)
非上場株式（*1）（*2）	1,618
組合出資金（*3）	2,859

(*1) 非上場株式については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 令和2年3月31日）第5項に基づき、時価開示の対象とはしてしておりません。

(*2) 非上場株式について16百万円減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24-16項に基づき、時価開示の対象とはしてしておりません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金（*1）	283,589	—	—	—	—	—
買入金銭債権	4,016	—	—	—	—	—
有価証券						
その他有価証券のうち満期があるもの	43,112	88,873	105,470	62,996	121,411	163,308
うち国債	8,000	6,000	1,000	3,000	41,250	45,000
地方債	16,435	38,046	32,551	26,836	32,556	40,277
社債	8,729	18,690	14,958	10,142	250	69,985
その他	9,948	26,136	56,960	23,016	47,355	8,045
貸出金（*2）	476,426	318,476	276,684	188,223	180,950	367,156
合 計	807,145	407,349	382,154	251,219	302,362	530,465

(*1) 預け金のうち、期間の定めのないものは「1年以内」に含めて開示しております。

(*2) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない32,957百万円、期間の定めのないもの51,274百万円は含めておりません。

(注3) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金（*）	2,371,283	86,792	6,109	—	—	—
譲渡性預金	63,680	—	—	—	—	—
債券貸借取引受入担保金	41,651	—	—	—	—	—
借入金	106,200	4,900	4,900	—	—	—
合 計	2,582,815	91,692	11,009	—	—	—

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

(単位：百万円)

区 分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合 計
金銭の信託	-	57,981	-	57,981
有価証券				
売買目的有価証券				
国債・地方債等	-	606	-	606
その他有価証券				
国債・地方債等	103,450	184,449	-	287,899
社債	-	89,853	31,662	121,516
株式	14,439	-	-	14,439
外国証券	1,154	56,452	-	57,606
投資信託	21,509	148,652	-	170,161
デリバティブ取引				
金利関連	-	433	-	433
通貨関連	-	358	-	358
株式関連	-	20	-	20
資産計	140,553	538,808	31,662	711,024
デリバティブ取引				
金利関連	-	134	-	134
通貨関連	-	779	-	779
負債計	-	913	-	913

(*) 1) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は含まれておりません。

第24-3項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額は4,040百万円であります。

第24-9項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額はありません。

(*) 2) ① 第24-3項の取扱いを適用した投資信託の期首残高から期末残高への調整表

(単位：百万円)

期首残高	当期の損益又はその他の包括利益		購入、売却及び償還の純額	投資信託の基準価額を時価とみなすこととした額	投資信託の基準価額を時価とみなさなかった額	期末残高	当期の損益に計上した額のうち連結貸借対照表日において保有する投資信託の評価損益
	損益に計上	その他の包括利益に計上(*)					
4,000	-	40	-	4,040	-	4,040	-

(*) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

② 連結決算日における解約又は買戻請求に関する制限の内容ごとの内訳

(単位：百万円)

解約又は買戻請求に関する制限の主な内容	連結貸借対照表計上額
解約に際し、1カ月超前に事前通告が必要となる	4,040

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

(単位：百万円)

区 分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合 計
貸出金	-	-	1,898,241	1,898,241
資産計	-	-	1,898,241	1,898,241
預金	-	2,663,712	-	2,663,712
譲渡性預金	-	63,680	-	63,680
借入金	-	115,956	-	115,956
負債計	-	2,843,349	-	2,843,349

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明
資 産

金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている金融商品については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっております。観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

売買目的有価証券及びその他有価証券

売買目的有価証券及びその他有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に地方債、社債がこれに含まれます。

相場価格が入手できない場合には、将来キャッシュ・フローの現在価値技法などの評価技法を用いて時価を算定しております。評価に当たっては観察可能なインプットを最大限利用しており、インプットには、TIBOR、国債利回り、期限前返済率、信用スプレッド、倒産確率、倒産時の損失率等が含まれます。算定にあたり重要な観察できないインプットを用いている場合には、レベル3の時価に分類しております。

また、市場における取引価格が存在しない投資信託について、解約又は買戻請求に関して市場参加者からリスクの対価を求められるほどの重要な制限がない場合には基準価額を時価とし、レベル2の時価に分類しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

貸出金

貸出金のうち、残存期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限る等の特性により返済期限を設けていないものについては、返済見込期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を信用格付ごとの信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。また、変動金利によるものは、内部格付、期間に基づく区分ごとに、原則として金利満期までの元利金の合計額を信用格付毎の信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。

なお、信用リスクスプレッドは信用格付ごとの累積デフォルト率、ロス率を基に残存期間別に計算しております。

貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

時価に対して観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

負 債

預金、及び譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価としております。また、定期預金については、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いた現在価値により時価を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際の店頭表示基準利率を用いております。なお、残存期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

借入金

借入金の時価は、期間に基づく区分毎に、元利金の合計額を市場金利で割り引いて時価を算定しております。なお、残存期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しており、主に債券先物取引や金利先物取引がこれに含まれます。

ただし、大部分のデリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しないため、取引の種類や満期までの期間に応じて現在価値技法やオプション価格計算モデル等の評価技法を用いて時価を算定しております。それらの評価技法で用いている主なインプットは、金利や為替レート、ボラティリティ等であります。また、取引相手の信用リスク及び当行自身の信用リスクに基づく価格調整を行っております。観察できないインプットを用いていない又はその影響が重要でない場合は

連結財務諸表

レベル2の時価に分類しており、金利スワップ取引、為替予約取引等が含まれます。重要な観察できないインプットを用いている場合はレベル3の時価に分類しております。

(注2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(1) 重要な観察できないインプットに関する定量的情報 (2023年3月31日)

区分	評価技法	重要な観察できないインプット	インプットの範囲	インプットの加重平均
有価証券				
その他有価証券				
社債				
私募債	現在価値技法	倒産確率	0.06% - 100.00%	1.78%
		回収率	0.00% - 24.10%	23.76%

(2) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益 (2023年3月31日)

(単位：百万円)

区分	期首残高	当期の損益又はその他の包括利益		購入、売却、発行及び決済の純額	レベル3の時価への振替(*2)	レベル3の時価からの振替(*3)	期末残高	当期の損益に計上した額のうち連結貸借対照表日において保有する金融資産及び金融負債の評価損益
		損益に計上	その他の包括利益に計上(*1)					
有価証券								
その他有価証券								
社債								
私募債	25,969	-	58	5,633	-	-	31,662	-

(*1) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

(*2) レベル2の時価からレベル3の時価への振替であり、該当事項はありません。

(*3) レベル3の時価からレベル2の時価への振替であり、該当事項はありません。

(3) 時価の評価プロセスの説明

当社グループはリスク管理部門において時価の算定に関する方針及び手続きを定めており、これに沿って各取引部門が時価を算定しております。算定された時価は、独立した評価部門において、時価の算定に用いられた評価技法及びインプットの妥当性並びに時価のレベル分類の適切性を検証しております。検証結果は毎期リスク管理部門に報告され、時価の算定の方針及び手続きに関する適切性が確保されております。

時価の算定に当たっては、個々の資産の性質、特性及びリスクを最も適切に反映できる評価モデルを用いております。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。

(4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

社債の時価の算定で用いている重要な観察できないインプットは、倒産確率、回収率であります。なお、倒産確率の著しい増加(減少)は、時価の著しい低下(上昇)を生じさせることになり、回収率の著しい増加(減少)は、時価の著しい上昇(低下)を生じさせることになります。一般に、倒産確率に関して用いている仮定の変化は、回収率に関して用いている仮定の逆方向への変化を伴います。

(有価証券関係)

*1. 連結貸借対照表の「商品有価証券」、「有価証券」について記載しております。

*2. 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1. 売買目的有価証券

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (2023年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額	△3

2. 満期保有目的の債券

該当事項はありません。

3. その他有価証券

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	10,056	4,927	5,129
	債券	109,343	107,783	1,560
	国債	15,733	15,545	187
	地方債	46,611	46,033	577
	社債	46,999	46,204	794
	その他	68,924	62,217	6,706
	小計	188,324	174,928	13,396
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	4,383	4,642	△258
	債券	300,071	307,129	△7,057
	国債	87,716	89,343	△1,626
	地方債	137,838	141,214	△3,376
	社債	74,516	76,571	△2,054
	その他	163,127	173,096	△9,969
	小計	467,582	484,867	△17,285
	合計	655,906	659,796	△3,889

4. 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当事項はありません。

5. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	21,437	1,885	991
債券	104,120	1,670	1,074
国債	69,442	454	815
地方債	34,122	1,165	258
社債	556	50	-
その他	188,562	1,468	8,119
合計	314,119	5,024	10,185

6. 保有目的を変更した有価証券

該当事項はありません。

7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(市場価格のない株式等及び組合出資金を除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下、「減損処理」という。)しております。

当連結会計年度における減損処理額は、34百万円(うち、株式34百万円)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、次のとおり定めております。

- 時価が取得原価に比べて50%以上下落している場合。
- 時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落した場合について、発行会社の財務内容や一定期間の時価の推移等を勘案し、当社グループが制定した基準に該当した場合。

(金銭の信託関係)

1. 運用目的の金銭の信託

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	連結会計年度の損益に 含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	57,981	168

2. 満期保有目的の金銭の信託

該当事項はありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外)

該当事項はありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額 (百万円)
評価差額	△3,889
その他有価証券	△3,889
その他の金銭の信託	—
(+) 繰延税金資産 (又は (△) 繰延税金負債)	△554
その他有価証券評価差額金 (持分相当額調整前)	△4,444
(△) 非支配株主持分相当額	△13
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	—
その他有価証券評価差額金	△4,458

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
店頭	金利スワップ 受取変動・ 支払固定	4,500	4,500	83	83
合計	—	—	—	83	83

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

(2) 通貨関連取引

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
店頭	為替予約 売建 買建	58,027 — 2,112	— — —	△462 — 41	△462 — 41
合計	—	—	—	△420	△420

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

(3) 株式関連取引

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ 受取変動・ 支払固定	その他有価証券 (国債)	42,750	42,750	216
合計	—	—	—	—	216

(注) 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

(2) 通貨関連取引

該当事項はありません。

(3) 株式関連取引

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	株式先渡取引 売建 買建	その他有価証券 (株式)	1,607 —	— —	20 —
合計	—	—	—	—	20

(注) 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び銀行業を営む連結子会社は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度及び退職一時金制度を設けているほか、確定拠出年金制度を設けております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。なお、銀行業を営む連結子会社の退職一時金制度には、退職給付信託が設定されております。

また、当社及び銀行業を営む連結子会社は2020年4月1日に総合退職金制度を統一し、職能資格・職位ごとに予め定められたポイントを付与し、退職時に累積されたポイントにポイント単価を乗じて算定した額を支給するポイント制を採用しております。

その他の一部の連結子会社は、確定給付型の制度として、退職一時金制度を設け、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

退職給付債務の期首残高	11,264百万円
勤務費用	393百万円
利息費用	27百万円
数理計算上の差異の発生額	△390百万円
退職給付の支払額	△913百万円
退職給付債務の期末残高	10,381百万円

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

年金資産の期首残高	11,700百万円
期待運用収益	175百万円
数理計算上の差異の発生額	△268百万円
事業主からの拠出額	92百万円
退職給付の支払額	△769百万円
年金資産の期末残高	10,930百万円

(注) 年金資産には、退職給付信託が含まれております。

連結財務諸表

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	10,159百万円
年金資産	△10,930百万円
	△770百万円
非積立型制度の退職給付債務	221百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△549百万円
退職給付に係る負債	750百万円
退職給付に係る資産	△1,299百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△549百万円

(注) 年金資産には、退職給付信託が含まれております。

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

勤務費用	393百万円
利息費用	27百万円
期待運用収益	△175百万円
数理計算上の差異の費用処理額	53百万円
過去勤務費用の費用処理額	△217百万円
その他	18百万円
確定給付制度に係る退職給付費用	100百万円

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

過去勤務費用	△217百万円
数理計算上の差異	175百万円
合計	△41百万円

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

未認識過去勤務費用	△435百万円
未認識数理計算上の差異	△137百万円
合計	△572百万円

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	34.6%
株式	26.8%
現金及び預金	3.5%
コールローン	0.0%
一般勘定	6.7%
その他	28.4%
合計	100.0%

(注) 年金資産合計には、退職一時金制度に対して設定した退職給付信託が36.8%含まれております。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産から現在及び将来期待される長期の収益率を考慮し設定しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎	
割引率	0.31%~0.63%
長期期待運用収益率	1.50%
予想昇給率	2.10%~2.40%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は157百万円であり、ます。

(ストック・オプション等関係)

譲渡制限付株式報酬制度

当社は、当社の取締役(社外取締役及び監査委員を除く)及び執行役、並びに当社子銀行の取締役(社外取締役及び監査等委員を除く)及び執行役員に対する報酬として譲渡制限付株式報酬制度を導入しており、2022年7月21日開催の当社取締役会決議に基づき、以下のとおり、譲渡制限付株式報酬として当社株式の処分を行っております。

1. 譲渡制限付株式報酬に係る費用計上額及び科目名

	当連結会計年度
人件費(「営業経費」)	41百万円

2. 譲渡制限付株式報酬の内容

	2022年7月付与
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役 2名(注)1 当社の執行役 7名 当社子銀行の取締役 12名(注)2 当社子銀行の執行役員 12名
付与された株式の種類及び数	当社普通株式 42,600株
付与日	2022年7月21日
勤務対象期間	当社及び当社子銀行の2022年開催定時株主総会から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限期間	当社株式の処分日である2022年8月10日から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限解除条件	当社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当社の定時株主総会の開催日(割当対象者が当社子銀行の取締役又は執行役員の場合には、当該子銀行の定時株主総会の開催日)まで継続して、当社の取締役若しくは執行役又は当社子銀行の取締役若しくは執行役員のいずれかの地位にあったことを条件として、期間満了時点をもって、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の全部につき、譲渡制限を解除いたします。ただし、割当対象者が、当社報酬委員会(割当対象者が当社子銀行の取締役又は執行役員の場合には、当該子銀行の取締役会)が正当と認める理由により、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当社の定時株主総会の開催日の前日(割当対象者が当社子銀行の取締役又は執行役員の場合には、当該子銀行の定時株主総会の開催日の前日)までに当社の取締役及び執行役員並びに当社子銀行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、2022年7月から割当対象者が当社の取締役及び執行役員並びに当社子銀行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した日を含む月までの月数を12で除した数に、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の数を乗じた数(ただし、計算の結果1株未満の端数が生ずる場合には、これを切り捨てるものとする。)の本割当株式につき、当該退任の直後の時点をもって、これに係る譲渡制限を解除するものといたします。
付与日における公正な評価単価	1,289円

(注) 1. 社外取締役及び監査委員を除く。
2. 社外取締役及び監査等委員を除く。

3. 譲渡制限付株式の規模及びその変動状況

前連結会計年度末(株)	-
付与(株)	42,600
無償取得(株)(注)	-
譲渡制限解除(株)	-
未解除残(株)	42,600

(注) 当社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当社の定時株主総会の開催日の前日(割当対象者が当社子銀行の取締役又は執行役員の場合には、当該子銀行の定時株主総会の開催日の前日)までに当社の取締役及び執行役員並びに当社子銀行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、当社報酬委員会(割当対象者が当社子銀行の取締役又は執行役員の場合には、当該子銀行の取締役会)が正当と認める理由がある場合を除き、本割当株式を、当該退任の時点をもって、当然に無償で取得するものといたします。また、本割当株式のうち、本譲渡制限期間が満了した時点(以下、「期間満了時点」という。)において上表の譲渡制限解除条件の譲渡制限の解除事由の定めに基づき譲渡制限が解除されていないものがある場合には、期間満了時点の直後の時点をもって、当社はこれを当然に無償で取得するものといたします。

4. 付与日における公正な評価単価の見積方法

恣意性を排除した価格とするため、譲渡制限付株式の付与に係る当社取締役会決議日の直前営業日の東京証券取引所における当社普通株式の終値としております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	7,407百万円
その他有価証券評価差額金	1,750百万円
退職給付に係る負債	1,612百万円
減価償却	616百万円
税務上の繰越欠損金	503百万円
有価証券償却	171百万円
その他	1,256百万円
繰延税金資産小計	13,319百万円
評価性引当額	△7,546百万円
繰延税金資産合計	5,772百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△554百万円
その他	△884百万円
繰延税金負債合計	△1,439百万円
繰延税金資産（負債）の純額	4,333百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	30.58%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.46%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△15.14%
住民税均等割額	1.03%
評価性引当額	△7.61%
連結調整分	16.52%
その他	1.70%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.54%

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

役員取引等収益	8,105百万円
預金・貸出業務	1,911百万円
為替業務	1,382百万円
証券関連業務	68百万円
代理業務	3,441百万円
保護預り・貸金庫業務	59百万円
その他業務	1,242百万円
その他経常収益	1,902百万円
顧客との契約から生じる経常収益	10,008百万円
上記以外の経常収益（注）	41,403百万円
経常収益	51,411百万円

(注) 1. 「顧客との契約から生じる収益」の分解情報であります。
2. 主に、企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」の範囲に含まれる金融商品に係る取引及び企業会計基準第13号「リース取引に関する会計基準」の範囲に含まれるリース取引並びに金融商品の組成又は取得に際して受け取る手数料が含まれております。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「会計方針に関する事項 (10)重要な収益及び費用の計上基準」に記載しているため、省略しております。

(関連当事者情報)

1. 関連当事者との取引

- 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引
該当事項はありません。
- 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引
(7) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等
該当事項はありません。
(1) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
該当事項はありません。
(7) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
該当事項はありません。

(I) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有割合(%))	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
役員（連結子会社の役員を含む）及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社等（当該会社等の子会社を含む）	㈱秋田クボタ(注1)	秋田県秋田市	60	農機具販売業	被所有 直接 0.0	与信取引	資金の貸付	136	貸出金	116
	㈱ネットヨタ秋田(注2)	秋田県秋田市	40	自動車販売業	被所有 直接 0.0	与信取引	資金の貸付	965	貸出金	1,380
	㈱トヨタレンタリース秋田(注2)	秋田県秋田市	36	車輛レンタル・リース業	被所有 直接 0.0	与信取引	資金の貸付	540	貸出金	540
	㈱ロイヤルセンチュリーゴルフクラブ(注3)	秋田県秋田市	20	娯楽業	-	与信取引	資金の貸付	40	貸出金	40
	奥山ボーリング(注4)	秋田県横手市	40	建設業	被所有 直接 0.0	与信取引	資金の貸付 債務の保証	776 247	貸出金 支払承諾見返	671 311

- (注) 1. ㈱秋田クボタは当社の重要な連結子会社である㈱北都銀行の取締役石井資就及びその近親者が議決権の過半数を所有する石井商事(株)の子会社であります。
2. 当社の重要な連結子会社である㈱北都銀行の取締役石井資就並びにその近親者及び石井商事(株)がネットヨタ秋田(株)の議決権の過半数を所有しております。また、㈱トヨタレンタリース秋田はネットヨタ秋田(株)の子会社であります。
3. 当社の重要な連結子会社である㈱北都銀行の取締役石井資就及びその近親者が㈱ロイヤルセンチュリーゴルフクラブの議決権の過半数を所有しております。
4. 当社の重要な連結子会社である㈱北都銀行の取締役（監査等委員）奥山和彦及びその近親者が奥山ボーリング(株)の議決権の過半数を所有しております。
5. 取引条件及び取引条件の決定方針等
当社の重要な連結子会社である㈱北都銀行との取引であり、一般取引先と同様であります。
6. 取引金額は平均残高を記載しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

1株当たり純資産額	5,011円71銭
1株当たり当期純利益	179円19銭

- (注) 1. 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」は、2023年2月24日開催の取締役会決議に基づくB種優先株式の取得及び消却に伴い、潜在株式が存在しなくなったため、記載しておりません。
2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。
純資産の部の合計額 90,621百万円
純資産の部の合計額から控除する金額 109百万円
（うち非支配株主持分） 109百万円
普通株式に係る期末の純資産額 90,512百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数 18,060千株
3. 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。
1株当たり当期純利益
親会社株主に帰属する当期純利益 3,266百万円
普通株主に帰属しない金額 29百万円
うち中間優先配当額 29百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 3,237百万円
普通株式の期中平均株式数 18,064千株

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

連結情報

❖連結セグメント情報

前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

当社グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

❖リスク管理債権及び金融再生法開示債権(連結)

(単位：百万円、%)

	前連結会計年度末(2022年3月31日)		当連結会計年度末(2023年3月31日)	
	残 高	総与信に占める割合	残 高	総与信に占める割合
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	8,615	0.38	8,683	0.36
危険債権	23,896	1.06	27,189	1.13
要管理債権	1,441	0.06	891	0.03
三月以上延滞債権	—	—	—	—
貸出条件緩和債権	1,441	0.06	891	0.03
合計	33,953	1.50	36,764	1.53
正常債権	2,215,773	98.4	2,364,773	98.46
総与信 (末残)	2,249,726	100.00	2,401,538	100.00

※部分直接償却を実施しております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖自己資本の充実の状況（連結）

銀行法施行規則（昭和57年大蔵省令第10号）第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項（自己資本比率規制の第3の柱（市場規律））として、当期（2022年4月1日から2023年3月31日まで）及び前期（2021年4月1日から2022年3月31日まで）の開示事項を、以下のとおり、開示しております。

自己資本比率は、銀行法第52条の25の規定に基づき、銀行持株会社が銀行持株会社及びその子会社の保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第20号。以下、「持株自己資本比率告示」又は「告示」という。）に定められた算式に基づき、算出しております。

また、国内基準を適用の上信用リスク・アセットの算出においては標準的手法（注）を採用しております。

（注）標準的手法とは、あらかじめ監督当局が設定したリスク・ウェイトを使用して信用リスク・アセットを算出する手法のことです。

❖自己資本の構成に関する開示事項（連結）

自己資本の構成及び自己資本比率（連結）

（単位：百万円、％）

項目	2022年 3月31日	2023年 3月31日
コア資本に係る基礎項目（1）		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	96,760	93,237
うち、資本金及び資本剰余金の額	41,550	36,161
うち、利益剰余金の額	55,942	57,858
うち、自己株式の額（△）	24	105
うち、社外流出予定額（△）	708	677
うち、上記以外に該当するものの額	—	—
コア資本に算入されるその他の包括利益累計額	421	412
うち、為替換算調整勘定	—	—
うち、退職給付に係るものの額	421	412
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	—	—
コア資本に係る調整後非支配株主持分の額	—	—
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	4,720	4,667
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	4,720	4,667
うち、適格引当金コア資本算入額	—	—
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	119	55
非支配株主持分のうち、経過措置によりコア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	60	9
コア資本に係る基礎項目の額（イ）	102,082	98,382
コア資本に係る調整項目（2）		
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	1,596	1,296
うち、のれんに係るもの（のれん相当差額を含む。）の額	44	14
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	1,552	1,281
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	342	203
適格引当金不足額	—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	—	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—	—
退職給付に係る資産の額	752	904
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	0	0
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—	—
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—	—
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—	—
コア資本に係る調整項目の額（ロ）	2,691	2,403
自己資本		
自己資本の額（（イ）－（ロ））（ハ）	99,391	95,978
リスク・アセット等（3）		
信用リスク・アセットの額の合計額	974,995	971,721
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	289	271
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	—	—
うち、土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額	1,331	1,235
うち、自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	△1,041	△963
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	68,711	70,508
信用リスク・アセット調整額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—	—
リスク・アセット等の額の合計額（ニ）	1,043,706	1,042,229
連結自己資本比率		
連結自己資本比率（（ハ）／（ニ））	9.52	9.20

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

◆定性的な開示事項（連結）

1. 連結の範囲に関する事項

イ. 持株自己資本比率告示第15条の規定により連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団（以下「持株会社グループ」という。）に属する会社と連結会計範囲に含まれる会社との相違点及び当該相違点の生じた原因
持株会社グループに属する会社と会計連結範囲に含まれる会社に相違点はありません。

ロ. 持株会社グループのうち、連結子会社の数、名称及び主要な業務の内容
2023年3月末の持株会社グループに属する連結子会社は6社であります。

株式会社荘内銀行	銀行業
株式会社北都銀行	銀行業
フィデアカード株式会社	クレジットカード業、信用保証業、顧客会員へのサービス業務
フィデアリース株式会社	リース業
株式会社フィデア情報総研	システム開発業、調査研究業、情報サービス業
株式会社フィデアキャピタル	投資業等

なお、連結子会社の数、名称及び主要な業務内容は2022年3月末から変更ありません。

ハ. 持株自己資本比率告示第21条が適用される金融業務を営む関連法人等の数並びに当該金融業務を営む関連法人等の名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産の額並びに主要な業務の内容
該当事項はありません。

ニ. 持株会社グループに属する会社であって会計連結範囲に含まれないもの及び持株会社グループに属しない会社であって会計連結範囲に含まれるものの名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産の額並びに主要な業務の内容
該当事項はありません。

ホ. 持株会社グループ内の資金及び自己資本の移動にかかる制限等の概要
特段の制限はありません。

2. 自己資本調達手段（その額の全部又は一部が、持株自己資本比率告示第14条の算式におけるコア資本に係る基礎項目の額に含まれる資本調達手段をいう。）の概要

2022年3月末の自己資本調達手段の概要は以下のとおりであります。

発行主体	フィデアHD	フィデアHD	フィデア情報総研 他
資本調達手段の種類	普通株式	B種優先株式	非支配株主持分
コア資本に係る基礎項目の額に算入された額			
連結自己資本比率	36,550百万円	5,000百万円	60百万円
配当率又は利率	—	1株あたり46円40銭 (中間期末23円20銭、 期末23円20銭)	—
償還期限の有無	無	無	無
その日付	—	—	—
償還等を可能とする特約の概要	—	2020年4月1日以降、取締役会が別に定める日が到来したときは、B種優先株式の全部または一部を取得することができる。	—
初回償還可能日及びその償還金額	—	2020年4月1日	—
償還特約の対象となる事由	—	取締役会決議による。	—
他の種類の資本調達手段への転換に係る特約の概要	—	B種優先株式の取得と引換えに、普通株式を交付する。	—
元本の削減に係る特約の概要	—	—	—
配当等停止条項の有無	無	無	無
未配当の剰余金又は未払の利息に係る累積の有無	無	無	無

当社は、2021年10月1日付でB種優先株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。当該株式併合の影響を考慮しない場合の「配当率又は利率」は、1株あたり4円64銭（中間期末2円32銭、期末2円32銭）となります。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

2023年3月末の自己資本調達手段の概要は以下のとおりであります。

発行主体	フィデアHD	フィデア情報総研 他
資本調達手段の種類	普通株式	非支配株主持分
コア資本に係る基礎項目の額に算入された額		
連結自己資本比率	36,161百万円	9百万円
配当率又は利率	—	—
償還期限の有無	無	無
その日付	—	—
償還等を可能とする特約の概要	—	—
初回償還可能日及びその償還金額	—	—
償還特約の対象となる事由	—	—
他の種類の資本調達手段への転換に係る特約の概要	—	—
元本の削減に係る特約の概要	—	—
配当等停止条項の有無	無	無
未配当の剰余金又は未払の利息に係る累積の有無	無	無

当社は、2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、公的資金に係るB種優先株式の全株式を取得及び消却いたしました。

3. 持株会社グループの自己資本の充実度に関する評価方法の概要

2022年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法として、第一に銀行法第52条の25の規定に基づき、銀行持株会社が銀行持株会社及びその子会社の保有する資産等に照らしそれらの自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第20号）に定められた算式に基づき算出した自己資本比率の十分性を評価基準としております。2022年3月期のフィデアホールディングス連結自己資本比率は9.52%であります。内部留保の蓄積のほか、資本政策の実行等により引き続き自己資本を充実させてまいります。

当社及び子銀行では、自己資本の充実度について、自己資本比率、銀行勘定の金利リスク及び統合リスク量（信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスク）により評価しております。また、結果をリスクマネジメント会議等に報告するほか、内部環境や外部環境の状況に照らし、主要シナリオの妥当性の検証、リスクごとのストレステストの実施等を踏まえて評価、管理を行っております。

2023年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法は、前期と変更ありません。当社の2023年3月期の連結自己資本比率は9.20%であります。

※以下の「4. 信用リスクに関する事項」から「10. 金利リスクに関する事項」までの開示内容については、特にことわりのない限りは2021年度、2022年度とも相違はありません。

4. 信用リスクに関する事項

イ. リスク管理方針及び手続の概要

① リスクの定義

持株会社グループでは、信用リスクを、信用供与先の財務状況の悪化等により、資産（オフ・バランス資産を含む。）の価値が減少ないし消失し、持株会社グループが損失を被るリスクと定義しております。

② リスク管理の方針

当社及び子銀行では、個々の信用リスクの度合いを適正に把握した上で、信用リスクの分散を基本とした信用集中リスクの管理を行い、最適な与信ポートフォリオの構築と、資産の健全性及び収益性向上を図る方針としております。

個々の信用リスクの度合いについては、デフォルト率を基に信用格付を設定し、さらには自己査定を通じて債務者ごとの信用状態を把握することを基本としております。また、評価・計測した信用リスク量や個社の信用リスクの状況等について、定期的に経営会議等への報告を行っております。

③ リスク管理の手続の概要

当社及び子銀行では、リスク管理の方針に則り、デフォルト率を基にして信用格付の設定を行い、信用格付に基づき将来見通し等を踏まえ債務者区分の判定を行っております。債務者の財務状況、担保・保証等の状況について、継続的なモニタリングによる与信管理を行い、債務者の状況の変化に応じて、適宜、信用格付及び債務者区分等の見直しを行う随時査定態勢を構築しております。

信用リスク量の計測につきましては、信用格付別等のデフォルト率や回収見込率等のパラメータを基に、EL（Expected Loss：期待損失）及びUL（Unexpected Loss：非期待損失）等の信用リスク量を定期的に評価・計測し、また、計測したULやそのストレステストの結果を基にリスク資本を配賦しております。

個別融資の取組みにあたっては、法令等を遵守した上で融資業務の規範として位置付けている「クレジットポリシー」に基づき、また、貸出の最終決裁権限を取締役に置き、適切な運営を行っております。

大口先の与信管理については、子銀行で取締役会承認基準を設定し、信用集中リスクの管理を行っております。さらに、重要な大口先や経営支援先等については、クレジットレビューに報告し、該当先の信用リスクの状況等について情報の共有に努めております。

経営会議等ではこれらの報告等を踏まえ、適時適切に指示等を行う態勢としております。

④ 貸倒引当金の計上基準

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している先に係る債権及びそれと同等の状況にある先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないものの、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額のうち、必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績率等を基に予想損失率を算出し計上しております。

子銀行の全ての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査した上で、最終的に経営会議にて承認しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

また、子銀行以外の連結子会社においても、基本的には同様の自己査定に関する方針を踏襲しながら、各社の業務目的に合わせた自己査定基準により資産査定を行っております。

ロ. 標準的手法が適用されるポートフォリオについて、リスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称及びエクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インバスターズ・サービスの3格付機関を採用しております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

5. 信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. 信用リスク削減手法

自己資本比率の算出において、告示第58条の規定に基づく信用リスク削減手法として「包括的手法」を採用しております。信用リスク削減手法とは、持株会社グループが抱える信用リスクを軽減するための措置であり、担保、保証、貸出金と預金との相殺等が該当します。

ロ. 方針及び手続

エクスポージャーの信用リスクの削減手段として有効と認められる適格金融資産担保については、自行預金、日本国政府または我が国の地方公共団体が発行する円建て債券、上場会社の株式を対象として取り扱っております。また、保証については、独立行政法人 住宅金融支援機構や政府関係機関、我が国の地方公共団体及び十分な保証能力を有する保証会社等を信用リスク削減手法に使用しております。

貸出金と自行預金の相殺にあたっては、債務者の担保（総合口座を含む）登録のない定期預金を対象としております。

ハ. 信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスクの集中

同一業種へ偏ることなく、信用リスクは分散されております。

6. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. リスク資本及び与信限度枠の割当方法に関する方針

子銀行では、派生商品取引における取引相手の信用リスクに関して、カレント・エクスポージャー方式（※）により算出し、取引先ごとに明確に与信限度枠を定めて管理しております。また、リスク資本配賦枠に関しては、オン・バランス取引と合算した上で、配賦したリスク資本の範囲内に収めるように管理しております。

（※）デリバティブの信用リスク額の算出方法の一つ。「想定元本×契約残存期間別の掛け目+再構築コスト」で算出。

派生商品取引は、ヘッジ目的で利用されており、投機的な取引は行っておりません。また、追加的な担保提供を必要とする場合においても、派生商品取引の額が限定的であることや適格担保となりうる国債等の有価証券を十分に保有しており、影響は極めて軽微であります。

ロ. 長期決済期間取引に関する事項

子銀行では長期決済期間取引に係る与信相当額はありませぬ。

7. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. リスク管理の方針及びリスク特性の概要

子銀行が投資家として証券化商品へ投資しております。子銀行が投資家として証券化商品への投資を行う場合、外部格付の水準、スプレッド、裏付資産の状況等を総合的に勘案するなど適切なリスク管理を行っております。

ロ. 告示第226条第1項第1号から第4号までに規定する体制の整備及びその運用状況の概要

当社では、証券化商品等（投資信託等に含まれるものを含む。）について、発行体及びその裏付資産等の包括的なリスク特性や構造上の特性が継続的に把握できるように、継続的な情報収集とモニタリングを実施し、適切な管理態勢を構築しております。

① オリジネーター

該当事項はありません。

② 投資家

有価証券関連の証券化取引は、他の有価証券運用と同様に、VaR（バリュー・アット・リスク）限度額管理の対象としており、リスク管理部署経由で経営陣に報告しております。

ハ. 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針

信用リスク削減手法として証券化取引を用いておりませぬ。

ニ. 証券化エクスポージャーについて、信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称

子銀行が投資家として保有する証券化エクスポージャーについては、「外部格付準拠方式」により信用リスク・アセット額を算出しております。

子銀行がオリジネーターとなる証券化エクスポージャーについては、該当ありません。

ホ. マーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称

マーケット・リスク相当額にかかる額は算入しておりませぬ。

ヘ. 子銀行が証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行った場合には、当該証券化目的導管体の種類及び当該証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているかどうかの別

当該証券化取引は行っておりませぬ。

ト. 連結グループの子法人等（連結子法人等を除く）及び関連法人等のうち当該連結グループが行った証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているものの名称

該当事項はありません。

チ. 証券化取引に関する会計方針

子銀行がオリジネーターとなる証券化取引の会計上の処理につきましては、金融資産の契約上の権利に対する支配が他に移転したことにより金融資産の消滅を認識する売却処理としております。証券化取引における資産の売却は、証券化取引の委託者である子銀行が、優先受益権を売却した時点で認識しております。

リ. 証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インベスターズ・サービスの3格付機関を採用しております。

なお、証券化エクスポージャーの種類に応じた格付機関の使い分けは行っておりません。

ヌ. 内部評価方式を用いている場合には、その概要

内部評価方式は用いておりません。

ル. 定量的な情報に重要な変更が生じた場合には、その内容

該当事項はありません。

8. オペレーショナル・リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

① オペレーショナル・リスク

オペレーショナル・リスクとは、業務の過程、役職員の活動もしくはシステムが不適切であることまたは外生的な事象により損失を被るリスクをいい、当社及び子銀行ではシステムリスク、事務リスク、その他オペレーショナル・リスクに大別して管理しております。

当社及び子銀行では、各オペレーショナル・リスク管理に関する基本方針を「リスク管理基本方針」に定め、その方針に基づき「オペレーショナル・リスク管理規程」を制定し、これを遵守しております。また、これらオペレーショナル・リスクに係る諸問題は経営会議等で協議・報告を行うなど、管理態勢の強化に努めております。

② 事務・システムリスク

事務リスクとは、役職員が正確な事務を怠る、あるいは事故・不正等を起こすことにより、損失を被るリスクをいいます。

システムリスクとは、コンピュータシステムの停止または誤作動、システムの不備、コンピュータの不正使用、顧客データの紛失・破壊・改ざん・漏洩等により、損失を被るリスクをいいます。

当社及び子銀行では、事務・システムリスクの管理にあたり、それぞれのリスク管理の基本事項を定めた「事務リスク管理規程」、「システムリスク管理規程」を制定した上、事務・システムリスク管理部署が業務運営に係る事務・システムリスクの把握・管理を実施するとともに、各リスク所管部がより専門的な立場からそれぞれのリスクを管理しております。

事務・システムリスクは、業務運営を行っていく上でその影響や重要性に鑑み可能な限り回避すべきリスクであり、適切に管理するための組織体制や行内牽制態勢を整備し、リスク発生の未然防止やリスク発生時の影響極小化に努めております。

また、監査部門による厳格な内部監査の実施により、全店における再発防止策等リスク対応策への取組状況や有効性を検証するなど、行内牽制を図っております。

③ その他オペレーショナル・リスク

その他オペレーショナル・リスクとは、システムリスク、事務リスク以外のオペレーショナル・リスクをいいます。具体的には法務リスク、人的リスク、有形資産リスク、危機管理のことをいい、当社及び子銀行では各種のその他オペレーショナル・リスクの管理部門を定めた上で、各リスクの特性に応じたリスク管理態勢の構築を図っております。

ロ. オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

当社及び子銀行はオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたり「基礎的手法」を使用しております。

9. 銀行法施行令第4条第4項第3号に規定する出資その他これに類するエクスポージャー又は株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針及び手続の概要

当社及び子銀行では、市場リスク管理にかかる基本方針として、「最適な有価証券ポートフォリオの構築を通してリスク対比の収益性向上を図るため、フィデアグループの経営体力、投資スタイル、取引規模及びリスク・プロファイル等に見合った適切なリスク限度枠等を設定の上、市場取引部門（フロント）、事務管理部門（バック）、リスク管理部門（ミドル）が相互牽制機能を発揮するなど、適切なリスク管理態勢を整備する。」ことを掲げております。

市場リスクを有する出資・株式等エクスポージャーにつきましては、その他の保有有価証券と同様に、残高、リスク量（信頼区間99%、保有期間は保有区分・リスク特性等に応じて60日から250日で設定）、評価損益等の状況を日次でモニタリングし、リスク管理部門が直接経営に報告するなど、市場リスク管理にかかる基本方針に沿って適切な管理を行っております。

出資・株式等エクスポージャーは、相対的に価格変動リスクが大きいいため、ポジション枠を設定して過大なリスクを許容しないよう配慮しております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

有価証券の評価は、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のあるものについては、決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価のないものについては移動平均法による原価法または償却原価法により行っております。

10. 金利リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

- ① リスクの管理及び計測の対象とする金利リスクの考え方及び範囲に関する説明
金利リスクとは、銀行勘定の預金・貸出金や国債等の債券について、金利変動により損失を被るリスクであり、市場リスクの一つであります。当社では、自己資本等の経営体力に見合った適正な水準の金利リスクを許容し、安定的な収益（利息収入）の獲得を目指しております。
- ② リスク管理及びリスク削減の方針に関する説明
リスク限度額やモニタリング方法など金利リスクの管理については、半期毎にリスクマネジメント会議において協議のうえ、承認を得ております。
期中においては、リスク管理部署がリスクの状況をモニタリングし、定期的にリスクマネジメント会議及び取締役会に報告し、各種リスクのコントロールについて検討を行っております。
- ③ 金利リスク計測の頻度
金利リスク量につきましては、債券等の有価証券は日次、貸出金や預金等を含む銀行勘定の金利リスク量は月次でVaR、10BPV等を計測しており、原則として半期ごとに配賦するリスク枠の使用状況、リスクの推移・状況等をリスクマネジメント会議等へ報告しております。
- ④ ヘッジ等金利リスク削減手法に関する説明
金利変動リスクを適切に管理するため、ヘッジ会計処理規程を制定しております。

ロ. 金利リスクの算定手法の概要

- ① 開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII並びに銀行がこれらに追加して自ら開示を行う金利リスクに関する事項
 - (i) 流動性預金に割り当てられた金利改定の平均満期
2022年3月末は4.56年、2023年3月末は4.61年としております。
 - (ii) 流動性預金に割り当てられた最長の金利改定満期
10年としております。
 - (iii) 流動性預金への満期の割当て方法及びその前提
普通預金等の満期のない流動性預金については、子銀行にて各々コア預金内部モデルを使って預金種類別や人格別の残高推移を統計的に解析し、将来残高推移を保守的に推計することで実質的な満期を計測しております。推計値については月次でバックテストを実施しており、モデルの検証は十分に行っております。
 - (iv) 固定金利貸出の期限前返済や定期預金の早期解約に関する前提
金融庁が定める保守的な前提を考慮しております。
 - (v) 複数の通貨の集計方法及びその前提
通貨間の相関は考慮しておらず、通貨別に算出した正の金利リスクのみを合算して算出しております。
 - (vi) スプレッドに関する前提
スプレッド及びその変動は考慮しておりません。
 - (vii) 内部モデルの使用等、△EVE及び△NIIに重大な影響を及ぼすその他の前提
コア預金については、前項（iii）に記載の通りです。その他の内部モデルは使用しておりません。
 - (viii) 前事業年度末の開示からの変動に関する説明
2023年3月末の△EVEが最大となる金利ショックは、下方パラレルシフトによる252億円であります。前期末比70億円の増加となっております。
 - (ix) 計測値の解釈や重要性に関するその他の説明
金利リスクをコントロールすべき事象として、金利上昇を想定しており、上方パラレルシフトによる△EVEの自己資本に対する比率は基準値である20%を下回っていることから、問題のない水準と認識しております。
- ② 銀行が自己資本の充実度の評価、ストレス・テスト、リスク管理、収益管理、経営上の判断その他の目的で、開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII以外の金利リスクを計測している場合における、当該金利リスクに関する事項
当社及び子銀行では市場取引のリスク量について、VaR法、BPV法のほか、業務の特性や運用方針に合った効果的・効率的な計測方法を組合せて活用しております。また、以下の考え方に沿って管理手法の高度化・精緻化に取り組んでおります。
 - (i) リスクを計量化して把握・管理することが可能なリスクについては、VaR、BPV、ギャップ分析、シミュレーション等を用いたリスク分析によって計量化し、持株会社グループの経営体力に見合うようコントロールしております。
 - (ii) バックテスティングやストレステストなどにより、計量化手法や管理方法の妥当性・有効性を検証するとともに経営に与える影響を分析するなど、リスク管理の実効性を確保しながら計量化手法の高度化・精緻化に努めております。

❖定量的な開示項目（連結）

1. その他金融機関等（持株自己資本比率告示第18条第6項第1号に規定するその他金融機関等をいう。）であって銀行持株会社の子法人等であるもののうち、規制上の所要自己資本を下回った会社の名称、所要自己資本を下回った額の総額

該当ありません。

2. 自己資本の充実度に関する事項

イ. 信用リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

項目	2022年3月31日		2023年3月31日	
	リスク・アセット	所要自己資本	リスク・アセット	所要自己資本
【資産（オン・バランス）項目】				
1. 現金	-	-	-	-
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	-	-	-	-
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	278	11	146	5
4. 国際決済銀行等向け	-	-	-	-
5. 我が国の地方公共団体向け	-	-	-	-
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	-	-	-	-
7. 国際開発銀行向け	-	-	-	-
8. 地方公共団体金融機構向け	-	-	-	-
9. 我が国の政府関係機関向け	9,374	374	8,737	349
10. 地方三公社向け	-	-	-	-
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	24,888	995	23,663	946
12. 法人等向け	338,190	13,527	355,272	14,210
13. 中小企業等向け及び個人向け	315,527	12,621	289,512	11,580
14. 抵当権付住宅ローン	51,024	2,040	49,273	1,970
15. 不動産取得等事業向け	90,041	3,601	101,195	4,047
16. 三月以上延滞等	1,729	69	1,401	56
17. 取立未済手形	11	0	18	0
18. 信用保証協会等による保証付	8,089	323	7,888	315
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	-	-	-	-
20. 出資等	15,566	622	13,744	549
(うち出資等のエクスポージャー)	15,566	622	13,744	549
(うち重要な出資のエクスポージャー)	-	-	-	-
21. 上記以外	38,201	1,528	42,840	1,713
(うち他の金融機関等の対象資本調達手段のうち対象普通株式等に該当するもの以外のものに係るエクスポージャー)	-	-	5,765	230
(うち特定項目のうち調整項目に算入されない部分に係るエクスポージャー)	13,365	534	13,160	526
(うち上記以外のエクスポージャー等)	24,835	993	23,914	956
22. 証券化（オリジネーターの場合）	-	-	-	-
(うち再証券化)	-	-	-	-
23. 証券化（オリジネーター以外の場合）	-	-	-	-
(うち再証券化)	-	-	-	-
24. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（ルック・スルー方式）	57,022	2,280	52,127	2,085
25. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（マドレート方式）	-	-	-	-
26. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式250%）	-	-	-	-
27. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式400%）	-	-	-	-
28. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（フォールバック方式1250%）	-	-	-	-
29. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	289	11	271	10
30. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額	-	-	-	-
資産（オン・バランス）項目 計	950,235	38,009	946,095	37,843
【オフ・バランス取引等項目】				
1. 原契約期間が1年以下のコミットメント	905	36	1,356	54
2. 短期の貿易関連偶発債務	-	-	-	-
3. 特定の取引に係る偶発債務	3,658	146	4,213	168
4. 原契約期間が1年超のコミットメント	8,287	331	7,998	319
5. 信用供与に直接的に代替する偶発債務	9,805	392	9,553	382
6. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	-	-	-	-
7. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	1,398	55	996	39
8. 派生商品取引	234	9	648	25
9. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	-	-	-	-
オフ・バランス取引等 計	24,291	971	24,768	990
【CVAリスク相当額】（簡便的リスク測定方式）	352	14	649	25
【中央清算機関関連エクスポージャー】	116	4	208	8
合計	974,995	38,999	971,721	38,868

(注) 所要自己資本額 = リスク・アセット × 4%

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

ロ. オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
所要自己資本の額	2,748	2,820

(注) 当社は基礎的手法により算出しております。

ハ. 連結総所要自己資本額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
総所要自己資本額	41,748	41,689

3. 信用リスクに関する事項（リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャー及び証券化エクスポージャーを除く。）

イ. 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及びエクスポージャーの主な種類別の内訳（地域別、業種別、残存期間別）

(単位：百万円)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高				信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高			
	うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引		うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引	
国内計	3,229,615	1,892,115	459,170	696	2,898,729	2,011,356	415,525	2,625
国外計	77,535	—	77,088	447	59,715	—	59,145	570
地域別合計	3,307,150	1,892,115	536,258	1,143	2,958,445	2,011,356	474,670	3,195
製造業	131,995	117,313	5,015	7	131,327	115,682	6,647	12
農業、林業	4,790	4,308	344	—	4,915	4,344	377	—
漁業	132	131	—	—	152	151	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	2,435	2,247	25	—	2,645	2,295	115	—
建設業	93,688	83,266	8,784	—	87,428	75,962	9,889	—
電気・ガス・熱供給・水道業	93,623	93,332	—	—	103,700	103,184	—	—
情報通信業	12,269	7,382	250	—	8,658	5,621	250	—
運輸業、郵便業	31,286	19,440	11,151	—	26,532	16,846	8,884	—
卸売業、小売業	104,417	99,033	3,667	—	107,998	99,806	6,243	—
金融業、保険業	608,797	203,178	100,725	1,135	462,481	192,139	96,012	3,183
不動産業、物品賃貸業	115,841	113,792	2,035	—	130,160	126,439	3,719	—
学術研究、専門・技術サービス業	10,595	11,175	—	—	17,093	17,682	—	—
宿泊業、飲食サービス業	23,113	22,470	547	—	22,512	21,771	670	—
生活関連サービス業、娯楽業	18,961	16,787	1,607	—	19,170	16,679	2,000	—
教育、学習支援業	3,971	3,962	—	—	3,873	3,804	—	—
医療、福祉	59,044	57,795	530	—	57,907	56,239	665	—
その他のサービス	47,333	43,847	2,217	—	43,060	38,067	3,126	—
地方公共団体	641,499	414,521	226,234	—	602,369	410,874	190,711	—
その他	1,303,355	578,127	173,121	—	1,126,458	703,763	145,358	—
業種別合計	3,307,150	1,892,115	536,258	1,143	2,958,445	2,011,356	474,670	3,195
1年以下	288,527	254,175	25,390	1,143	454,856	423,230	22,127	2,115
1年超3年以下	197,807	144,619	51,409	—	186,062	137,254	47,237	—
3年超5年以下	222,737	166,295	53,540	—	244,986	169,080	71,766	—
5年超7年以下	186,461	117,063	67,392	—	170,803	124,853	43,572	22
7年超10年以下	445,171	332,326	112,342	—	398,068	325,678	71,879	—
10年超	937,742	710,971	226,181	—	947,252	727,511	218,087	1,057
期間の定めのないもの	1,028,703	166,664	—	—	556,416	103,747	—	—
残存期間別合計	3,307,150	1,892,115	536,258	1,143	2,958,445	2,011,356	474,670	3,195

ロ. 三月以上延滞エクスポージャーの期末残高（地域別、業種別）

（単位：百万円）

	2022年3月31日	2023年3月31日
国内計	4,192	4,806
国外計	—	—
地域別合計	4,192	4,806
製造業	808	1,645
農業、林業	31	15
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	10	10
建設業	333	147
電気・ガス・熱供給・水道業	4	4
情報通信業	7	—
運輸業、郵便業	3	—
卸売業、小売業	574	541
金融業、保険業	57	54
不動産業、物品賃貸業	338	199
学術研究、専門・技術サービス業	4	—
宿泊業、飲食サービス業	430	205
生活関連サービス業、娯楽業	178	107
教育、学習支援業	—	17
医療、福祉	43	188
その他のサービス	103	108
地方公共団体	—	—
その他	1,261	1,559
業種別合計	4,192	4,806

ハ. 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金及び特定海外債権引当勘定の期末残高及び期中増減額

（単位：百万円）

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
一般貸倒引当金	4,371	△110	4,261	4,261	20	4,281
個別貸倒引当金	9,177	154	9,331	9,331	227	9,559
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—	—	—
合計	13,549	44	13,593	13,593	247	13,841

二. 個別貸倒引当金の地域別、業種別内訳

（単位：百万円）

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
国内計	9,177	154	9,331	9,331	227	9,559
国外計	—	—	—	—	—	—
地域別合計	9,177	154	9,331	9,331	227	9,559
製造業	3,048	445	3,493	3,493	△170	3,322
農業、林業	18	19	38	38	△14	23
漁業	20	△0	20	20	△1	19
鉱業、採石業、砂利採取業	6	0	7	7	0	7
建設業	696	△99	596	596	△62	534
電気・ガス・熱供給・水道業	—	4	4	4	318	323
情報通信業	21	7	29	29	△6	23
運輸業、郵便業	1	7	9	9	0	9
卸売業、小売業	1,340	181	1,521	1,521	△522	999
金融業、保険業	36	△3	33	33	98	131
不動産業、物品賃貸業	875	△176	698	698	31	729
学術研究、専門・技術サービス業	—	—	—	—	—	—
宿泊業、飲食サービス業	467	118	586	586	335	922
生活関連サービス業、娯楽業	818	△366	452	452	△107	344
教育、学習支援業	—	—	—	—	—	—
医療、福祉	91	186	277	277	△16	261
その他のサービス	379	△18	361	361	313	674
地方公共団体	—	—	—	—	—	—
その他	1,353	△152	1,201	1,201	31	1,233
業種別合計	9,177	154	9,331	9,331	227	9,559

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

ホ、業種別の貸出金償却の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
製造業	—	—
農業、林業	—	—
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—
建設業	—	—
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—
情報通信業	—	—
運輸業、郵便業	—	—
卸売業、小売業	—	—
金融業、保険業	—	—
不動産業、物品賃貸業	—	—
学術研究、専門・技術サービス業	—	—
宿泊業、飲食サービス業	100	—
生活関連サービス業、娯楽業	2	—
教育、学習支援業	—	—
医療、福祉	—	—
その他のサービス	—	—
地方公共団体	—	—
その他	55	16
業種別合計	158	16

ヘ、標準的手法が適用されるエクスポージャーについて、リスク・ウェイトの区分ごとの信用リスク削減手法の効果をもとに算出した後の残高並びに持株自己資本比率告示第57条の5第2項第2号、第155条の2第2項第2号、第226条（持株自己資本比率告示第103条及び第105条において準用する場合に限る。）並びに第226条の4第1項第1号及び第2号（持株自己資本比率告示第103条及び第105条において準用する場合に限る。）の規定により1,250パーセントのリスク・ウェイトが適用されるエクスポージャーの額 (単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	格付あり	格付なし	格付あり	格付なし
0%	430,185	1,449,999	133,663	1,364,461
10%	—	172,706	—	168,140
20%	121,359	20,489	128,128	14,868
30%	—	—	—	—
35%	—	145,783	—	140,781
40%	—	—	—	—
50%	59,080	866	58,344	1,011
60%	—	—	—	—
70%	400	—	—	—
75%	—	417,154	—	383,475
100%	10,916	452,380	14,438	472,548
120%	—	—	—	—
150%	—	747	3,617	592
200%	—	—	—	—
250%	—	5,346	—	5,264
350%	—	—	—	—
1,250%	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	621,941	2,665,474	338,192	2,551,146

4. 信用リスク削減手法に関する事項

標準的手法が適用されるポートフォリオについて、適格金融資産担保及び保証による信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
適格金融資産担保合計	56,811	92,710
適格保証・適格クレジットデリバティブ合計	210,755	200,011

5. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項

イ、与信相当額の算出に用いる方法

派生商品取引の与信相当額は、カレントエクスポージャー方式により算出しております。

ロ、派生商品取引のグロス再構築コスト

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
外国為替関連取引	46	358
金利関連取引	81	433
株式関連取引	102	20
合計	230	812

ハ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額（派生商品取引にあっては、取引の区分ごとの与信相当額を含む。）

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
派生商品取引	1,143	3,195
外国為替関連取引	773	966
金利関連取引	178	2,113
株式関連取引	192	116
合計	1,143	3,195

二. ロ.に掲げる合計額及びグロスのアドオンの合計額からハ.に掲げる額を差し引いた額
ロ.における開示内容と同様であります。

ホ. 担保の種類別の額
該当事項はありません。

ヘ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額
ハ.における開示内容と同様であります。

ト. 与信相当額算出の対象となるクレジットデリバティブの想定元本をクレジットデリバティブの種類別、かつ、プロテクションの購入又は提供の別に区分した額
該当事項はありません。

チ. 信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジットデリバティブの想定元本額
該当事項はありません。

6. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. オリジネーターである場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項
該当事項はありません。

ロ. 投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項
該当事項はありません。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

7. 出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項

イ. 連結貸借対照表計上額及び時価

(単位：百万円)

	2022年3月期		2023年3月期	
	連結貸借対照表計上額	時価	連結貸借対照表計上額	時価
上場している出資等又は株式等エクスポージャー	39,531		35,949	
上記に該当しない出資等又は株式等エクスポージャー	1,434		1,618	
合計	40,966	40,966	37,567	37,567

ロ. 出資等又は株式等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
売却及び償却に伴う損益	1,415	574
売却益	5,501	3,064
売却損	4,082	2,439
償却	4	50

ハ. 連結貸借対照表で認識され、かつ、連結損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
その他有価証券	8,781	5,281

二. 連結貸借対照表及び連結損益計算書で認識されない評価損益の額

該当事項はありません。

8. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャーに関する事項

リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャー

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
ルック・スルー方式	125,977	189,097
マンドート方式	—	—
蓋然性方式 (250%)	—	—
蓋然性方式 (400%)	—	—
フォールバック方式	—	—
合計	125,977	189,097

- (注) 1. 「ルック・スルー方式」とは、ファンド内の個々の組入資産のリスクアセットを合算する方式です。
 2. 「マンドート方式」とは、ファンドの運用基準に基づき、ファンド内の組入資産構成を保守的に仮定し、個々の資産のリスクアセットを合算する方式です。
 3. 「蓋然性方式 (250%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが250%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト250%を適用する方式です。
 4. 「蓋然性方式 (400%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが400%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト400%を適用する方式です。
 5. 「フォールバック方式」とは、上記のいずれの方式も適用できない場合に、1,250%のリスクウェイトを適用する方式です。

9. 金利リスクに関する事項

(単位：百万円)

IRRB1：金利リスク		イ		ロ		ハ		ニ	
項番		△EVE		△NII					
		当期末	前期末	当期末	前期末				
1	上方平行シフト	10,693	6,103	14,068	17,022				
2	下方平行シフト	25,208	18,188	5,609	4,816				
3	スティープ化	3,530	1,732						
4	フラット化								
5	短期金利上昇								
6	短期金利低下								
7	最大値	25,208	18,188	14,068	17,022				
		ホ		ヘ					
		当期末		前期末					
8	自己資本の額	95,978		99,391					

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖報酬等に関する開示事項（2023年3月期）

1. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

イ. 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」及び「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

①「対象役員」の範囲

対象役員は、当社の取締役及び執行役であります。なお、社外取締役を除いております。

②「対象従業員等」の範囲

当社では、対象役員以外の当社の役員及び従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員のうち、「高額の報酬等を受ける者」で当社及びその主要な連結子法人等の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

(i) 「主要な連結子法人等」の範囲

主要な連結子法人等とは、当社の連結総資産に対する当該子法人等の総資産の割合が2%を超えるもの及びグループ経営に重要な影響を与える連結子法人等であり、具体的には株式会社荘内銀行、株式会社北都銀行が該当します。

(ii) 「高額の報酬等を受ける者」の範囲

「高額の報酬等を受ける者」とは、当社の有価証券報告書記載の「役員区分ごとの報酬の総額」を同記載の「対象となる役員の員数」により除すことで算出される「対象役員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

(iii) 「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」の範囲

「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当社、当社グループ、主要な連結子法人等の業務の運営に相当程度の影響を与え、又は取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

ロ. 対象役職員の報酬等の決定について

①対象役員の報酬等の決定について

当社は、当社の役員の報酬体系、報酬等の内容を決定する機関として、報酬委員会を設置しております。報酬委員会は、当社の取締役及び執行役の報酬等の内容にかかる決定方針及び個人別の報酬額等の内容を決定しております。報酬委員会は、その過半が社外取締役により構成され、業務推進部門からは独立して報酬決定方針（及び個人別の報酬額）等を決定する権限を有しております。

②対象従業員等の報酬等の決定について

当社（グループ）における従業員の報酬等は、当社及び主要な連結子法人等の取締役会等にて制定される給与規程に基づいて決定され、支払われております。当該規程は、業務推進部門から独立した当社及び主要な連結子法人等の人事部等においてその制度設計・文書化がなされております。また、当社の主要な連結子法人等の給与規程等は、適宜、当社人事総務部に報告され、当社人事総務部にてその内容を確認しております。

なお、対象従業員等に含まれる主要な連結子法人等の取締役（監査等委員である取締役を除く）の報酬等の決定については、各社の株主総会において決議された報酬等総額の限度内において、取締役会決議により決定しております。

また、監査等委員である取締役の報酬は各社の株主総会において決議された報酬等総額の限度内において、監査等委員である取締役の協議により決定しております。

ハ. 報酬委員会等の構成員に対して払われた報酬等の総額及び報酬委員会等の会議の開催回数

	開催回数 (2022年4月～2023年3月)
報酬委員会（フィデアホールディングス株式会社）	8回

(注) 報酬等の総額については、報酬委員会等の職務執行に係る対価に相当する部分のみを切り離して算出することができないため、報酬等の総額は記載しておりません。

2. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の体系の設計及び運用の適切性の評価に関する事項

イ. 報酬等に関する方針について

①対象役員の報酬等に関する方針

当社は、取締役及び執行役等の報酬等に関する事項を定めた報酬委員会規程で、報酬等の額及びその算定方法の決定に関する方針を定めております。

具体的な役員報酬制度といたしましては、役員の報酬等の構成を、役割や責任に応じて固定額を月額で支給する基本報酬と中長期的な企業価値向上に対するインセンティブを高めることを目的として支給する譲渡制限付株式報酬と当社の業績に応じて支給する賞与としております。

役員の報酬等は、報酬委員会規程に基づき、その過半が社外取締役により構成された報酬委員会で決定の上、取締役会に報告しております。

なお、主要な連結子法人等の役員報酬等の構成は当社と同様であり、役員の報酬等の額は、取締役（監査等委員である取締役を除く）は各社の株主総会が決定する報酬等総額の限度内において取締役会が決定しております。また、監査等委員である取締役は各社の株主総会が決定する報酬等総額の限度内において、監査等委員である取締役の協議により決定しております。

②対象従業員等の報酬等に関する方針

当社における対象従業員等に該当する株式会社荘内銀行及び株式会社北都銀行の取締役の報酬等に関する方針は、上記①の通りであります。

3. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性並びに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役員の報酬等の決定に当たっては、報酬委員会で経営内容等を考慮した上で決定される仕組みになっております。また、対象従業員等の報酬等の決定に当たっては、当社グループの財務状況等を勘案の上、予算措置を行う仕組みになっております。

4. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の種類、支払総額及び支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

区分	人数	報酬等の 総額 (百万円)	固定報酬の総額		変動報酬の総額			その他	
			基本報酬	自社株取得 目的報酬	基本報酬	賞与			
対象役員（除く社外役員）	12	176	157	154	3	8	-	8	11
対象従業員等	17	313	271	264	7	19	-	19	22

(注) 対象役職員について、主要な連結子法人等の役員としての報酬等を得ている場合、人数、報酬額とも、対象役員、対象従業員等それぞれの欄に記載しております。

(注) その他には、従前支給していた自社株取得目的報酬に代えて2022年5月13日に導入を決定した譲渡制限付株式報酬が該当します。

5. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の体系に関し、その参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。

事業の概況（荘内銀行）

業績の概況（2022年度）

（金融経済環境）

当事業年度における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症の影響など一部に弱さがみられる中、緩やかな持ち直しの動きが続きました。輸出などに弱い動きがみられるものの、住宅建設、公共投資が底堅い動きとなったほか、個人消費や設備投資は持ち直しの動きが続きました。

また、当行の主たる営業エリアである山形県内経済においても、一部に弱さがみられるものの緩やかな持ち直しの動きが続きました。住宅投資が減少基調となったものの、設備投資が堅調に推移し、個人消費や雇用環境は持ち直しの動きが続きました。

（事業の経過及び成果）

このような環境のもと、当行は地域のお客さまにご満足いただける金融商品、サービスの充実に努め、以下のとおりの業績となりました。

・預金等（譲渡性預金含む）

譲渡性預金を含む預金等の期末残高は個人預金や公金預金を中心に前期末比132億円（0.9%）増加し1兆3,537億円となりました。

・貸出金

貸出金の期末残高は、山形県内の事業性貸出を中心に前期末比935億円（10.9%）増加し9,482億円となりました。

・有価証券

収益性回復及び評価損益改善のためのポートフォリオ再構築を進めた結果、有価証券の期末残高は前期末比113億円（3.3%）減少し、期末残高は3,319億円となりました。

・投資信託、公共債及び生命保険窓販

投資信託、公共債、保険の窓口販売業務につきましては、お客さまのライフプラン、資産運用ニーズに応えるコンサルティング営業やアフターフォローに努めました。

投資信託の期末預かり残高は前期末比12億円（2.3%）減少し518億円、公共債預かり残高は前期末比90百万円（5.7%）増加し16億円となりました。また、生命保険（個人年金保険、終身保険及び養老保険）の期末預かり残高は、前期末比53億円（4.1%）減少し1,227億円となりました。

・サービスネットワーク

店舗外キャッシュコーナーも含め、それぞれの地域のマーケット環境にあわせた店舗ネットワークの見直しや既存店舗のリニューアルを進めるとともに、サービスのWeb完結化等非対面チャネルの充実化を図り、お客さまの利便性向上及び営業体制の効率化に努めております。

なお、ブランチ・イン・ブランチ方式による統合店舗を除く期末拠点数は38か店（除く代理店）となりました。

※店舗の異動

（2022年度中にブランチ・イン・ブランチ方式により統合した店舗）

観音寺支店、イオン山形北支店、イオン山形南支店、イオンモール天童支店

・損益状況

第4次中期経営計画の柱の一つである経費削減が計画前倒しで進展した一方で、有価証券関係損益の減少を主な要因として、経常利益は前期比10億77百万円減少し23億90百万円、当期純利益は法人税等合計が減少したことなどから前期比73百万円増加し16億30百万円となりました。

主要な経営指標等の推移（単体）

（単位：百万円）

回次 決算年月	第117期 2019年3月	第118期 2020年3月	第119期 2021年3月	第120期 2022年3月	第121期 2023年3月
経常収益	23,460	23,922	27,120	23,932	24,376
経常利益	2,060	1,173	3,849	3,467	2,390
当期純利益	1,659	401	1,566	1,557	1,630
資本金	8,500	8,500	8,500	8,500	8,500
発行済株式総数	121,321千株	121,321千株	121,321千株	121,321千株	121,321千株
純資産額	68,087	63,327	67,725	64,460	58,581
総資産額	1,387,823	1,376,002	1,672,793	1,684,296	1,490,048
預金残高	1,177,210	1,163,328	1,262,562	1,297,919	1,306,463
貸出金残高	901,782	859,252	870,494	854,611	948,205
有価証券残高	384,352	400,924	397,258	343,309	331,912
単体自己資本比率（国内基準）	9.98%	9.35%	9.75%	10.21%	10.57%
配当性向	32.80%	135.46%	34.73%	43.67%	41.53%
従業員数	773人	725人	692人	643人	554人

(注) 1. 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

2. 執行役員を従業員数に含めております。

財務諸表

財務諸表

◆貸借対照表

(単位：百万円)

	前事業年度末 (2022年3月31日)	当事業年度末 (2023年3月31日)
■資産の部		
現金預け金	426,778	148,972
現金	19,923	16,010
預け金	406,855	132,962
買入金銭債権	1,599	1,611
商品有価証券	426	414
商品国債	10	-
商品地方債	416	414
金銭の信託	25,654	27,860
有価証券	343,309	331,912
国債	61,307	56,920
地方債	100,736	72,733
社債	58,566	56,022
株式	11,272	9,940
その他の証券	111,426	136,295
貸出金	854,611	948,205
割引手形	926	1,151
手形貸付	12,128	12,012
証書貸付	780,709	875,408
当座貸越	60,846	59,634
外国為替	1,000	798
外国他店預け	1,000	798
その他資産	17,348	16,231
未決済為替貸	58	93
前払費用	10	11
未収収益	1,324	1,222
金融派生商品	21	451
金融商品等差入担保金	13,073	12,000
その他の資産	2,860	2,453
有形固定資産	14,133	13,017
建物	8,286	7,598
土地	4,877	4,421
リース資産	12	8
その他の有形固定資産	956	989
無形固定資産	753	580
ソフトウェア	687	515
その他の無形固定資産	65	65
前払年金費用	42	182
繰延税金資産	-	1,439
支払承諾見返	5,697	5,843
貸倒引当金	△7,059	△7,021
資産の部合計	1,684,296	1,490,048

(単位：百万円)

	前事業年度末 (2022年3月31日)	当事業年度末 (2023年3月31日)
■負債の部		
預金	1,297,919	1,306,463
当座預金	22,116	23,204
普通預金	764,552	799,347
貯蓄預金	9,133	9,340
通知預金	758	571
定期預金	481,167	453,998
定期積金	7,608	7,215
その他の預金	12,582	12,785
譲渡性預金	42,647	47,304
債券貸借取引受入担保金	49,315	14,976
借入金	213,200	48,500
借入金	213,200	48,500
外国為替	18	24
売渡外国為替	13	22
未払外国為替	5	1
その他負債	8,313	7,565
未決済為替借	88	109
未払法人税等	534	117
未払費用	595	743
前受収益	268	270
給付補填備金	7	7
金融派生商品	1,553	397
金融商品等受入担保金	-	611
リース債務	14	9
その他の負債	5,252	5,300
役員賞与引当金	18	15
退職給付引当金	147	148
睡眠預金払戻損失引当金	32	14
偶発損失引当金	272	227
繰延税金負債	1,835	-
再評価に係る繰延税金負債	416	385
支払承諾	5,697	5,843
負債の部合計	1,619,836	1,431,467
■純資産の部		
資本金	8,500	8,500
資本剰余金	20,308	20,308
資本準備金	8,500	8,500
その他資本剰余金	11,808	11,808
利益剰余金	26,455	27,471
その他利益剰余金	26,455	27,471
別途積立金	5,000	5,000
繰越利益剰余金	21,455	22,471
株主資本合計	55,263	56,280
その他有価証券評価差額金	8,281	1,276
繰延ヘッジ損益	-	174
土地再評価差額金	914	850
評価・換算差額等合計	9,196	2,301
純資産の部合計	64,460	58,581
負債及び純資産の部合計	1,684,296	1,490,048

❖損益計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
経常収益	23,932	24,376
資金運用収益	15,522	16,650
貸出金利息	9,406	9,001
有価証券利息配当金	5,708	7,548
コールローン利息	—	△9
預け金利息	399	94
その他の受入利息	8	15
役務取引等収益	3,894	3,888
受入為替手数料	740	667
その他の役務収益	3,153	3,220
その他業務収益	1,710	2,148
国債等債券売却益	1,697	2,122
金融派生商品収益	10	—
その他の業務収益	2	25
その他経常収益	2,804	1,688
株式等売却益	2,347	1,168
金銭の信託運用益	294	326
その他の経常収益	162	193
経常費用	20,464	21,986
資金調達費用	119	353
預金利息	91	82
譲渡性預金利息	2	1
コールマネー利息	△2	△0
債券貸借取引支払利息	27	158
借入金利息	0	0
金利スワップ支払利息	—	111
その他の支払利息	0	△0
役務取引等費用	2,347	2,315
支払為替手数料	122	80
その他の役務費用	2,225	2,234
その他業務費用	2,633	5,869
外国為替売買損	57	1,003
商品有価証券売買損	1	1
国債等債券売却損	2,574	4,860
金融派生商品費用	—	3
営業経費	12,303	11,434
その他経常費用	3,060	2,013
貸倒引当金繰入額	1,255	1,025
貸出金償却	102	0
株式等売却損	1,297	552
株式等償却	0	47
金銭の信託運用損	60	110
その他の経常費用	343	276
経常利益	3,467	2,390

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
特別利益	1	3
固定資産処分益	1	3
特別損失	552	537
固定資産処分損	116	204
減損損失	435	333
税引前当期純利益	2,916	1,855
法人税、住民税及び事業税	1,025	534
法人税等調整額	334	△309
法人税等合計	1,359	224
当期純利益	1,557	1,630

財務諸表

◆株主資本等変動計算書

前事業年度 (2021年4月1日から2022年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	その他利益剰余金		利益剰余金 合計	
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	8,500	8,500	11,808	20,308	5,000	20,424	25,424	54,232
当期変動額								
剰余金の配当						△612	△612	△612
当期純利益						1,557	1,557	1,557
土地再評価差額金の取崩						86	86	86
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	-	-	-	-	-	1,031	1,031	1,031
当期末残高	8,500	8,500	11,808	20,308	5,000	21,455	26,455	55,263

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	12,492	1,000	13,492	67,725
当期変動額				
剰余金の配当				△612
当期純利益				1,557
土地再評価差額金の取崩				86
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△4,210	△86	△4,296	△4,296
当期変動額合計	△4,210	△86	△4,296	△3,265
当期末残高	8,281	914	9,196	64,460

当事業年度 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	その他利益剰余金		利益剰余金 合計	
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	8,500	8,500	11,808	20,308	5,000	21,455	26,455	55,263
当期変動額								
剰余金の配当						△678	△678	△678
当期純利益						1,630	1,630	1,630
土地再評価差額金の取崩						64	64	64
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)								
当期変動額合計	－	－	－	－	－	1,016	1,016	1,016
当期末残高	8,500	8,500	11,808	20,308	5,000	22,471	27,471	56,280

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	8,281	－	914	9,196	64,460
当期変動額					
剰余金の配当					△678
当期純利益					1,630
土地再評価差額金の取崩					64
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	△7,005	174	△64	△6,895	△6,895
当期変動額合計	△7,005	174	△64	△6,895	△5,878
当期末残高	1,276	174	850	2,301	58,581

財務諸表

◆キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益	2,916	1,855
減価償却費	961	854
減損損失	435	333
貸倒引当金の増減 (△)	170	△37
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	8	△3
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	0	1
前払年金費用の増減額 (△は増加)	△9	△139
睡眠預金払戻損失引当金の増減 (△)	△27	△18
偶発損失引当金の増減 (△)	△30	△45
資金運用収益	△15,522	△16,650
資金調達費用	119	353
有価証券関係損益 (△)	△173	2,170
金銭の信託の運用損益 (△は運用益)	△233	△215
為替差損益 (△は益)	△5	△5
固定資産処分損益 (△は益)	115	201
貸出金の純増 (△) 減	15,883	△93,594
預金の純増減 (△)	35,356	8,544
譲渡性預金の純増減 (△)	△3,197	4,656
商品有価証券の純増 (△) 減	△8	11
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)	4,200	△164,700
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減	△485	△1,744
コールローン等の純増 (△) 減	△16	△11
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	△19,342	△34,339
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	50	201
外国為替 (負債) の純増減 (△)	10	5
資金運用による収入	15,746	16,711
資金調達による支出	△142	△303
その他	△4,958	△5,782
小計	31,822	△281,692
法人税等の支払額	△906	△1,644
営業活動によるキャッシュ・フロー	30,915	△283,336
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△228,481	△285,969
有価証券の売却による収入	220,349	197,291
有価証券の償還による収入	60,196	95,221
金銭の信託の増加による支出	△4,000	△3,000
金銭の信託の減少による収入	-	981
有形固定資産の取得による支出	△686	△252
有形固定資産の売却による収入	3	276
無形固定資産の取得による支出	△86	△84
投資活動によるキャッシュ・フロー	47,294	4,463
財務活動によるキャッシュ・フロー		
リース債務の返済による支出	△4	△4
配当金の支払額	△612	△678
財務活動によるキャッシュ・フロー	△616	△682
現金及び現金同等物に係る換算差額	5	5
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	77,599	△279,551
現金及び現金同等物の期首残高	346,916	424,515
現金及び現金同等物の期末残高	424,515	144,964

(当事業年度)

注記事項

(重要な会計方針)

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

2. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社・子法人等株式及び関連法人等株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

有形固定資産は、定額法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 7年～50年

その他 5年～20年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

5. 繰延資産の処理方法

社債発行費及び株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、主として決算日の為替相場による円換算額を付しております。

外貨建その他有価証券のうち債券に係る換算差額については、外国通貨による時価の変動を評価差額として処理し、それ以外を「外国為替売買益」又は「外国為替売買損」として処理しております。

7. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

① 「銀行等金融機関の資産の自己査定並びに貸倒償却及び貸倒引当金の監査に関する実務指針」（日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号 令和4年4月14日）に規定する破綻先債権及び実質破綻先債権に相当する債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除した残額を計上しております。

② 破綻懸念先債権に相当する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額（以下、「非保全額」という。）のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。具体的には、

(イ) 非保全額に対して今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

(ロ) 上記の債務者に係る債権のうち、非保全額が一定額以上の債務者に係る債権については、上記(イ)で算定した予想損失額に基づく貸倒引当金の十分性を個別に検証し、必要に応じて、債務者の財政状態に基づき合理的に見積もられた回収可能額を非保全額から控除した残額を計

上しております。

③ 貸出条件緩和債権等を有する債務者に係る債権については、今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

④ 正常先債権及び要注意先債権に相当する債権については、今後1年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署の協力の下に資産査定部署が資産査定を実施した上で、資産査定部署より独立した資産監査部署で査定結果を監査しております。

(2) 役員賞与引当金

役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（13年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日次から損益処理

(4) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

(5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度に係る信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来発生する可能性のある負担金支払積額を計上しております。

8. 収益の計上方法

当行の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務は、預金・貸出業務、為替業務、証券関連業務、代理業務、保護預り・貸金庫業務等の各種サービスの提供であります。

ATM利用手数料や口座振替手数料（預金・貸出業務）、国内外の送金手数料（為替業務）、公社債引受手数料（証券関連業務）、投資信託や保険の販売手数料（代理業務）等については取引が発生又は関連サービスが提供された時点において履行義務を充足するものとして収益を認識しております。また、貸金庫手数料（保護預り・貸金庫業務）等、関連サービスが提供される期間にわたって履行義務を充足するものについては、当該期間にわたって収益を認識しております。

9. ヘッジ会計の方法

(1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日。以下、「業種別委員会実務指針第24号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の（残存）期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。その他有価証券に区分している固定金利の債券の相場変動を相殺するヘッジにおいては、同一種類毎にヘッジ対象を識別し、金利スワップ取引をヘッジ手段として指定しております。ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件がほぼ同一となるようなヘッジ指定を行っているため、高い有効性があるとみなしており、これをもって有効性の判定に代えております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

(2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 令和2年10月8日。以下、「業種別委員会実務指針第25号」という。）に規

財務諸表

定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

また、外貨建その他有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして時価ヘッジを適用しております。

10. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、貸借対照表上の「現金」及び「預け金」のうち日本銀行への預け金であります。

11. 消費税等の会計処理

有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

12. 関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

- 投資信託の解約・償還に伴う損益について、期中収益分配金等を含めた投資信託全体で益の場合は「有価証券利息配当金」に計上し、損の場合は「国債等債券償還損」に計上しております。
- 取締役（社外取締役及び監査等委員を除く）及び執行役員に対する譲渡制限付株式報酬に係る費用は、付与日における当行親会社であるフィデアホールディングス株式会社株式の時価で測定しております。また、費用処理については、対象勤務期間にわたって人件費（「営業経費」）に計上しております。

（会計方針の変更）

（時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用）

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日。以下、「時価算定会計基準適用指針」という。）を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。これによる当事業年度の財務諸表への影響はありません。

また、当該注記において、前事業年度は、「外国証券」を有価証券の「その他」に含めて表示しておりましたが、金融商品をより詳細に区分して表示するため、当事業年度から「外国証券」として区分して表示することとしております。

（重要な会計上の見積り）

会計上の見積りにより当事業年度に係る財務諸表にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

1. 貸倒引当金

- 当事業年度に係る財務諸表に計上した額
貸倒引当金 7,021百万円
- 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報
 - 算出方法
貸倒引当金の算出方法は、「重要な会計方針」〔7. 引当金の計上基準〕〔(1)貸倒引当金〕に記載しております。
 - 主要な仮定
貸倒引当金の算定にあたり、債務者区分の判断が特に重要となります。
債務者区分の判断に用いた主要な仮定は、「貸出先の将来の業績見通し」であります。「貸出先の将来の業績見通し」は、個々の債務者の経営成績、財政状態、貸出条件、返済履行状況、経営改善計画の策定や進捗状況といった定量的要素及び定性的要素に関する情報を収集し、それらを踏まえて総合的に判断した上で、各債務者の収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。
なお、新型コロナウイルスの感染の影響に伴い、主に貸出金等の信用リスクに一定の影響を及ぼす可能性があります。新型コロナウイルス感染症の経済への影響は一部の企業等において今後数年程度続くものと想定しておりますが、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけの変更や政府や地方公共団体の経済対策及び金融機関の支援等により経済活動は改善していくという仮定のもと貸倒引当金を算定しております。

③ 翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響

主要な仮定である「貸出先の将来の業績見通し」は、不確実性が高く、貸出先の状況や新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、債務者区分の判断に重要な影響を与えるリスクがあります。債務者区分が変動した場合には、翌事業年度に係る財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

なお、新型コロナウイルス感染症に係る見積りは当事業年度末時点において得られる情報により想定される事象を網羅し算定しておりますが、現在の経済環境下においては見積りに用いた仮定の不確実性は高く、感染の状況、期間及びその他経済への影響度合いなどが変化した場合には、翌事業年度に係る財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

2. 固定資産の減損

(1) 当事業年度に係る財務諸表に計上した額

減損損失 333百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

固定資産の減損の算出方法は、「注記事項」〔（損益計算書関係）〕に記載しております。

② 主要な仮定

減損損失を認識するかどうかの判定に際して見積られる将来キャッシュ・フロー及び使用価値の算定において見積られる将来キャッシュ・フローは、企業に固有の事情を反映した合理的で説明可能な仮定及び予測に基づいて見積る必要がありますが、当該将来キャッシュ・フローは、当行の利益計画に基づいて算出しております。当該計画は過去実績及び市場実勢利回り並びに新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等を考慮して策定されております。当該計画策定に用いた主要な仮定は、「お客さま支援の徹底と経営基盤強化」という基本方針のもと設定している「顧客支援力の強化による収益拡大の見通し」、「経費構造改革による人件費などの経費削減の見通し」であります。なお、利益計画達成の不確実性を考慮し、当該計画に対して一定のストレスを付加して将来キャッシュ・フローを算出しております。

③ 翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響

当行の利益計画の策定に用いた主要な仮定は、不確実性が高く、新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、利益計画に基づく将来のキャッシュ・フローの見積りが変動することにより、減損損失の認識の判定及び使用価値の算定に重要な影響を与えるリスクがあります。将来キャッシュ・フローの見積額が減少することとなった場合には、追加的な減損処理が必要となる可能性があります。

（貸借対照表関係）

1. 関係会社の出資金総額

230百万円

- 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、貸借対照表の「有価証券」中の社債（その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）によるものに限る。）、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券（使用貸借又は賃貸契約によるものに限る。）であります。

破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	5,008百万円
危険債権額	15,463百万円
三月以上延滞債権額	一百万円
貸出条件緩和債権額	549百万円
合計額	21,022百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三年以上延滞債権に該当しないものであります。

なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

3. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、1,151百万円であります。

4. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	
有価証券	63,589百万円
担保資産に対応する債務	
債券貸借取引受入担保金	14,976百万円
借入金	48,500百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券51,441百万円及び金融商品等差入担保金12,000百万円を差し入れております。

また、その他の資産には、保証金107百万円が含まれております。

5. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、162,644百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの（又は任意の時期に無条件で取消可能なもの）が154,087百万円あります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

6. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1999年9月30日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第3号に定める土地課税台帳に登録されている価格に基づいて、（奥行価格補正、時点修正、近隣売買事例等による補正等）合理的な調整を行って算出する方法及び同条第5号に定める不動産鑑定士による鑑定評価によって算出する方法を併用しております。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の当事業年度末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額
858百万円

7. 有形固定資産の減価償却累計額 10,143百万円

8. 有形固定資産の圧縮記帳額 168百万円

9. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する当行の保証債務の額は15,801百万円であります。

10. 取締役との間の取引による取締役に対する金銭債権 16百万円

11. 関係会社に対する金銭債権総額 10,461百万円

12. 関係会社に対する金銭債務総額 605百万円

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引による収益	
資金運用取引に係る収益総額	84百万円
関係会社との取引による費用	
その他業務・その他経常取引に係る費用総額	631百万円

2. 減損損失は次のとおりであります。

区分	地域	主な用途	種類	減損損失
稼働資産	山形県内	営業店舗2カ所	土地及び建物	119百万円
共用資産	山形県内	共用資産3カ所	土地及び建物	205百万円
遊休資産	山形県内	遊休資産1カ所	建物	7百万円
合計				333百万円

営業活動から生ずる損益の減少によるキャッシュ・フローの低下や遊休状態、売却方針の決定等となった上記資産について、帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額333百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

営業店舗については、管理会計上の最小区分である営業店単位（ただし、連携して営業を行っている営業店グループは当該グループ単位、同一建物内で複数店舗が営業している営業店グループは当該グループ単位）でグループングを行っております。また、遊休資産や売却予定資産は、各資産を最小の単位としております。本部、事務センター等については、複数の資産又は資産グループの将来キャッシュ・フローの生成に寄与する資産であるため共用資産としております。

当該資産グループの回収可能額は、正味売却価額により測定しており、不動産鑑定評価額や路線価等の市場価格を適切に反映している価額から処分費用見込額を控除して算定しております。

(株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項
(単位：千株)

	当事業年度期首株式数	当事業年度増加株式数	当事業年度減少株式数	当事業年度末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	121,321	—	—	121,321	
合計	121,321	—	—	121,321	

(注) 当事業年度期首において自己株式はなく、当事業年度における異動がありませんので、自己株式の種類及び株式数については記載していません。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 当事業年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
2022年5月12日取締役会	普通株式	339百万円	2.80円	2022年3月31日	2022年5月13日
2022年11月9日取締役会	普通株式	338百万円	2.79円	2022年9月30日	2022年11月10日
合計		678百万円			

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当事業年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
2023年5月11日取締役会	普通株式	338百万円	利益剰余金	2.79円	2023年3月31日	2023年5月12日

財務諸表

(キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	148,972百万円
預け金（日銀預け金を除く）	△4,007百万円
現金及び現金同等物	144,964百万円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行は、主として国内の法人や個人のお客さまへの貸出及び債券や株式、投資信託等の有価証券による運用等の銀行業務を中心とした金融情報サービスを行っております。これらの事業を健全に行っていくため、経営体力の範囲内でリスクを許容し、収益力の向上を目指しております。

当行では、主として金利変動等を伴う金融資産及び金融負債を保有していることから、金利変動等による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合管理（ALM）を行うほか、必要に応じてデリバティブ取引を実施しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行が保有する金融資産には、主として国内の法人及び個人のお客さまに対する貸出金があり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託及び組合出資金であり、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

主な金融負債である預金及び譲渡性預金は、主として国内の法人及び個人のお客さまの預け入れによるものです。集中的な預金の解約等による流動性リスクに留意する必要がありますが、預金等の大部分は個人のお客さまによるもので小口分散されているほか、大口預金の比率を一定以下にコントロールする等により当該リスクを抑制しております。

デリバティブ取引には、ALMの一環で行っている金利スワップ取引、及びその他有価証券で保有する債券に対する先物取引、オプション取引等があります。デリバティブ取引は、投機的な取引を目的とするものではなく、主としてヘッジ目的で実施しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当行では、「リスク管理基本方針」及び各種リスク管理規程を定め、以下のリスク管理を実施する体制を整備しております。

① 信用リスクの管理

当行は、「クレジットポリシー」及び「信用リスク管理規程」等に従い、貸出金について、個別案件毎の与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、自己査定等の事後管理、保証や担保の設定、問題債権への対応、与信集中リスク管理等与信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店のほか融資担当部門により行われ、また、定期的に経営会議等を開催し、審議・報告を行っております。さらに、与信管理の状況については監査担当部門がチェックしております。

② 市場リスクの管理

市場取引については、フロントオフィス、ミドルオフィス及びバックオフィスそれぞれ独立した部署とし、相互に牽制する体制としております。

(イ) 金利リスクの管理

当行は、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。「市場リスク管理規程」等の規程に従い、金利リスク量を計測するとともに、定期的にギャップ分析や感応度分析等によりモニタリングを実施し、定期的に経営会議等に報告しております。また、現状分析を踏まえた今後の対応等の協議を行っております。

(ロ) 為替リスクの管理

当行は、「市場リスク管理規程」等に従い、為替の変動リスクに関して、総合持高、損失限度額を設定する、若しくはヘッジ取引を行う等により管理しております。

(ハ) 価格変動リスクの管理

当行は、「市場リスク管理規程」等に従い、価格変動リスクを管理しております。有価証券のリスクはバリュエーション・アット・リスク（VaR）、10BPV等リスク指標に基づいて、予め設定した限度額に対する使用状況をリスク管理部門が日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(ニ) デリバティブ取引

デリバティブ取引の取扱いにつきましては、取引の執行、ヘッジ取引の有効性検証、事務管理に係る部門を分離し、取扱規程に基づいた運用・管理のもとに行っております。

(ホ) 市場リスクに係る定量的情報

トレーディング目的以外の金融商品

当行では時価が日次で変動する商品を多数保有し、その変動額も他のリスクカテゴリーと比較して大きいため、VaRを用いた市場リスク量を日次（預金・貸出金等の金利リスク量は月次）で把握・管理しております。

2023年3月期の当行のバンキング勘定の市場リスク量は次のとおりであります。

<バンキング勘定のリスク量>

(単位：億円)

	平均	最大	最小	年度末
預金・貸出金等	0	0	0	0
有価証券	173	197	146	197
債券	55	91	28	90
株式	24	33	14	20
その他	127	165	106	165

(*1) VaRの計測手法は、原則として「分散共分散手法」で計測しております。

(*2) 保有期間は、有価証券のうち市場流動性の高い金融商品（国債、地方債、上場株式（除く政策投資）等）は60営業日（上場株式のうち政策投資銘柄は250営業日）、市場流動性の低い金融商品及び預金・貸出金等は125営業日及び250営業日で算出しております。

(*3) 信頼区間は99%、変動率を計測するための市場データの抽出期間は250営業日を使用しております。

(*4) 有価証券の「債券」と「株式」のリスクファクター間で相関を考慮しているため、合計値が合致しません。

(*5) 現在の預金・貸出金等の金利リスク量は、金利上昇リスクではなく、金利低下リスクを表すものとなっております。内部管理上は金利上昇リスクを管理することとしており、預金・貸出金等の金利リスク量を「0」としてしております。

なお、当行では、有価証券のVaRについて、市場リスク量の計測モデルの正確性を検証するため、モデルが計測した保有期間1日のVaRと実際の損失を比較するバックテストを実施しております。

現在使用している計測モデルは、相応の精度により市場リスクを捕捉しているものと考えられますが、変動率（ボラティリティ）の上昇により、リスク量（VaR）の増加が見込まれる局面では、随時対応を図り保守的に運営してまいります。

VaRによるリスク管理を行うにあたっては、特に以下の点に十分留意して活用することとしております。

(i) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、統計的な仮定に基づいて算定したものであり、前提条件や算定方法等によって異なる値となること

(ii) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、前提条件等に基づいて算定した統計的な値であり、最大損失額の予測を意図するものではないこと（信頼区間に応じた頻度で損益がVaRを上回ることが想定されること）

(iii) 将来の市場の状況は、過去とは大きく異なることがあること

なお、トレーディング目的の金融商品につきましては、保有残高が極めて少なく、経営に与える重要性が限定的であるため開示対象外としております。

③ 流動性リスクの管理

当行は、「流動性リスク管理規程」等に従い、流動性リスク管理に係る限度額を設定し、実績を日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2023年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は、次表には含めておりません（注1）参照）。また、現金預け金、買入金銭債権、外国為替（資産・負債）、債券貸借取引受入担保金は、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額の注記を省略しております。

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 商品有価証券			
売買目的有価証券	414	414	—
(2) 金銭の信託	27,860	27,860	—
(3) 有価証券 (*1)			
その他有価証券	328,850	328,850	—
(4) 貸出金	948,205		
貸倒引当金 (*2)	△6,641		
	941,564	950,316	8,751
資産計	1,298,690	1,307,441	8,751
(1) 預金	1,306,463	1,306,465	1
(2) 譲渡性預金	47,304	47,304	—
(3) 借入金	48,500	48,456	△43
負債計	1,402,267	1,402,226	△41
デリバティブ取引 (*3)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(196)	(196)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	250	250	—
デリバティブ取引計	53	53	—

(*1) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託が含まれております。なお、第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は該当ありません。

(*2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(*3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、() で表示しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	貸借対照表計上額
非上場株式 (*1) (*2)	996
組合出資金 (*3)	2,065

(*1) 非上場株式については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 令和2年3月31日)第5項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(*2) 当事業年度において、非上場株式について13百万円減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-16項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金 (*1)	132,962	—	—	—	—	—
買入金銭債権	1,611	—	—	—	—	—
有価証券						
その他有価証券のうち満期があるもの	21,459	47,420	51,899	28,699	43,060	92,646
うち国債	6,000	4,000	1,000	2,000	13,000	31,000
地方債	8,052	17,026	11,053	7,730	12,029	17,798
社債	3,326	6,333	6,854	4,282	250	35,802
その他	4,079	20,060	32,990	14,686	17,780	8,045
貸出金 (*2)	187,919	149,491	161,183	91,557	87,494	221,862
合 計	343,952	196,911	213,082	120,257	130,554	314,508

(*1) 預け金のうち、期間の定めのないものは「1年以内」に含めて開示しております。

(*2) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない19,696百万円、期間の定めのないもの29,000百万円は含めておりません。

(注3) 借入金及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金 (*1)	1,173,305	40,839	2,664	—	—	—
譲渡性預金	47,304	—	—	—	—	—
債券貸借取引 受入担保金	14,976	—	—	—	—	—
借入金	38,700	4,900	4,900	—	—	—
合 計	1,274,286	45,739	7,564	—	—	—

(*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産または負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で貸借対照表に計上している金融商品

(単位：百万円)

区 分	時 価			合 計
	レベル1	レベル2	レベル3	
金銭の信託	—	27,860	—	27,860
有価証券				
売買目的有価証券				
国債・地方債等	—	414	—	414
その他有価証券				
国債・地方債等	56,920	72,733	—	129,653
社債	—	40,280	15,741	56,022
株式	8,944	—	—	8,944
外国証券	—	35,408	—	35,408
投資信託	13,486	81,295	—	94,781
デリバティブ取引				
金利関連	—	250	—	250
通貨関連	—	200	—	200
資産計	79,350	258,444	15,741	353,536
デリバティブ取引				
通貨関連	—	397	—	397
負債計	—	397	—	397

(*1) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は含まれておりません。

第24-3項の取扱いを適用した投資信託の貸借対照表計上額は4,040百万円であります。

第24-9項の取扱いを適用した投資信託の貸借対照表計上額はありません。

財務諸表

(*2) ① 第24-3項の取扱いを適用した投資信託の期首残高から期末残高への調整表

(単位：百万円)

期首残高	当期の損益又は評価・換算差額等		購入、売却及び償還の純額	投資信託の基準価額を時価とみなすこととした額	投資信託の基準価額を時価とみなさないこととした額	期末残高	当期の損益に計上した額のうち貸借対照表日において保有する投資信託の評価損益
	損益に計上	評価・換算差額等に計上(*)					
4,000	—	40	—	4,040	—	4,040	—

(*) 貸借対照表の「評価・換算差額等」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

② 決算日における解約又は買戻請求に関する制限の内容ごとの内訳
(単位：百万円)

解約又は買戻請求に関する制限の主な内容	貸借対照表計上額
解約に際し、1カ月超前に事前通告が必要となる	4,040

(2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
貸出金	—	—	950,316	950,316
資産計	—	—	950,316	950,316
預金	—	1,306,465	—	1,306,465
譲渡性預金	—	47,304	—	47,304
借入金	—	48,456	—	48,456
負債計	—	1,402,226	—	1,402,226

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

資産

金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている金融商品については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっております。観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

売買目的有価証券及びその他有価証券

売買目的有価証券及びその他有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に地方債、社債がこれに含まれます。

相場価格が入手できない場合には、将来キャッシュ・フローの現在価値技法などの評価技法を用いて時価を算定しております。評価に当たっては観察可能なインプットを最大限利用しており、インプットには、TIBOR、国債利回り、期限前返済率、信用スプレッド、倒産確率、倒産時の損失率等が含まれます。算定にあたり重要な観察できないインプットを用いている場合には、レベル3の時価に分類しております。

また、市場における取引価格が存在しない投資信託について、解約又は買戻請求に関して市場参加者からリスクの対価を求められるほどの重要な制限がない場合には基準価額を時価とし、レベル2の時価に分類しております。

貸出金

貸出金のうち、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限る等の特性により返済期限を設けていないものについては、返済見込期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を信用格付ごとの信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。また、変動金利によるものは、内部格付、期間に基づく区分ごとに、原則として金利満期までの元利金の合計額を信用格付ごとの信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。

なお、信用リスクスプレッドは信用格付ごとの累積デフォルト率、債務者区分別ロス率を基に残存期間帯別に計算しております。

貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等に

ついては、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は決算日における貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

時価に対して観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

負債

預金、及び譲渡性預金

要求払預金については、決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価としております。また、定期預金については、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いた現在価値により時価を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際の店頭表示基準利率を用いております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

借入金

借入金の時価は、期間に基づく区分毎に、元利金の合計額を市場金利で割り引いて時価を算定しております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しており、主に債券先物取引や金利先物取引がこれに含まれます。

ただし、大部分のデリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しないため、取引の種類や満期までの期間に応じて現在価値技法やオプション価格計算モデル等の評価技法を利用して時価を算定しております。それらの評価技法で用いている主なインプットは、金利や為替レート、ボラティリティ等であり、また、取引相手の信用リスク及び当行自身の信用リスクに基づく価格調整を行っております。観察できないインプットを用いていない又はその影響が重要でない場合はレベル2の時価に分類しており、金利スワップ取引、為替予約取引等が含まれます。重要な観察できないインプットを用いている場合はレベル3の時価に分類しております。

(注2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(1) 重要な観察できないインプットに関する定量的情報（2023年3月31日）

区分	評価技法	重要な観察できないインプット	インプットの範囲	インプットの加重平均
有価証券				
その他有価証券				
社債				
私募債	現在価値技法	倒産確率	0.06% - 100.00%	3.32%
		回収率	0.00% - 24.10%	23.41%

(2) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益 (2023年3月31日)

(単位：百万円)

	期首残高	当期の損益又は評価・換算差額等		購入、売却、発行及び決済の純額	レベル3の時価への振替 (*2)	レベル3の時価からの振替 (*3)	期末残高	当期の損益に計上した額のうち貸借対照表日において保有する金融資産及び金融負債の評価損益
		損益に計上	評価・換算差額等に計上 (*1)					
有価証券								
- その他有価証券								
社債								
- 私募債	13,725	—	△60	2,076	—	—	15,741	—

- (*) 1) 貸借対照表の「評価・換算差額等」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。
 (*) 2) レベル2の時価からレベル3の時価への振替であり、該当事項はありません。
 (*) 3) レベル3の時価からレベル2の時価への振替であり、該当事項はありません。

(3) 時価の評価プロセスの説明

当行はリスク管理部門において時価の算定に関する方針及び手続きを定めており、これに沿って各取引部門が時価を算定しております。算定された時価は、独立した評価部門において、時価の算定に用いられた評価技法及びインプットの妥当性並びに時価のレベル分類の適切性を検証しております。検証結果は毎期リスク管理部門に報告され、時価の算定の方針及び手続に関する適切性が確保されております。

時価の算定に当たっては、個々の資産の性質、特性及びリスクを最も適切に反映できる評価モデルを用いております。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。

(4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

社債の時価の算定で用いている重要な観察できないインプットは、倒産確率、回収率であります。なお、倒産確率の著しい増加（減少）は、時価の著しい低下（上昇）を生じさせることになり、回収率の著しい増加（減少）は、時価の著しい上昇（低下）を生じさせることとなります。一般に、倒産確率に関して用いている仮定の変化は、回収率に関して用いている仮定の逆方向への変化を伴います。

(ストック・オプション等関係)

譲渡制限付株式報酬制度

当行は、当行の取締役（社外取締役及び監査等委員を除く）及び執行役員に対する報酬として譲渡制限付株式報酬制度を導入しており、2022年7月21日開催の当行取締役会決議に基づき、以下のとおり、譲渡制限付株式報酬として当行親会社であるフィデアホールディングス株式会社（以下、「当行親会社」という。）の普通株式の処分を行っております。

1. 譲渡制限付株式報酬に係る費用計上額及び科目名

	当事業年度
人件費（「営業経費」）	14百万円

2. 譲渡制限付株式報酬の内容

	2022年7月付与
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 7名（注） 当行の執行役員 7名
付与された株式の種類及び数	当行親会社普通株式 15,100株
付与日	2022年7月21日
勤務対象期間	当行の2022年開催定時株主総会から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限期間	当行親会社株式の処分日である2022年8月10日から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限解除条件	当行親会社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日まで継続して、当行の取締役若しくは執行役員のいずれかの地位にあったことを条件として、期間満了時点をもって、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の全部につき、譲渡制限を解除いたします。ただし、割当対象者が、取締役会が正当と認める理由により、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日の前日までに当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、2022年7月から割当対象者が当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した日を含む月までの月数を12で除した数に、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の数を乗じた数（ただし、計算の結果1株未満の端数が生ずる場合には、これを切り捨てるものとする。）の本割当株式につき、当該退任の直後の時点をもって、これに係る譲渡制限を解除するものいたします。
付与日における公正な評価単価	1,289円

(注) 社外取締役及び監査等委員を除く。

3. 譲渡制限付株式の規模及びその変動状況

前事業年度末（株）	—
付与（株）	15,100
無償取得（株）（注）	—
譲渡制限解除（株）	—
未解除残（株）	15,100

(注) 当行親会社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日の前日までに当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、取締役会が正当と認める理由がある場合を除き、本割当株式を、当該退任の時点をもって、当然に無償で取得するものいたします。

また、本割当株式のうち、本譲渡制限期間が満了した時点（以下、「期間満了時点」という。）において上表の譲渡制限解除条件の譲渡制限の解除事由の定めに基づき譲渡制限が解除されていないものがある場合には、期間満了時点の直後の時点をもって、当行親会社はこれを当然に無償で取得するものいたします。

4. 付与日における公正な評価単価の見積方法

恣意性を排除した価格とするため、譲渡制限付株式の付与に係る当行取締役会決議日の直前営業日の東京証券取引所における当行親会社普通株式の終値としております。

(税効果会計関係)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ次のとおりであります。

繰延税金資産	
貸倒引当金	1,933百万円
退職給付引当金	437百万円
固定資産減損損失	214百万円
減価償却	147百万円
有価証券償却	105百万円
その他	325百万円
繰延税金資産小計	3,163百万円
評価性引当額	△1,050百万円
繰延税金資産合計	2,113百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△541百万円
繰延ヘッジ損益	△76百万円
前払年金費用	△55百万円
繰延税金負債合計	△673百万円
繰延税金資産の純額	1,439百万円

財務諸表

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(単位：百万円)

区分	当事業年度
役務取引等収益	3,736
預金・貸出業務	912
為替業務	667
証券関連業務	43
代理業務	1,563
保護預り・貸金庫業務	27
その他業務	520
顧客との契約から生じる経常収益	3,736
上記以外の経常収益 (注)	20,640
経常収益	24,376

(注) 主に、企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」の範囲に含まれる金融商品に係る取引及び金融商品の組成又は取得に際して受け取る手数料が含まれております。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「重要な会計方針 8. 収益の計上方法」に記載しているため、省略していません。

(関連当事者との取引関係)

1. 親会社及び法人主要株主等

(単位：百万円)

種類	会社等の名称	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
親会社	フィデアホールディングス(株)	被所有 直接 100.00%	役員の兼任 経営管理等	経営管理 資金の貸付 (注1, 2)	600 10,484	— 貸出金	— 10,460

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等
一般の取引先と同様に決定しております。
2. 資金の貸付の取引金額については平均残高を記載しております。

2. 子会社及び関連会社等

会社法第2条第3号に定める子会社及び関連会社との取引はありますが、各取引項目につきまして重要性がないため記載を省略しております。

3. 兄弟会社等

(単位：百万円)

種類	会社等の名称	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
親会社の子会社	フィデアカード(株)	所有 直接 — 間接 —	役員の兼任 貸出金の被保証	住宅ローン 等の保証 (注1, 2)	—	—	—

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等
一般の取引先と同様に決定しております。
2. フィデアカード(株)は、当行の住宅ローン等の保証を引受けており、2023年3月末の保証残高は311,940百万円であります。また、当行の同社に対する期中の保証料の支払額は358百万円であります。代位弁済額は392百万円であります。
なお、上記以外につきましても、兄弟会社との取引はありますが、各取引項目につきまして重要性がないため記載を省略しております。

4. 役員及び個人主要株主等

取締役及びその近親者並びに親会社の役員の近親者に対する取引はありませんが、取引の性質から見て取引条件が一般の取引と同様であることが明白な取引であるため、記載を省略しております。

(持分法損益等)

当行の関係会社は、損益及び利益剰余金その他の項目からみて重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(1株当たり情報)

1株当たりの純資産額	482円85銭
1株当たりの当期純利益金額	13円44銭

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

決算公告・財務諸表に係る確認書

❖決算公告について

決算公告につきましては、当行ホームページに掲載しております。

❖財務諸表に係る確認書

「財務諸表の正確性、内部監査の有効性についての経営者責任の明確化について（要請）」（平成17年10月7日付金監第2835号）に基づく、当行の財務諸表の適正性、及び財務諸表作成に係る内部監査の有効性に関する代表者の確認書は以下のとおりです。

確認書

2023年6月23日

株式会社 荘内銀行
取締役頭取 松田 正彦

私は、当行の2022年4月1日から2023年3月31日までの事業年度（2023年3月期）に係る財務諸表の適正性、及び財務諸表作成に係る内部監査の有効性を確認しております。

以 上

損益の状況

❖国内・国際業務部門別粗利益

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用収支	14,122	1,281	15,404	14,923	1,377	16,300
役務取引等収支	1,549	△2	1,547	1,576	△2	1,573
その他業務収支	△314	△607	△922	21	△3,742	△3,720
業務粗利益	15,358	670	16,028	16,520	△2,367	14,153
業務粗利益率	1.25%	1.21%	1.29%	1.25%	△4.95%	1.06%

(注) 1. 国内業務部門は国内店の円建取引、国際業務部門は国内店の外貨建て取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

$$2. \text{業務粗利益率} = \frac{\text{業務粗利益}}{\text{資金運用勘定平均残高}} \times 100$$

❖業務純益

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
業務純益	3,582	131	3,713	5,272	△2,886	2,385
実質業務純益	3,621	131	3,752	5,491	△2,886	2,604
コア業務純益	3,946	682	4,628	5,491	△148	5,343
コア業務純益 (除く投資信託解約損益)	3,418	682	4,100	2,347	△148	2,199

❖役務取引の状況

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
役務取引等収益	3,877	17	3,894	3,870	18	3,888
役務取引等費用	2,327	20	2,347	2,294	20	2,315

❖その他業務収支の内訳

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
その他業務収支	△314	△607	△922	21	△3,742	△3,720
その他業務収益	1,295	414	1,710	2,055	92	2,148
外国為替売買益	-	-	-	-	-	-
商品有価証券売買益	-	-	-	-	-	-
国債等債券売却益	1,283	414	1,697	2,029	92	2,122
国債等債券償還益	-	-	-	-	-	-
金融派生商品収益	10	-	10	-	-	-
その他	2	-	2	25	-	25
その他業務費用	1,610	1,022	2,633	2,034	3,835	5,869
外国為替売買損	-	57	57	-	1,003	1,003
商品有価証券売買損	1	-	1	1	-	1
国債等債券売却損	1,608	965	2,574	2,029	2,831	4,860
国債等債券償還損	-	-	-	-	-	-
国債等債券償却	-	-	-	-	-	-
債券費・社債費	-	-	-	-	-	-
金融派生商品費用	-	-	-	3	-	3
その他	-	-	-	-	-	-

❖資金運用・調達勘定平均残高、利息、利回り

(単位：百万円)

		2022年3月期			2023年3月期		
		国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用勘定	平均残高	(40,710) 1,221,743	55,032	1,236,065	(36,277) 1,311,607	47,736	1,323,066
	利息	(5) 14,216	1,311	15,522	(3) 15,083	1,570	16,650
	利回り	1.16%	2.38%	1.25%	1.15%	3.28%	1.25%
資金調達勘定	平均残高	1,617,778	(40,710) 56,010	1,633,079	1,419,913	(36,277) 47,763	1,431,399
	利息	93	(5) 30	118	160	(3) 192	350
	利回り	0.00%	0.05%	0.00%	0.01%	0.40%	0.02%

(注) 1. () 内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息（内書き）であります。

2. 国際業務部門の外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式（前月末 T T 仲値を当該月のノンエキステンジ取引に適用する方式）により算出しております。

3. 合計欄において国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。

❖営業経費の内訳

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
給料・手当	3,957	3,780
退職給付費用	170	39
福利厚生費	830	800
減価償却費	961	854
土地建物機械賃借料	507	488
営繕費	16	19
保守管理費	327	322
消耗品費	128	112
給水光熱費	107	125
旅費	19	25
通信費	282	276
広告宣伝費	108	93
諸会費・寄付金・交際費	87	97
租税公課	935	799
業務委託費	1,340	1,379
臨時雇用費	976	840
役員賞与引当金繰入額	18	15
その他	1,526	1,361
合計	12,303	11,434

❖受取利息・支払利息の分析

(単位：百万円)

	2022年3月期						2023年3月期					
	国内業務部門			国際業務部門			国内業務部門			国際業務部門		
	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減
受取利息	△536	△2,796	△3,333	△190	53	△137	1,045	△178	867	△173	432	258
支払利息	27	△183	△156	△12	△59	△72	△11	78	67	△4	166	162

(注) 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、利率による増減に含めて記載しております。

経営諸比率

◆利鞘

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用利回り	1.16	2.38	1.25	1.15	3.28	1.25
資金調達原価	0.73	1.01	0.75	0.78	1.49	0.83
総資金利鞘	0.43	1.37	0.50	0.37	1.79	0.42

◆利益率

(単位：%)

	2022年3月期	2023年3月期
総資産経常利益率	0.20	0.15
資本経常利益率	6.16	4.26
総資産当期純利益率	0.09	0.10
資本当期純利益率	2.76	2.91

(注) 1. 総資産経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常（当期純）利益}}{\text{総資産（除く支払承諾見返）平均残高}} \times 100$

2. 資本経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常（当期純）利益}}{\text{純資産勘定平均残高}} \times 100$

3. 分母となる純資産の部平均残高は、「期中平均残高」を使用し算出しております。

◆預貸率

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	62.63	—	62.48	68.96	—	68.78
期中平均	63.04	—	62.89	67.14	—	66.97

(注) 預貸率は、預金・譲渡性預金の合計に対する貸出金の比率です。

◆預証率

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	22.40	1,334.10	25.60	21.95	1,039.03	24.51
期中平均	23.71	1,590.26	27.47	20.80	1,240.43	23.97

(注) 預証率は、預金・譲渡性預金の合計に対する保有有価証券の比率です。

◆従業員1人当たり預金残高・貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
従業員1人当たり預金	2,021	2,322
従業員1人当たり貸出金	1,289	1,626

(注) 1. 預金には譲渡性預金を含んでおります。

2. 従業員数は、出向者を除いた期中平均実働人員で算出しております。

◆1店舗当たり預金残高・貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
1店舗当たり預金	15,408	15,560
1店舗当たり貸出金	9,823	10,898

(注) 1. 預金には譲渡性預金を含んでおります。

2. 店舗数には出張所を含んでおりません。

預金

◆預金科目別残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
流動性預金	796,560	61.4	796,560	—	832,463	63.7	832,463	—
うち有利息預金	720,571	55.5	720,571	—	751,151	57.5	751,151	—
定期性預金	488,776	37.6	488,776	—	461,214	35.3	461,214	—
うち固定金利定期預金	481,118	37.1	481,118	—	453,959	34.7	453,959	—
うち変動金利定期預金	48	0.0	48	—	39	0.0	39	—
その他	12,582	1.0	9,305	3,276	12,785	1.0	9,377	3,407
合計	1,297,919	100.0	1,294,642	3,276	1,306,463	100.0	1,303,055	3,407
譲渡性預金	42,647		42,647	—	47,304		47,304	—
総合計	1,340,566		1,337,290	3,276	1,353,767		1,350,360	3,407

(平均残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月期				2023年3月期			
	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
流動性預金	774,246	60.0	774,246	—	821,102	62.4	821,102	—
うち有利息預金	685,642	53.1	685,642	—	727,484	55.3	727,484	—
定期性預金	503,386	39.0	503,386	—	477,636	36.3	477,636	—
うち固定金利定期預金	495,885	38.4	495,885	—	470,150	35.7	470,150	—
うち変動金利定期預金	49	0.0	49	—	40	0.0	40	—
その他	12,698	1.0	9,485	3,213	16,528	1.3	12,983	3,544
合計	1,290,331	100.0	1,287,118	3,213	1,315,268	100.0	1,311,723	3,544
譲渡性預金	51,042		51,042	—	46,598		46,598	—
総合計	1,341,374		1,338,161	3,213	1,361,866		1,358,321	3,544

- (注) 1. 流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金
 2. 定期性預金＝定期預金＋定期積金
 固定金利定期預金：預入時に満期日までの利率が確定する定期預金
 変動金利定期預金：預入期間中の市場金利の変化に応じて金利が変動する定期預金
 3. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

預金

❖定期預金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日
3ヵ月未満	定期預金	104,783	101,051
	うち固定金利定期預金	104,779	101,051
	うち変動金利定期預金	3	0
3ヵ月以上 6ヵ月未満	定期預金	113,325	107,908
	うち固定金利定期預金	113,310	107,907
	うち変動金利定期預金	14	1
6ヵ月以上 1年未満	定期預金	204,456	195,458
	うち固定金利定期預金	204,455	195,441
	うち変動金利定期預金	1	17
1年以上 2年未満	定期預金	13,859	9,964
	うち固定金利定期預金	13,838	9,953
	うち変動金利定期預金	21	10
2年以上 3年未満	定期預金	9,086	3,564
	うち固定金利定期預金	9,077	3,554
	うち変動金利定期預金	8	10
3年以上	定期預金	2,220	2,355
	うち固定金利定期預金	2,220	2,355
	うち変動金利定期預金	—	—
合計		447,730	420,303

(注) 本表の預金残高には、積立定期預金を含んでおりません。

❖預金者別預金残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
個人預金	966,348	72.1	976,671	72.1
法人預金	294,646	22.0	293,813	21.7
その他	79,571	5.9	83,283	6.2
合計	1,340,566	100.0	1,353,767	100.0

❖財形貯蓄預金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
財形貯蓄預金	7,371	7,385

貸出金

◆貸出金科目別残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
手形貸付	12,128	1.4	12,128	—	12,012	1.3	12,012	—
証書貸付	780,709	91.4	780,709	—	875,408	92.3	875,408	—
当座貸越	60,846	7.1	60,846	—	59,634	6.3	59,634	—
割引手形	926	0.1	926	—	1,151	0.1	1,151	—
合計	854,611	100.0	854,611	—	948,205	100.0	948,205	—

〈平均残高〉

(単位：百万円、%)

	2022年3月期				2023年3月期			
	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
手形貸付	10,983	1.3	10,983	—	11,330	1.2	11,330	—
証書貸付	787,405	91.5	787,405	—	855,172	92.1	855,172	—
当座貸越	61,245	7.1	61,245	—	61,305	6.6	61,305	—
割引手形	1,022	0.1	1,022	—	1,238	0.1	1,238	—
合計	860,657	100.0	860,657	—	929,045	100.0	929,045	—

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

◆貸出金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日
1年以下	貸出金	131,461	200,201
	うち変動金利		
	うち固定金利		
1年超 3年以下	貸出金	140,746	150,282
	うち変動金利	56,969	58,260
	うち固定金利	83,776	92,022
3年超 5年以下	貸出金	152,418	162,249
	うち変動金利	54,993	54,960
	うち固定金利	97,425	107,288
5年超 7年以下	貸出金	92,517	94,857
	うち変動金利	34,171	34,988
	うち固定金利	58,346	59,869
7年超	貸出金	315,640	318,761
	うち変動金利	192,020	185,903
	うち固定金利	123,619	132,858
期間の定め のないもの	貸出金	21,826	21,852
	うち変動金利	8,143	7,885
	うち固定金利	13,683	13,967
合計		854,611	948,205

(注) 残存期間1年以下の貸出金については、変動金利・固定金利の区別をしておりません。

貸出金

◆貸出金業種別残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
製造業	56,720	6.6	56,998	6.0
農業、林業	1,653	0.2	1,757	0.2
漁業	67	0.0	52	0.0
鉱業、採石業、砂利採取業	113	0.0	88	0.0
建設業	34,497	4.0	29,741	3.1
電気・ガス・熱供給・水道業	28,880	3.4	32,616	3.5
情報通信業	2,033	0.2	1,148	0.1
運輸業、郵便業	7,710	0.9	6,649	0.7
卸売業、小売業	38,543	4.5	38,080	4.0
金融業、保険業	40,055	4.7	70,345	7.4
不動産業、物品賃貸業	61,228	7.2	71,664	7.6
学術研究、専門・技術サービス業	1,716	0.2	1,765	0.2
宿泊業、飲食サービス業	8,289	1.0	7,801	0.8
生活関連サービス業、娯楽業	5,714	0.7	6,354	0.7
教育、学習支援業	3,093	0.4	2,960	0.3
医療・福祉	17,962	2.1	17,528	1.9
その他のサービス	23,468	2.7	21,029	2.2
地方公共団体	171,389	20.1	180,213	19.0
その他	351,469	41.1	401,407	42.3
合計	854,611	100.0	948,205	100.0

※業種別の内訳「その他」には、中央政府（財務省特別会計）向け貸出金（2022年3月31日は当該貸出金なし、2023年3月31日は75,610百万円）が含まれております。

◆貸出金の担保別内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
有価証券	3,642	3,624
債権	4,304	4,262
商品	—	—
不動産	75,929	81,819
その他	23,796	26,194
小計	107,672	115,900
保証	425,101	395,339
信用	321,836	436,965
合計	854,611	948,205
(うち劣後特約付貸出金*)	(1,001)	(876)

※貸出金のうち、劣後特約付貸出金の残高を表記しております。

◆支払承諾見返の担保別内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
有価証券	—	—
債権	70	70
商品	—	—
不動産	986	830
その他	—	—
小計	1,056	900
保証	188	156
信用	4,452	4,787
合計	5,697	5,843

◆貸出金使途別残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
設備資金	467,425	54.7	449,721	47.4
運転資金	387,186	45.3	498,483	52.6
合計	854,611	100.0	948,205	100.0

❖中小企業等に対する貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
中小企業等貸出金残高 (貸出金に占める割合)	616,870 (72.18%)	621,490 (65.54%)

(注) 中小企業等とは、資本金3億円（ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円）以下の会社又は常用する従業員が300人（ただし、卸売業、物品賃貸業等は100人、小売業、飲食業は50人）以下の企業等であります。

❖個人ローン残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
住宅ローン	327,136	304,431
その他ローン	25,378	23,868
合計	352,514	328,300

❖貸倒引当金内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	期中増減額	残高	期中増減額
一般貸倒引当金	1,347	39	1,566	219
個別貸倒引当金	5,712	131	5,455	△256
合計	7,059	170	7,021	△37

❖貸出金償却額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
貸出金償却額	102	0

❖特定海外債権残高

2022年3月末及び2023年3月末ともに該当事項はありません。

❖リスク管理債権及び金融再生法開示債権

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	総与信に占める割合	残高	総与信に占める割合
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	4,283	0.48	5,008	0.51
危険債権	13,699	1.56	15,463	1.59
要管理債権	847	0.09	549	0.05
三月以上延滞債権	—	—	—	—
貸出条件緩和債権	847	0.09	549	0.05
合計	18,830	2.14	21,022	2.16
正常債権	857,046	97.85	950,461	97.83
総与信（未残）	875,876	100.00	971,483	100.00

※部分直接償却は実施していません。

証券

◆保有有価証券残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日			2023年3月31日		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
国債	61,307 (20.5)	–	61,307 (17.9)	56,920 (19.2)	–	56,920 (17.1)
地方債	100,736 (33.6)	–	100,736 (29.3)	72,733 (24.5)	–	72,733 (21.9)
社債	58,566 (19.5)	–	58,566 (17.1)	56,022 (18.9)	–	56,022 (16.9)
株式	11,272 (3.8)	–	11,272 (3.3)	9,940 (3.4)	–	9,940 (3.0)
その他の証券	67,711 (22.6)	43,714 (100.0)	111,426 (32.4)	100,887 (34.0)	35,408 (100.0)	136,295 (41.1)
うち外国債券	–	43,714 (100.0)	43,714 (12.7)	–	35,408 (100.0)	35,408 (10.6)
うち外国株式	–	–	–	–	–	–
合計	299,594 (100.0)	43,714 (100.0)	343,309 (100.0)	296,503 (100.0)	35,408 (100.0)	331,912 (100.0)

〈平均残高〉

(単位：百万円、%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
国債	67,850 (21.4)	–	67,850 (18.4)	63,293 (22.4)	–	63,293 (19.4)
地方債	104,125 (32.8)	–	104,125 (28.3)	86,101 (30.5)	–	86,101 (26.4)
社債	55,387 (17.4)	–	55,387 (15.0)	57,506 (20.3)	–	57,506 (17.6)
株式	8,197 (2.6)	–	8,197 (2.2)	6,571 (2.3)	–	6,571 (2.0)
その他の証券	81,831 (25.8)	51,095 (100.0)	132,926 (36.1)	69,107 (24.5)	43,973 (100.0)	113,080 (34.6)
うち外国債券	–	51,095 (100.0)	51,095 (13.8)	–	43,973 (100.0)	43,973 (13.4)
うち外国株式	–	–	–	–	–	–
合計	317,392 (100.0)	51,095 (100.0)	368,488 (100.0)	282,580 (100.0)	43,973 (100.0)	326,554 (100.0)

(注) 1. () 内は構成比であります。

2. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

◆公共債引受額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	–	438
地方債	–	45
政府保証債	–	–
その他の商品有価証券	–	–
合計	–	483

◆公共債窓口販売実績

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	181	438
地方債	45	45
政府保証債	–	–
その他の商品有価証券	–	–
合計	226	483

◆商品有価証券平均残高

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	2	2
地方債	418	418
政府保証債	–	–
その他の商品有価証券	–	–
合計	420	420

◆有価証券の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日	
国債	1年以内	11,000	6,000	
	1年超3年以内	9,000	4,000	
	3年超5年以内	5,000	1,000	
	5年超7年以内	—	2,000	
	7年超10年以内	20,000	13,000	
	10年超	15,000	31,000	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	60,000	57,000	
地方債	1年以内	7,978	8,052	
	1年超3年以内	18,233	17,026	
	3年超5年以内	16,683	11,053	
	5年超7年以内	13,768	7,730	
	7年超10年以内	16,686	12,029	
	10年超	25,917	17,798	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	99,268	73,691	
社債	1年以内	2,820	3,326	
	1年超3年以内	6,060	6,333	
	3年超5年以内	6,009	6,854	
	5年超7年以内	4,955	4,282	
	7年超10年以内	350	250	
	10年超	38,408	35,802	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	58,604	56,850	
株式	期間の定めのないもの	11,272	9,940	
その他の証券	1年以内	4,603	4,079	
	1年超3年以内	10,249	20,060	
	3年超5年以内	14,803	32,990	
	5年超7年以内	23,139	14,686	
	7年超10年以内	17,960	17,780	
	10年超	10,210	8,045	
	期間の定めのないもの	30,458	38,651	
	合計	111,426	136,295	
	うち 外国債券	1年以内	1,235	—
		1年超3年以内	4,635	6,157
3年超5年以内		9,230	20,521	
5年超7年以内		19,783	6,326	
7年超10年以内		8,334	2,402	
10年超		495	—	
期間の定めのないもの	—	—		
合計	43,714	35,408		
うち 外国株式	期間の定めのないもの	—	—	

有価証券等の時価等情報

有価証券関係

○貸借対照表の「国債」「地方債」「社債」「株式」「その他の証券」のほか、「商品有価証券」が含まれております。

1. 売買目的有価証券

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
	当事業年度の損益に含まれた評価差額	当事業年度の損益に含まれた評価差額
売買目的有価証券	1	△1

2. 満期保有目的の債券

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

3. 子会社株式及び関連会社株式

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(注) 市場価格のない子会社株式及び関連会社株式等

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
	貸借対照表計上額	貸借対照表計上額
子会社株式	—	—
関連会社株式	—	—
組合出資金	180	230
合計	180	230

4. その他有価証券

(単位：百万円)

	種類	2022年3月31日			2023年3月31日		
		貸借対照表計上額	取得原価	差額	貸借対照表計上額	取得原価	差額
貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	8,250	4,123	4,127	6,858	3,198	3,660
	債券	109,149	106,174	2,974	56,435	55,486	949
	国債	33,702	32,974	727	13,196	13,017	179
	地方債	50,159	48,385	1,773	21,754	21,348	406
	社債	25,287	24,814	473	21,484	21,120	363
	その他	74,938	65,784	9,153	53,555	48,131	5,423
	小計	192,338	176,082	16,255	116,850	106,816	10,033
貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	2,107	2,252	△144	2,085	2,205	△119
	債券	111,460	113,303	△1,842	129,240	132,989	△3,748
	国債	27,605	28,102	△496	43,723	44,608	△884
	地方債	50,576	51,409	△832	50,979	52,651	△1,672
	社債	33,278	33,790	△512	34,537	35,729	△1,191
	その他	35,108	37,480	△2,371	80,814	85,161	△4,347
	小計	148,677	153,036	△4,358	212,140	220,355	△8,215
合計		341,016	329,118	11,897	328,990	327,172	1,818

5. 当該事業年度中に売却した満期保有目的の債券

2022年3月期及び2023年3月期とも該当事項はありません。

6. 当該事業年度中に売却したその他有価証券

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	12,410	1,912	779	10,301	1,067	488
債券	79,372	158	502	70,742	1,287	580
国債	79,289	157	502	52,002	448	355
地方債	—	—	—	18,740	838	225
社債	83	1	—	—	—	—
その他	126,937	1,974	2,589	116,139	935	4,344
合計	218,720	4,045	3,871	197,183	3,290	5,413

7. 保有目的を変更した有価証券

2022年3月期及び2023年3月期とも該当事項はありません。

8. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券（市場価格のない株式及び組合出資金を除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当事業年度の損失として処理（以下、「減損処理」という。）しております。

前事業年度における減損処理額はありません。

当事業年度における減損処理額は34百万円であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、次のとおり定めております。

- (1) 時価が取得原価に比べて50%以上下落している場合。
- (2) 時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落した場合について、発行会社の財務内容や一定期間の時価の推移等を勘案し、当行が制定した基準に該当した場合。

有価証券等の時価等情報

金銭の信託関係

1. 運用目的の金銭の信託

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	貸借対照表計上額	損益に含まれた評価差額	貸借対照表計上額	損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託	25,654	211	27,860	181

2. 満期保有目的の金銭の信託

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

3. その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

その他有価証券評価差額金

貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
	評価差額	11,897
その他有価証券	11,897	1,818
その他の金銭の信託	—	—
(△) 繰延税金負債	△3,615	△541
その他有価証券評価差額金	8,281	1,276

デリバティブ取引関係

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時 価	評価損益	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時 価	評価損益
店頭	為替予約								
	売建	31,907	—	△1,550	△1,550	33,140	—	△196	△196
	買建	636	—	18	18	—	—	—	—
合計			△1,532	△1,532			△196	△196	

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

(3) 株式関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(6) クレジットデリバティブ取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

有価証券等の時価等情報

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価
店頭	金利スワップ 受取変動・ 支払固定	その他有価証券 (国債)	—	—	—	その他有価証券 (国債)	25,000	25,000	250
	合計				—				250

(注) 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日）に基づき、繰延ヘッジによっております。

(2) 通貨関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(3) 株式関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

暗号資産

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

国際業務等

❖内国為替取扱高

(単位：千口、億円)

		2022年3月期		2023年3月期	
		口数	金額	口数	金額
送金為替	各地へ向けた分	3,493	26,428	3,500	27,398
	各地より受けた分	4,322	28,800	4,403	29,265
代金取立	各地へ向けた分	16	263	19	384
	各地より受けた分	2	29	2	24
金額合計			55,521		57,072

❖外国為替取扱高

(単位：百万米ドル)

		2022年3月期		2023年3月期	
		仕向為替	売渡為替	65	85
	買入為替	0	0		
被仕向為替	支払為替	63	78		
	取立為替	—	—		
合計		129	164		

❖外貨建資産残高

(単位：百万米ドル)

	2022年3月31日	2023年3月31日
外貨建資産残高	369	278

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖自己資本の充実の状況（単体）

当行は、銀行法施行規則（昭和57年大蔵省令第10号）第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項（自己資本比率規制の第3の柱（市場規律））として、当期（2022年4月1日から2023年3月31日まで）及び前期（2021年4月1日から2022年3月31日まで）の開示事項を、以下のとおり、開示しております。

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第19号。以下、「自己資本比率告示」又は「告示」という。）に定められた算式に基づき、算出しております。

また、当行は、国内基準を適用の上信用リスク・アセットの算出においては標準的手法（注）を採用しております。

（注）標準的手法とは、あらかじめ監督当局が設定したリスク・ウェイトを使用して信用リスク・アセットを算出する手法のことであります。

❖自己資本の構成に関する開示事項（単体）

自己資本の構成及び自己資本比率（単体）

（単位：百万円、％）

項目	2022年 3月31日	2023年 3月31日
コア資本に係る基礎項目（1）		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	54,923	55,941
うち、資本金及び資本剰余金の額	28,808	28,808
うち、利益剰余金の額	26,455	27,471
うち、自己株式の額（△）	-	-
うち、社外流出予定額（△）	339	338
うち、上記以外に該当するものの額	-	-
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	-	-
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	1,619	1,793
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	1,619	1,793
うち、適格引当金コア資本算入額	-	-
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	119	55
コア資本に係る基礎項目の額（イ）	56,662	57,790
コア資本に係る調整項目（2）		
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	523	403
うち、のれんに係るものの額	-	-
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	523	403
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	-	-
適格引当金不足額	-	-
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	-	-
負債の時価評価より生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	-	-
前払年金費用の額	29	126
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	-	-
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	-	-
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	-	-
特定項目に係る十パーセント基準超過額	-	-
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	-	-
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	-	-
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	-	-
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	-	-
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	-	-
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	-	-
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	-	-
コア資本に係る調整項目の額（ロ）	553	530
自己資本		
自己資本の額（（イ）－（ロ））（ハ）	56,109	57,259
リスク・アセット等（3）		
信用リスク・アセットの額の合計額	515,574	507,377
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	289	271
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	-	-
うち、土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額	1,331	1,235
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	△1,041	△963
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	-	-
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	33,805	34,235
信用リスク・アセット調整額	-	-
オペレーショナル・リスク相当額調整額	-	-
リスク・アセット等の額の合計額（ニ）	549,379	541,612
自己資本比率		
自己資本比率（（ハ）／（ニ））	10.21	10.57

◆定性的な開示事項（単体）

1. 自己資本調達手段（その額の全部又は一部が、自己資本比率告示第37条の算式におけるコア資本に係る基礎項目の額に含まれる資本調達手段をいう。）の概要

2022年3月末、2023年3月末の自己資本調達手段の概要は以下のとおりであります。

発行主体	荘内銀行
資本調達手段の種類	普通株式
コア資本に係る基礎項目の額に算入された額	
単体自己資本比率	28,808百万円
配当率又は利率	—
償還期限の有無	無
その日付	—
償還等を可能とする特約の概要	—
初回償還可能日及びその償還金額	—
償還特約の対象となる事由	—
他の種類の資本調達手段への転換に係る特約の概要	—
元本の削減に係る特約の概要	—
配当等停止条項の有無	無
未配当の剰余金又は未払の利息に係る累積の有無	無

2. 自己資本の充実度に関する評価方法の概要

2022年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法として、第一に銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有している資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第19号）に定められた算式に基づき算出した自己資本比率の十分性を評価基準としております。当行の2022年3月期単体自己資本比率は10.21%であり、内部留保の蓄積のほか、資本政策の実行等により引き続き自己資本を充実させてまいります。

当行では、自己資本の充実度について、自己資本比率、銀行勘定の金利リスク及び統合リスク量（信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスク）により評価しております。また、結果をリスクマネジメント会議等に報告するほか、内部環境や外部環境の状況に照らし、主要シナリオの妥当性の検証、リスクごとのストレステストの実施等を踏まえて評価、管理を行っております。

2023年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法は、前期と変更ありません。当行の2023年3月期単体自己資本比率は10.57%であります。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

※以下の「3. 信用リスクに関する事項」から「9. 金利リスクに関する事項」までの開示内容については、特にことわりがない限りは2021年度、2022年度とも相違はありません。

3. 信用リスクに関する事項

イ. リスク管理方針及び手続の概要

① リスクの定義

当行では、信用リスクを、信用供与先の財務状況の悪化等により、資産（オフ・バランス資産を含む）の価値が減少ないし消失し、当行が損失を被るリスクと定義しております。

② リスク管理の方針

当行では、個々の信用リスクの度合いを適正に把握した上で、信用リスクの分散を基本とした信用集中リスクの管理を行い、最適な与信ポートフォリオの構築と、資産の健全性及び収益性向上を図る方針としております。

個々の信用リスクの度合いについては、デフォルト率を基に信用格付を設定し、さらには自己査定を通じて債務者ごとの信用状態を把握することを基本としております。また、評価・計測した信用リスク量や個社の信用リスクの状況等について、定期的に経営会議等への報告を行っております。

③ リスク管理の手続の概要

当行では、リスク管理の方針に則り、デフォルト率を基にして信用格付の設定を行い、信用格付に基づき将来見通し等を踏まえ債務者区分の判定を行っております。債務者の財務状況、担保・保証等の状況について、継続的なモニタリングによる与信管理を行い、債務者の状況の変化に応じて、適宜、信用格付及び債務者区分等の見直しを行う随時査定態勢を構築しております。

信用リスク量の計測につきましては、信用格付別等のデフォルト率や回収見込率等のパラメータを基に、EL（Expected Loss：期待損失）及びUL（Unexpected Loss：非期待損失）等の信用リスク量を定期的に評価・計測し、また、計測したULやそのストレステストの結果を基にリスク資本を配賦しております。

個別融資の取組みにあたっては、法令等を遵守した上で融資業務の規範として位置付けている「クレジットポリシー」に基づき、また、貸出の最終決裁権限を取締役に置き、適切な運営を行っております。

大口先の与信管理については、取締役承認基準を設定し、信用集中リスクの管理を行っております。さらに、重要な大口先や経営支援先等については、クレジット会議に報告し、該当先の信用リスクの状況等について情報の共有に努めております。

経営会議等ではこれらの報告等を踏まえ、適時適切に指示等を行う態勢としております。

④ 貸倒引当金の計上基準

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している先に係る債権及びそれと同等の状況にある先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないものの、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額のうち、必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績率等を基に予想損失率を算出し計上しております。

当行の全ての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査した上で、最終的に経営会議にて承認しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

ロ. 標準的手法が適用されるポートフォリオについて、リスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称及びエクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インベスターズ・サービスの3格付機関を採用しております。

4. 信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. 信用リスク削減手法

自己資本比率の算出において、告示第80条の規定に基づく信用リスク削減手法として「包括的手法」を採用しております。信用リスク削減手法とは、当行が抱える信用リスクを軽減するための措置であり、担保、保証、貸出金と預金との相殺等が該当します。

ロ. 方針及び手続

エクスポージャーの信用リスクの削減手段として有効と認められる適格金融資産担保については、自行預金、日本国政府または我が国の地方公共団体が発行する円建て債券、上場会社の株式を対象として取り扱っております。また、保証については、独立行政法人住宅金融支援機構や政府関係機関、我が国の地方公共団体及び十分な保証能力を有する保証会社等を信用リスク削減手法に使用しております。

貸出金と自行預金の相殺にあたっては、債務者の担保（総合口座を含む）登録のない定期預金を対象としております。

ハ. 信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスクの集中

同一業種へ偏ることなく、信用リスクは分散されております。

5. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. リスク資本及び与信限度枠の割当方法に関する方針

当行では、派生商品取引にかかる取引相手の信用リスクに関して、カレント・エクスポージャー方式(*)により算出し、取引先ごとに明確に与信限度枠を定めて管理しております。また、リスク資本配賦枠に関しては、オン・バランス取引と合算した上で、配賦したリスク資本の範囲内に収めるよう管理しております。

(*) デリバティブの信用リスク額の算出方法の一つ。「想定元本×契約残存期間別の掛け目+再構築コスト」で算出。

当行における派生商品取引は、ヘッジ目的で利用されており、投機的な取引は行っておりません。また、追加的な担保提供を必要とする場合においても、派生商品取引の額が限定的であることや適格担保となりうる国債等の有価証券を十分に保有しており、影響は極めて軽微であります。

ロ. 長期決済期間取引に関する事項

当行では、長期決済期間取引に係る与信相当額はありませぬ。

6. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. リスク管理の方針及びリスク特性の概要

当行は、投資家として証券化取引に関与しております。

当行では、外部格付の水準、スプレッド、裏付資産の状況等を総合的に勘案するなど適切なリスク管理、会計処理を行っております。

ロ. 告示第248条第1項第1号から第4号までに規定する体制の整備及びその運用状況の概要

当行では、証券化商品等（投資信託等に含まれるものを含む）について、発行体及びその裏付資産等の包括的なリスク特性や構造上の特性が継続的に把握できるように、継続的な情報収集とモニタリングを実施し、適切な管理態勢を構築しております。

① オリジネーター

該当事項はありません。

② 投資家

有価証券関連の証券化取引は、他の有価証券運用と同様に、VaR（バリュー・アット・リスク）限度額管理の対象としており、リスク統括管理部署経由で経営陣に報告しております。

ハ. 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針

信用リスク削減手法として証券化取引を用いておりませぬ。

ニ. 証券化エクスポージャーの信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称

当行では、「外部格付準拠方式」により証券化エクスポージャーの信用リスク・アセット額を算出しております。

ホ. 証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称

マーケット・リスク相当額にかかる額は算入しておりませぬ。

ヘ. 当行が証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行った場合には、当該証券化目的導管体の種類及び当該証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているかどうかの別

当該証券化取引は行っておりませぬ。

ト. 当行の子法人等（連結子法人等を除く）及び関連法人等のうち当行が行った証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているものの名称

該当事項はありません。

チ. 証券化取引に関する会計方針

証券化取引の会計上の処理につきましては、金融資産の契約上の権利に対する支配が他に移転したことにより金融資産の消滅を認識する売却処理を採用しております。

証券化取引における資産の売却は、証券化取引の委託者である当行が、優先受益権を売却した時点で証券化取引における資産の売却を認識しております。

リ. 証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インベスターズ・サービスの3格格付機関を採用しております。

なお、証券化エクスポージャーの種類に応じた格付機関の使い分けは行っておりませぬ。

ヌ. 内部評価方式を用いている場合には、その概要

内部評価方式は用いておりませぬ。

ル. 定量的な情報に重要な変更が生じた場合には、その内容

該当事項はありません。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

7. オペレーショナル・リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

① オペレーショナル・リスク

オペレーショナル・リスクとは、業務の過程、役職員の活動もしくはシステムが不適切であることまたは外生的な事象により損失を被るリスクをいい、当行ではシステムリスク、事務リスク、その他オペレーショナル・リスクに大別して管理しております。

当行では、各オペレーショナル・リスク管理に関する基本方針を「リスク管理基本方針」に定め、その方針に基づき「オペレーショナル・リスク管理規程」を制定し、これを遵守しております。また、これらオペレーショナル・リスクに係る諸問題はリスクマネジメント会議等で協議・報告を行うなど、管理態勢の強化に努めております。

② 事務・システムリスク

事務リスクとは、役職員が正確な事務を怠る、あるいは事故・不正等を起こすことにより、損失を被るリスクをいいます。

システムリスクとは、コンピュータシステムの停止または誤作動、システムの不備、コンピュータの不正使用、顧客データの紛失・破壊・改ざん・漏洩等により、損失を被るリスクをいいます。

当行では、事務・システムリスクの管理にあたり、それぞれのリスク管理の基本事項を定めた「事務リスク管理規程」、「システムリスク管理規程」を制定した上、事務・システムリスク管理部署が業務運営に係る事務・システムリスクの把握・管理を実施するとともに、各リスク所管部がより専門的な立場からそれぞれのリスクを管理しております。

事務・システムリスクは、業務運営を行っていく上でその影響や重要性に鑑み可能な限り回避すべきリスクであり、適切に管理するための組織体制や行内牽制態勢を整備し、リスク発生時の未然防止やリスク発生時の影響極小化に努めております。

また、監査部門による厳格な内部監査の実施により、全店における再発防止策等リスク対応策への取組状況や有効性を検証するなど、行内牽制を図っております。

③ その他オペレーショナル・リスク

その他オペレーショナル・リスクとは、システムリスク、事務リスク以外のオペレーショナル・リスクをいいます。具体的には法務リスク、人的リスク、有形資産リスク、危機管理のことをいい、当行では各種のその他オペレーショナル・リスクの管理部門を定めた上で、各リスクの特性に応じたリスク管理態勢の構築を図っております。

ロ. オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

当行はオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたり「基礎的手法」を使用しております。

8. 銀行法施行令第4条第4項第3号に規定する出資その他これに類するエクスポージャー又は株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針及び手続の概要

当行では、市場リスク管理に係る基本方針として、「最適な有価証券ポートフォリオの構築を通してリスク対比の収益性向上を図るため、フィデアグループの経営体力、投資スタイル、取引規模及びリスク・プロファイル等に見合った適切なリスク限度枠等を設定の上、市場取引部門（フロント）、事務管理部門（バック）、リスク管理部門（ミドル）が相互牽制機能を発揮するなど、適切なリスク管理態勢を整備する。」ことを掲げております。

市場リスクを有する出資・株式等エクスポージャーにつきましては、その他の保有有価証券と同様に、残高、リスク量（信頼区間99%、保有期間は保有区分・リスク特性等に応じて60日から250日で設定）、評価損益等の状況を日次でモニタリングし、リスク管理部門が直接経営に報告するなど、市場リスク管理にかかる基本方針に沿って適切な管理を行っております。

出資・株式等エクスポージャーは、相対的に価格変動リスクが大きいと見られるため、ポジション枠を設定して過大なリスクを許容しないよう配慮しております。

有価証券の評価は、その他有価証券のうち時価のあるものについては、決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価のないものについては移動平均法による原価法または償却原価法により行っております。

9. 金利リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

① リスクの管理及び計測の対象とする金利リスクの考え方及び範囲に関する説明

金利リスクとは、銀行勘定の預金・貸出金や国債等の債券について、金利変動により損失を被るリスクであり、市場リスクの一つであります。当行では、自己資本等の経営体力に見合った適正な水準の金利リスクを許容し、安定的な収益（利息収入）の獲得を目指しております。

② リスク管理及びリスク削減の方針に関する説明

リスク限度額やモニタリング方法など金利リスクの管理については、半期毎にリスクマネジメント会議において協議のうえ、承認を得ております。

期中においては、リスク管理部署がリスクの状況をモニタリングし、定期的にリスクマネジメント会議及び取締役会に報告し、各種リスクのコントロールについて検討を行っております。

③ 金利リスク計測の頻度

金利リスク量につきましては、債券等の有価証券は日次、貸出金や預金等を含む銀行勘定全体の金利リスク量は月次でVaR、10BPV等を計測しており、原則として半期ごとに配賦するリスク枠の使用状況、リスクの推移・状況等をリスクマネジメント会議等へ報告しております。

④ ヘッジ等金利リスク削減手法に関する説明

金利変動リスクを適切に管理するため、ヘッジ会計処理規程を制定しております。

ロ. 金利リスクの算定手法の概要

- ① 開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII並びに銀行がこれらに追加して自ら開示を行う金利リスクに関する事項
 - (i) 流動性預金に割り当てられた金利改定の平均満期
2022年3月末は4.47年、2023年3月末は4.56年としております。
 - (ii) 流動性預金に割り当てられた最長の金利改定満期
10年としております。
 - (iii) 流動性預金への満期の割当て方法及びその前提
普通預金等の満期のない流動性預金については、コア預金内部モデルを使って預金種類別や人格別の残高推移を統計的に解析し、将来残高推移を保守的に推計することで実質的な満期を計測しております。推計値については月次でバックテストを実施しており、モデルの検証は十分に行っております。
 - (iv) 固定金利貸出の期限前返済や定期預金の早期解約に関する前提
金融庁が定める保守的な前提を考慮しております。
 - (v) 複数の通貨の集計方法及びその前提
通貨間の相関は考慮しておらず、通貨別に算出した正の金利リスクのみを合算して算出しております。
 - (vi) スプレッドに関する前提
スプレッド及びその変動は考慮しておりません。
 - (vii) 内部モデルの使用等、△EVE及び△NIIに重大な影響を及ぼすその他の前提
コア預金については、前項（iii）に記載の通りです。その他の内部モデルは使用しておりません。
 - (viii) 前事業年度末の開示からの変動に関する説明
2023年3月末の△EVEが最大となる金利ショックは、下方パラレルシフトによる131億円であります。前期末比47億円の増加となっております。
 - (ix) 計測値の解釈や重要性に関するその他の説明
金利リスクをコントロールすべき事象として、金利上昇を想定しており、上方パラレルシフトによる△EVEの自己資本に対する比率は基準値である20%を下回っていることから、問題のない水準と認識しております。
- ② 銀行が自己資本の充実度の評価、ストレス・テスト、リスク管理、収益管理、経営上の判断その他の目的で、開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII以外の金利リスクを計測している場合における、当該金利リスクに関する事項
当行では市場取引のリスク量について、VaR法、BPV法のほか、業務の特性や運用方針に合った効果的・効率的な計測方法を組合せて活用しております。また、以下の考え方に沿って管理手法の高度化・精緻化に取り組んでおります。
 - (i) リスクを計量化して把握・管理することが可能なリスクについては、VaR、BPV、ギャップ分析、シミュレーション等を用いたリスク分析によって計量化し、当行の経営体力に見合うようコントロールしております。
 - (ii) バックテストやストレステストなどにより、計量化手法や管理方法の妥当性・有効性を検証するとともに経営に与える影響を分析するなど、リスク管理の実効性を確保しながら計量化手法の高度化・精緻化に努めております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖定量的な開示項目（単体）

1. 自己資本の充実度に関する事項

イ. 信用リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

項目	2022年3月31日		2023年3月31日	
	リスク・アセット	所要自己資本	リスク・アセット	所要自己資本
【資産（オン・バランス）項目】				
1. 現金	-	-	-	-
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	-	-	-	-
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	-	-	-	-
4. 国際決済銀行等向け	-	-	-	-
5. 我が国の地方公共団体向け	-	-	-	-
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	-	-	-	-
7. 国際開発銀行向け	-	-	-	-
8. 地方公共団体金融機構向け	-	-	0	0
9. 我が国の政府関係機関向け	4,443	177	4,296	171
10. 地方三公社向け	-	-	-	-
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	15,042	601	13,909	556
12. 法人等向け	135,011	5,400	139,598	5,583
13. 中小企業等向け及び個人向け	196,159	7,846	178,581	7,143
14. 抵当権付住宅ローン	37,858	1,514	36,986	1,479
15. 不動産取得等事業向け	47,055	1,882	54,346	2,173
16. 三月以上延滞等	708	28	868	34
17. 取立未済手形	11	0	18	0
18. 信用保証協会等による保証付	3,709	148	3,679	147
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	-	-	-	-
20. 出資等	10,751	430	8,934	357
(うち出資等のエクスポージャー)	10,751	430	8,934	357
(うち重要な出資のエクスポージャー)	-	-	-	-
21. 上記以外	18,303	732	23,982	959
(うち他の金融機関等の対象資本調達手段のうち対象普通株式等に該当するもの以外のもにに係るエクスポージャー)	-	-	5,406	216
(うち特定項目のうち調整項目に算入されない部分に係るエクスポージャー)	4,013	160	4,761	190
(うち上記以外のエクスポージャー等)	14,289	571	13,815	552
22. 証券化（オリジネーターの場合）	-	-	-	-
(うち再証券化)	-	-	-	-
23. 証券化（オリジネーター以外の場合）	-	-	-	-
(うち再証券化)	-	-	-	-
24. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（ルック・スルー方式）	35,353	1,414	31,358	1,254
25. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（マンドート方式）	-	-	-	-
26. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式250%）	-	-	-	-
27. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式400%）	-	-	-	-
28. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（フォールバック方式1250%）	-	-	-	-
29. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	289	11	271	10
30. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額	-	-	-	-
資産（オン・バランス）項目 計	504,697	20,187	496,832	19,873
【オフ・バランス取引等項目】				
1. 原契約期間が1年以下のコミットメント	863	34	604	24
2. 短期の貿易関連偶発債務	-	-	-	-
3. 特定の取引に係る偶発債務	1,612	64	1,737	69
4. 原契約期間が1年超のコミットメント	5,221	208	4,628	185
5. 信用供与に直接的に代替する偶発債務	2,064	82	1,892	75
6. 先物購入、先渡預金、部分払込株式または部分払込債券	-	-	-	-
7. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供または有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	884	35	853	34
8. 派生商品取引	72	2	358	14
9. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	-	-	-	-
オフ・バランス取引等 計	10,719	428	10,074	402
【CVAリスク相当額】（簡便的リスク測定方式）	109	4	348	13
【中央清算機関関連エクスポージャー】	47	1	121	4
合計	515,574	20,622	507,377	20,295

(注) 所要自己資本額＝リスク・アセット×4%

ロ. オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
所要自己資本の額	1,352	1,369

(注) 当行は基礎的手法により算出しております。

ハ. 単体総所要自己資本額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
総所要自己資本額	21,975	21,664

2. 信用リスクに関する事項（リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャー及び証券化エクスポージャーを除く。）

イ. 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及びエクスポージャーの主な種類別の内訳（地域別、業種別、残存期間別）

(単位：百万円)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高				信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高			
	うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引		うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引	
国内計	1,696,792	977,757	219,905	137	1,414,616	1,005,434	188,893	1,437
国外計	44,151	—	43,926	225	36,537	—	36,184	353
地域別合計	1,740,943	977,757	263,831	362	1,451,153	1,005,434	225,077	1,790
製造業	64,889	57,250	2,948	0	63,859	56,114	3,583	0
農業、林業	2,270	2,018	250	—	2,354	2,103	250	—
漁業	67	67	—	—	52	52	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	133	113	—	—	129	88	—	—
建設業	39,870	35,327	4,033	—	35,195	30,550	4,449	—
電気・ガス・熱供給・水道業	31,947	31,903	—	—	36,457	36,356	—	—
情報通信業	3,331	2,056	250	—	2,160	1,163	250	—
運輸業、郵便業	12,256	7,717	4,211	—	10,310	6,658	3,316	—
卸売業、小売業	41,014	38,693	1,739	—	42,895	38,252	3,973	—
金融業、保険業	203,152	156,267	27,185	362	173,614	122,362	30,578	1,789
不動産業、物品賃貸業	63,372	62,011	1,185	—	74,465	71,635	2,639	—
学術研究、専門・技術サービス業	1,811	1,711	—	—	1,859	1,765	—	—
宿泊業、飲食サービス業	8,537	8,148	387	—	8,107	7,746	360	—
生活関連サービス業、娯楽業	6,877	5,714	1,057	—	7,847	6,340	1,400	—
教育、学習支援業	3,093	3,093	—	—	2,943	2,942	—	—
医療、福祉	18,880	18,480	398	—	18,234	17,830	401	—
その他のサービス	26,313	24,667	1,265	—	24,175	22,315	1,512	—
地方公共団体	271,911	171,389	100,213	—	257,724	180,213	77,268	—
その他	941,213	351,126	118,706	—	688,765	400,943	95,093	—
業種別合計	1,740,943	977,757	263,831	362	1,451,153	1,005,434	225,077	1,790
1年以下	104,310	83,993	16,928	362	171,544	156,319	12,001	1,160
1年超3年以下	87,128	61,158	25,858	—	88,417	65,453	22,886	—
3年超5年以下	118,027	90,209	27,716	—	134,189	98,772	35,257	—
5年超7年以下	98,813	63,255	35,371	—	81,291	63,651	17,510	22
7年超10年以下	192,873	147,056	45,694	—	174,365	144,672	29,561	—
10年超	526,666	414,054	112,261	—	531,970	423,147	107,859	607
期間の定めのないもの	613,124	118,029	—	—	269,374	53,416	—	—
残存期間別合計	1,740,943	977,757	263,831	362	1,451,153	1,005,434	225,077	1,790

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

ロ. 三月以上延滞エクスポージャーの期末残高（地域別、業種別）

（単位：百万円）

	2022年3月31日	2023年3月31日
国内計	1,545	2,892
国外計	—	—
地域別合計	1,545	2,892
製造業	240	1,426
農業、林業	—	1
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—
建設業	49	21
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—
情報通信業	7	—
運輸業、郵便業	3	—
卸売業、小売業	306	251
金融業、保険業	57	54
不動産業、物品賃貸業	70	88
学術研究、専門・技術サービス業	4	—
宿泊業、飲食サービス業	163	77
生活関連サービス業、娯楽業	—	13
教育、学習支援業	—	17
医療、福祉	19	177
その他のサービス	28	25
地方公共団体	—	—
その他	595	737
業種別合計	1,545	2,892

ハ. 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金及び特定海外債権引当勘定の中間期末残高及び期中増減額

（単位：百万円）

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
一般貸倒引当金	1,308	39	1,347	1,347	219	1,566
個別貸倒引当金	5,581	131	5,712	5,712	△256	5,455
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—	—	—
合計	6,889	170	7,059	7,059	△37	7,021

二. 個別貸倒引当金の地域別、業種別内訳

（単位：百万円）

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
国内計	5,581	131	5,712	5,712	△256	5,455
国外計	—	—	—	—	—	—
地域別合計	5,581	131	5,712	5,712	△256	5,455
製造業	2,479	360	2,840	2,840	△301	2,539
農業、林業	4	22	26	26	△3	23
漁業	—	—	—	—	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—	—	—	—	—
建設業	556	△106	449	449	△28	421
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—	—	—	318	318
情報通信業	—	4	4	4	△4	—
運輸業、郵便業	1	4	5	5	1	7
卸売業、小売業	804	273	1,078	1,078	△478	600
金融業、保険業	36	△3	33	33	2	35
不動産業、物品賃貸業	226	58	285	285	61	346
学術研究、専門・技術サービス業	—	—	—	—	—	—
宿泊業、飲食サービス業	412	△348	63	63	△30	33
生活関連サービス業、娯楽業	631	△228	402	402	△103	298
教育、学習支援業	—	—	—	—	—	—
医療、福祉	29	134	163	163	4	167
その他のサービス	290	△25	264	264	319	584
地方公共団体	—	—	—	—	—	—
その他	108	△14	94	94	△15	79
業種別合計	5,581	131	5,712	5,712	△256	5,455

ホ、業種別の貸出金償却の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
製造業	—	—
農業、林業	—	—
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—
建設業	—	—
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—
情報通信業	—	—
運輸業、郵便業	—	—
卸売業、小売業	—	—
金融業、保険業	—	—
不動産業、物品賃貸業	—	—
学術研究、専門・技術サービス業	—	—
宿泊業、飲食サービス業	100	—
生活関連サービス業、娯楽業	2	—
教育、学習支援業	—	—
医療、福祉	—	—
その他のサービス	—	—
地方公共団体	—	—
その他	—	0
業種別合計	102	0

- ハ、標準的手法が適用されるエクスポージャーについて、リスク・ウェイトの区分ごとの信用リスク削減手法の効果を勘案した後の残高並びに自己資本比率告示第79条の5第2項第2号、第177条の2第2項第2号及び第248条（自己資本比率告示第125条、第127条において準用する場合に限る。）並びに第248条の4第1項第1号及び第2号（自己資本比率告示第125条、第127条において準用する場合に限る。）の規定により1,250パーセントのリスク・ウェイトが適用されるエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	格付あり	格付なし	格付あり	格付なし
0%	423,879	536,198	131,832	522,529
10%	—	81,671	—	79,256
20%	52,864	30,175	62,383	24,774
30%	—	—	—	—
35%	—	108,165	—	105,675
40%	—	—	—	—
50%	34,728	92	37,512	108
60%	—	—	—	—
70%	400	—	—	—
75%	—	259,807	—	236,767
100%	3,823	195,132	2,626	201,904
120%	—	—	—	—
150%	—	294	3,604	432
250%	—	1,605	—	—
350%	—	—	—	1,904
1,250%	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	515,696	1,213,144	237,959	1,173,353

3. 信用リスク削減手法に関する事項

標準的手法が適用されるポートフォリオについて、適格金融資産担保及び保証による信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
適格金融資産担保合計	51,799	44,571
適格保証・クレジットデリバティブ合計	83,975	78,527

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

4. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項

イ. 与信相当額の算出に用いる方法

派生商品取引の与信相当額は、カレント・エクスポージャー方式により算出しております。

ロ. 派生商品取引のグロス再構築コスト

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
外国為替関連取引	21	200
金利関連取引	－	250
株式関連取引	－	－
合計	21	451

ハ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額（派生商品取引にあつては、取引の区分ごとの与信相当額を含む。）

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
派生商品取引	362	1,790
外国為替関連取引	362	534
金利関連取引	－	1,255
株式関連取引	－	－
合計	362	1,790

ニ. ロ. に掲げる合計額及びグロスのアドオンの合計額からハ. に掲げる額を差し引いた額

ロ. における開示内容と同様であります。

ホ. 担保の種類別の額

該当事項はありません。

ヘ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額

ハ. における開示内容と同様であります。

ト. 与信相当額算出の対象となるクレジットデリバティブの想定元本をクレジットデリバティブの種類別、かつ、プロテクションの購入又は提供の別に区分した額

該当事項はありません。

チ. 信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジットデリバティブの想定元本額

該当事項はありません。

5. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. オリジネーターである場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

該当事項はありません。

ロ. 投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

該当事項はありません。

ハ. 銀行がオリジネーターである場合におけるマーケット・リスク相当額の算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

該当事項はありません。

6. 出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項

イ. 貸借対照表計上額及び時価

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	貸借対照表計上額	時価	貸借対照表計上額	時価
上場している出資等又は株式等エクスポージャー	25,065		22,430	
上記に該当しない出資等又は株式等エクスポージャー	914		996	
合計	25,980	25,980	23,426	23,426

ロ. 出資等又は株式等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
売却及び償却に伴う損益	2,032	994
売却益	3,470	1,910
売却損	1,437	868
償却	0	47

ハ. 貸借対照表で認識され、かつ、損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
その他有価証券	7,123	4,566

二. 貸借対照表及び損益計算書で認識されない評価損益の額

該当事項はありません。

7. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャーに関する事項

リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャー

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
ルック・スルー方式	74,126	109,315
マンドート方式	—	—
蓋然性方式 (250%)	—	—
蓋然性方式 (400%)	—	—
フォールバック方式	—	—
合計	74,126	109,315

- (注) 1. 「ルック・スルー方式」とは、ファンド内の個々の組入資産のリスクアセットを合算する方式です。
 2. 「マンドート方式」とは、ファンドの運用基準に基づき、ファンド内の組入資産構成を保守的に仮定し、個々の資産のリスクアセットを合算する方式です。
 3. 「蓋然性方式 (250%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが250%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト250%を適用する方式です。
 4. 「蓋然性方式 (400%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが400%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト400%を適用する方式です。
 5. 「フォールバック方式」とは、上記のいずれの方式も適用できない場合に、1,250%のリスクウェイトを適用する方式です。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

8. 金利リスクに関する事項

(単位：百万円)

IRRBB：金利リスク		イ		ロ		ハ		ニ	
項番		△EVE		△NII					
		当期末	前期末	当期末	前期末				
1	上方平行シフト	7,215	4,716	6,738	8,976				
2	下方平行シフト	13,157	8,452	2,853	2,375				
3	スティープ化	2,451	1,463						
4	フラット化								
5	短期金利上昇								
6	短期金利低下								
7	最大値	13,157	8,452	6,738	8,919				
		ホ		ヘ					
8	自己資本の額	当期末		前期末					
		57,259		56,109					

❖報酬等に関する開示事項（2023年3月期）

※当行は、連結子法人等を有しておらず、以下の項目については、当行単体について記載しております。

1. 当行の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

イ. 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」及び「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

① 「対象役員」の範囲

対象役員は、当行の取締役であります。なお、社外取締役を除いております。

② 「対象従業員等」の範囲

当行では、対象役員以外の当行の役員及び従業員のうち、「高額な報酬等を受ける者」で当行の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当行の対象役員以外の役員及び従業員で、対象従業員等に該当する者はおりません。

(i) 「高額な報酬等を受ける者」の範囲

「高額な報酬等を受ける者」とは、「対象役員の報酬の総額」を「対象役員の員数」により除すことで算出される「対象役員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

(ii) 「業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」の範囲

「業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当行の業務の運営に相当程度の影響を与え、又は取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

ロ. 対象役員の報酬等の決定について

当行では、株主総会において役員報酬の総額（上限額）を決定しております。株主総会で決議された取締役（監査等委員である取締役を除く）の報酬の個人別の配分については、取締役会に一任されております。また、監査等委員である取締役の報酬の個人別の配分については、監査等委員である取締役の協議に一任されております。

ハ. 報酬委員会等の構成員に対して払われた報酬等の総額及び報酬委員会等の会議の開催回数

	開催回数 (2022年4月～2023年3月)
取締役会（株式会社荘内銀行）	5回

(注) 報酬等の総額については、報酬委員会等の職務執行に係る対価に相当する部分のみを切り離して算出することができないため、報酬等の総額は記載しておりません。

2. 当行の対象役職員の報酬等の体系の設計及び運用の適切性の評価に関する事項

報酬等に関する方針について

対象役員の報酬等に関する方針

当行は、取締役の報酬等に関する事項を定めた役員報酬規程で、報酬等の額及びその算定方法の決定に関する方針を定めております。

具体的な役員報酬制度といたしましては、役員の報酬等の構成を、役割や責任に応じて固定額を月額で支給する基本報酬と中長期的な企業価値向上に対するインセンティブを高めることを目的として支給する譲渡制限付株式報酬と当行の業績に応じて支給する賞与としております。

役員の報酬等の額は、取締役（監査等委員である取締役を除く）は株主総会が決定する報酬等総額の限度内において取締役会が決定しております。また、監査等委員である取締役は株主総会が決定する報酬等総額の限度内において、監査等委員である取締役の協議により決定しております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

3. 当行の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性並びに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役員の報酬等の決定にあたっては、株主総会で役員全体の報酬総額が決議され、決定される仕組みになっております。

4. 当行の対象役職員の報酬等の種類、支払総額及び支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

区分	人数	報酬等の 総額 (百万円)	固定報酬の総額			変動報酬の総額		その他	
			基本報酬	自社株取得 目的報酬		基本報酬	賞与		
対象役員（除く社外役員）	9	155	136	133	3	7	-	7	10
対象従業員等	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(注) その他には、従前支給していた自社株取得目的報酬に代えて2022年5月13日に導入を決定した譲渡制限付株式報酬が該当します。

5. 当行の対象役職員の報酬等の体系に関し、その参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。

事業の概況（北都銀行）

業績の概況（2022年度）

（金融経済環境）

当事業年度における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症の影響など一部に弱さがみられる中、緩やかな持ち直しの動きが続きました。輸出などに弱い動きがみられるものの、住宅建設、公共投資が底堅い動きとなったほか、個人消費や設備投資は持ち直しの動きが続きました。

また、当行の主たる営業エリアである秋田県内経済においては、住宅投資が弱含み、生産活動は増加ペースの鈍化しているものの、個人消費の持ち直し、公共投資が緩やかに持ち直すなど、弱いながらも持ち直しの動きが続きました。

（事業の経過及び成果）

このような環境のもと、当行は地域のお客さまにご満足いただける金融商品、サービスの充実に努め、以下のとおりの業績となりました。

・預金等（譲渡性預金含む）

譲渡性預金を含む預金等の期末残高は個人預金や法人預金を中心に前期末比19億円（0.1%）増加し1兆3,783億円となりました。

・貸出金

貸出金の期末残高は、秋田県内の事業性貸出を中心に前期末比872億円（10.0%）増加し9,599億円となりました。

・有価証券

収益性回復及び評価損益改善のためのポートフォリオ再構築を進めた結果、有価証券の期末残高は前期末比88億円（2.6%）減少し、期末残高は3,281億円となりました。

・投資信託、公共債及び生命保険窓販

投資信託、公共債、保険の窓口販売業務につきましては、お客さまのライフプラン、資産運用ニーズに応えるコンサルティング営業やアフターフォローに努めました。

投資信託の期末預かり残高は前期末比8億円（1.7%）増加し493億円、公共債預かり残高は前期末比5億円（36.2%）増加し21億円となりました。また、生命保険（個人年金保険、終身保険及び養老保険）の期末預かり残高は前期末比55億円（3.8%）減少し1,376億円となりました。

・サービスネットワーク

店舗外キャッシュコーナーも含め、それぞれの地域のマーケット環境にあわせた店舗ネットワークの見直しや既存店舗のリニューアルを進めるとともに、サービスのWeb完結化等非対面チャネルの充実化を図り、お客さまの利便性向上及び営業体制の効率化に努めております。

なお、ブランチ・イン・ブランチ方式による統合店舗を除く期末拠点数は47か店となりました。

※店舗の異動

（2022年度中にブランチ・イン・ブランチ方式により統合した店舗）

新国道支店

・損益状況

資金利益や役員取引等利益が増加したほか、第4次中期経営計画の柱の一つである経費削減が計画前倒しで進展したことなどから、経常利益は前期比37百万円増加し26億15百万円、当期純利益は前期比1億50百万円増加し15億63百万円となりました。

事業の概況（北都銀行）

主要な経営指標等の推移（単体）

（単位：百万円）

回次 決算年月	第211期 2019年3月	第212期 2020年3月	第213期 2021年3月	第214期 2022年3月	第215期 2023年3月
経常収益	22,679	23,057	21,650	22,160	22,436
経常利益	2,379	1,230	2,539	2,577	2,615
当期純利益	1,512	407	1,158	1,413	1,563
資本金	12,500	12,500	12,500	12,500	12,500
発行済株式総数	307,339千株	307,339千株	307,339千株	294,839千株	282,339千株
純資産額	59,958	55,847	58,791	50,416	37,879
総資産額	1,356,840	1,347,364	1,556,182	1,588,204	1,536,343
預金残高	1,221,350	1,231,065	1,336,786	1,364,255	1,362,004
貸出金残高	832,774	852,163	874,866	872,628	959,900
有価証券残高	365,437	338,251	331,887	336,979	328,120
単体自己資本比率（国内基準）	10.92%	10.40%	10.59%	9.80%	8.78%
配当性向	38.92%	175.37%	52.19%	50.14%	44.16%
従業員数	790人	716人	652人	598人	548人

(注) 1. 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

2. 執行役員を従業員数に含めております。

財務諸表

財務諸表

◆貸借対照表

(単位：百万円)

	前事業年度末 (2022年3月31日)	当事業年度末 (2023年3月31日)
■資産の部		
現金預け金	298,597	167,309
現金	15,045	17,323
預け金	283,552	149,985
買入金銭債権	941	967
商品有価証券	163	191
商品地方債	163	191
金銭の信託	26,062	30,121
有価証券	336,979	328,120
国債	46,220	46,530
地方債	125,539	111,715
社債	67,352	65,493
株式	6,343	6,026
その他の証券	91,523	98,355
貸出金	872,628	959,900
割引手形	1,488	1,348
手形貸付	9,807	9,766
証書貸付	791,914	871,789
当座貸越	69,418	76,997
外国為替	962	731
外国他店預け	962	731
買入外国為替	0	-
その他資産	29,019	26,109
前払費用	3	6
未収収益	855	897
金融派生商品	208	361
金融商品等差入担保金	22,005	20,000
その他の資産	5,946	4,843
有形固定資産	11,471	10,602
建物	4,325	3,980
土地	5,955	5,608
リース資産	21	14
建設仮勘定	-	1
その他の有形固定資産	1,169	996
無形固定資産	1,274	1,082
ソフトウェア	1,212	1,020
その他の無形固定資産	62	61
前払年金費用	464	521
繰延税金資産	2,288	2,694
支払承諾見返	12,277	13,237
貸倒引当金	△4,927	△5,246
資産の部合計	1,588,204	1,536,343

(単位：百万円)

	前事業年度末 (2022年3月31日)	当事業年度末 (2023年3月31日)
■負債の部		
預金	1,364,255	1,362,004
当座預金	51,228	40,088
普通預金	820,474	855,113
貯蓄預金	13,268	13,352
通知預金	1,210	1,519
定期預金	465,772	440,332
定期積金	7,839	7,925
その他の預金	4,460	3,672
譲渡性預金	12,219	16,375
債券貸借取引受入担保金	3,509	26,675
借入金	130,600	67,500
借入金	130,600	67,500
外国為替	40	20
売渡外国為替	40	17
未払外国為替	-	3
その他負債	13,520	11,362
未決済為替借	0	4
未払法人税等	191	155
未払費用	597	683
前受収益	419	450
給付補填備金	0	0
金融派生商品	1,835	516
金融商品等受入担保金	370	483
リース債務	23	15
その他の負債	10,080	9,053
役員賞与引当金	14	19
退職給付引当金	274	290
睡眠預金払戻損失引当金	93	44
偶発損失引当金	187	159
再評価に係る繰延税金負債	797	774
支払承諾	12,277	13,237
負債の部合計	1,537,788	1,498,464
■純資産の部		
資本金	12,500	12,500
資本剰余金	14,352	12,500
資本準備金	12,500	12,500
その他資本剰余金	1,852	-
利益剰余金	20,095	17,392
その他利益剰余金	20,095	17,392
繰越利益剰余金	20,095	17,392
株主資本合計	46,948	42,392
その他有価証券評価差額金	2,020	△5,748
繰延ヘッジ損益	△203	△380
土地再評価差額金	1,650	1,615
評価・換算差額等合計	3,468	△4,512
純資産の部合計	50,416	37,879
負債及び純資産の部合計	1,588,204	1,536,343

財務諸表

◆損益計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
経常収益	22,160	22,436
資金運用収益	15,048	15,773
貸出金利息	9,113	8,919
有価証券利息配当金	5,655	6,731
コールローン利息	△0	△7
預け金利息	280	127
その他の受入利息	0	1
役員取引等収益	4,111	4,264
受入為替手数料	800	714
その他の役員収益	3,310	3,549
その他業務収益	1,264	1,127
国債等債券売却益	1,178	1,104
金融派生商品収益	83	—
その他の業務収益	2	23
その他経常収益	1,735	1,271
償却債権取立益	106	79
株式等売却益	1,394	912
金銭の信託運用益	73	140
その他の経常収益	161	139
経常費用	19,583	19,821
資金調達費用	43	85
預金利息	44	30
譲渡性預金利息	1	1
コールマネー利息	△23	△15
債券貸借取引支払利息	14	10
借入金利息	0	0
金利スワップ支払利息	3	58
その他の支払利息	2	0
役員取引等費用	1,536	1,468
支払為替手数料	102	64
その他の役員費用	1,434	1,403
その他業務費用	3,890	4,882
外国為替売買損	61	764
商品有価証券売買損	1	1
国債等債券売却損	3,827	3,923
金融派生商品費用	—	191
営業経費	12,017	11,520
その他経常費用	2,095	1,864
貸倒引当金繰入額	923	708
株式等売却損	935	847
株式等償却	3	3
金銭の信託運用損	9	17
その他の経常費用	224	287
経常利益	2,577	2,615

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
特別利益	1	35
固定資産処分益	1	35
特別損失	760	261
固定資産処分損	171	105
減損損失	588	156
税引前当期純利益	1,818	2,389
法人税、住民税及び事業税	378	292
法人税等調整額	26	533
法人税等合計	405	825
当期純利益	1,413	1,563

◆株主資本等変動計算書

前事業年度 (2021年4月1日から2022年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計			
当期首残高	12,500	12,500	7,499	19,999	19,019	19,019	—	51,519	
会計方針の変更による 累積的影響額					96	96		96	
会計方針の変更を反映した 当期首残高	12,500	12,500	7,499	19,999	19,115	19,115	—	51,615	
当期変動額									
剰余金の配当					△698	△698		△698	
当期純利益					1,413	1,413		1,413	
自己株式の取得							△5,647	△5,647	
自己株式の消却			△5,647	△5,647			5,647	—	
土地再評価差額金の取崩					264	264		264	
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)									
当期変動額合計	—	—	△5,647	△5,647	979	979	—	△4,667	
当期末残高	12,500	12,500	1,852	14,352	20,095	20,095	—	46,948	

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	5,745	△387	1,915	7,272	58,791
会計方針の変更による 累積的影響額					96
会計方針の変更を反映した 当期首残高	5,745	△387	1,915	7,272	58,887
当期変動額					
剰余金の配当					△698
当期純利益					1,413
自己株式の取得					△5,647
自己株式の消却					—
土地再評価差額金の取崩					264
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	△3,724	184	△264	△3,804	△3,804
当期変動額合計	△3,724	184	△264	△3,804	△8,471
当期末残高	2,020	△203	1,650	3,468	50,416

財務諸表

当事業年度 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計		
当期首残高	12,500	12,500	1,852	14,352	20,095	20,095	—	46,948
当期変動額								
剰余金の配当					△736	△736		△736
当期純利益					1,563	1,563		1,563
自己株式の取得							△5,418	△5,418
自己株式の消却			△1,852	△1,852	△3,565	△3,565	5,418	—
土地再評価差額金の取崩					34	34		34
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)								
当期変動額合計	—	—	△1,852	△1,852	△2,703	△2,703	—	△4,556
当期末残高	12,500	12,500	—	12,500	17,392	17,392	—	42,392

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	2,020	△203	1,650	3,468	50,416
当期変動額					
剰余金の配当					△736
当期純利益					1,563
自己株式の取得					△5,418
自己株式の消却					—
土地再評価差額金の取崩					34
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	△7,769	△176	△34	△7,980	△7,980
当期変動額合計	△7,769	△176	△34	△7,980	△12,536
当期末残高	△5,748	△380	1,615	△4,512	37,879

◆キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)	当事業年度 (2022年4月 1日から 2023年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益	1,818	2,389
減価償却費	799	846
減損損失	588	156
貸倒引当金の増減 (△)	86	319
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	4	4
前払年金費用の増減額 (△は増加)	△35	△57
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	37	16
睡眠預金払戻損失引当金の増減 (△)	△85	△49
偶発損失引当金の増減 (△)	46	△28
資金運用収益	△15,048	△15,773
資金調達費用	43	85
有価証券関係損益 (△)	2,192	2,758
金銭の信託の運用損益 (△は運用益)	△63	△123
為替差損益 (△は益)	△3	△1
固定資産処分損益 (△は益)	169	69
貸出金の純増 (△) 減	2,238	△87,272
預金の純増減 (△)	27,468	△2,250
譲渡性預金の純増減 (△)	912	4,155
商品有価証券の純増 (△) 減	△27	△27
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)	15,900	△63,100
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減	51	△14
コールローン等の純増 (△) 減	31	△25
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	△3,831	23,166
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	△408	231
外国為替 (負債) の純増減 (△)	31	△19
資金運用による収入	15,105	15,733
資金調達による支出	△66	△77
その他	7,554	△2,237
小計	55,509	△121,126
法人税等の支払額	△655	△737
営業活動によるキャッシュ・フロー	54,854	△121,864
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△250,121	△218,033
有価証券の売却による収入	193,720	116,958
有価証券の償還による収入	44,804	101,782
金銭の信託の増加による支出	-	△4,000
金銭の信託の減少による収入	105	-
有形固定資産の取得による支出	△667	△194
有形固定資産の売却による収入	43	386
無形固定資産の取得による支出	△400	△178
無形固定資産の売却による収入	0	-
投資活動によるキャッシュ・フロー	△12,514	△3,279
財務活動によるキャッシュ・フロー		
リース債務の返済による支出	△7	△7
配当金の支払額	△698	△736
自己株式の取得による支出	△5,647	△5,418
財務活動によるキャッシュ・フロー	△6,352	△6,162
現金及び現金同等物に係る換算差額	3	1
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	35,991	△131,303
現金及び現金同等物の期首残高	262,384	298,375
現金及び現金同等物の期末残高	298,375	167,071

(当事業年度)

注記事項

(重要な会計方針)

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

2. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社・子法人等株式及び関連法人等株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

有形固定資産は、定額法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物 10年～50年
その他 4年～20年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

5. 繰延資産の処理方法

社債発行費及び株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、主として決算日の為替相場による円換算額を付しております。

外貨建その他有価証券のうち債券に係る換算差額については、外国通貨による時価の変動を評価差額として処理し、それ以外を「外国為替売買益」又は「外国為替売買損」として処理しております。

7. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

① 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、原則、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は13,121百万円であります。

② 現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額（以下、「非保全額」という。）のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。具体的には、

(イ) 非保全額に対して今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

(ロ) 上記の債務者に係る債権のうち、非保全額が一定額以上の債務者に係る債権については、上記(イ)で算定した予想損失額に基づく貸倒引当金の十分性を個別に検証し、必要に応じて、債務者の財政状態に基づき合理的に見積もられた回収可能額を非保全額から控除した残額を計上しております。

③ 貸出条件緩和債権等を有する債務者に係る債権については、今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

④ 上記以外の債権については、今後1年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署の協力の下に資産査定部署が資産査定を実施した上で、資産査定部署より独立した資産監査部署で査定結果を監査しております。

(2) 役員賞与引当金

役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準により按分しております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日次事業年度から損益処理

(4) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認められる額を計上しております。

(5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度に係る信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来発生する可能性のある負担金支払見込額を計上しております。

8. 収益の計上方法

当行の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務は、預金・貸出業務、為替業務、証券関連業務、代理業務、保護預り・貸金庫業務等の各種サービスの提供であります。

ATM利用手数料や口座振替手数料（預金・貸出業務）、国内外の送金手数料（為替業務）、公社債引受手数料（証券関連業務）、投資信託や保険の販売手数料（代理業務）等については取引が発生又は関連サービスが提供された時点において履行義務を充足するものとして収益を認識しております。また、貸金庫手数料（保護預り・貸金庫業務）等、関連サービスが提供される期間にわたって履行義務を充足するものについては、当該期間にわたって収益を認識しております。

9. ヘッジ会計の方法

(1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日。以下、「業種別委員会実務指針第24号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の（残存）期間毎にブルーピングのうえ特定し評価しております。その他有価証券に区分している固定金利の債券の相場変動を相殺するヘッジにおいては、同一種類毎にヘッジ対象を識別し、金利スワップ取引をヘッジ手段として指定しております。ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件がほぼ同一となるようなヘッジ指定を行っているため、高い有効性があるとみなしており、これをもって有効性の判定に代えております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

(2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金銭債権債務等が生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 令和2年10月8日。以下、「業種別委員会実務指針第25号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

また、外貨建その他有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして時価ヘッジを適用しております。

(3) 株価変動リスク・ヘッジ

保有する株式から生じる株価変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、株式先渡取引等をヘッジ手段とする繰延ヘッジによっております。

なお、ヘッジ有効性評価の方法については、原則としてヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とを定期的に比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。ただし、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件が同一であり、ヘッジに高い有効性があることが明らかなものについては、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

10. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、貸借対照表上の「現金」及び「預け金」のうち日本銀行への預け金であります。

11. 消費税等の会計処理

有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

12. 関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

(1) 投資信託の解約・償還に伴う損益について、期中収益分配金等を含めた投資信託全体で益の場合は「有価証券利息配当金」に計上し、損の場合は「国債等債券償還損」に計上しております。

(2) 取締役（社外取締役及び監査等委員を除く）及び執行役員に対する譲渡制限付株式報酬に係る費用は、付与日における当行親会社であるフィデアホールディングス株式会社株式の時価で測定しております。また、費用処理については、対象勤務期間にわたって人件費（「営業経費」）に計上しております。

(会計方針の変更)

(時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日。以下、「時価算定会計基準適用指針」という。）を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。これによる当事業年度の財務諸表への影響はありません。

また、当該注記において、前事業年度は、「外国証券」を有価証券の「その他」に含めて表示しておりましたが、金融商品をより詳細に区分して表示するため、当事業年度から「外国証券」として区分して表示することとしております。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当事業年度に係る財務諸表にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

1. 貸倒引当金

(1) 当事業年度に係る財務諸表に計上した額
貸倒引当金 5,246百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

貸倒引当金の算出方法は、「重要な会計方針」 「7. 引当金の計上基準」 「(1)貸倒引当金」に記載しております。

② 主要な仮定

貸倒引当金の算定にあたり、債務者区分の判断が特に重要となります。

債務者区分の判断に用いた主要な仮定は、「貸出先の将来の業績見通

し」であります。「貸出先の将来の業績見通し」は、個々の債務者の経営成績、財政状態、貸出条件、返済履行状況、経営改善計画の策定や進捗状況といった定量的要素及び定性的要素に関する情報を収集し、それらを踏まえて総合的に判断した上で、各債務者の収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。

なお、新型コロナウイルスの感染の影響に伴い、主に貸出金等の信用リスクに一定の影響を及ぼす可能性があります。新型コロナウイルス感染症の経済への影響は一部の企業等において今後数年程度続くものと想定しておりますが、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけの変更や政府や地方公共団体の経済対策及び金融機関の支援等により経済活動は改善していくという仮定のもと貸倒引当金を算定しております。

③ 翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響

主要な仮定である「貸出先の将来の業績見通し」は、不確実性が高く、貸出先の状況や新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、債務者区分の判断に重要な影響を与えるリスクがあります。債務者区分が変動した場合には、翌事業年度に係る財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

なお、新型コロナウイルス感染症に係る見積りは当事業年度末時点において得られる情報により想定される事象を網羅し算定しておりますが、現在の経済環境下においては見積りに用いた仮定の不確実性は高く、感染の状況、期間及びその他経済への影響度合いなどが変化した場合には、翌事業年度に係る財務諸表における貸倒引当金が増減する可能性があります。

2. 繰延税金資産

(1) 当事業年度に係る財務諸表に計上した額

繰延税金資産（純額） 2,694百万円
（繰延税金負債と相殺前の金額は3,110百万円）

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

① 算出方法

繰延税金資産とは、貸借対照表に計上される資産及び負債の金額と課税所得計算上の資産及び負債の金額との差額である一時差異及び税務上の繰延欠損金のうち、当該一時差異等が解消する時にその期の課税所得を減額させ、税金負担額を軽減することが認められる範囲内で計上する資産であります。そのため、繰延税金資産は将来の税金負担額を軽減する効果を有するかどうかについて回収可能性の判断を行い、その上で回収が見込まれる金額を計上しております。また、将来の回収の見込みについては毎月見直しを行っております。

具体的には、将来の合理的な見積可能期間（5年）の一時差異等加減算前課税所得の見積額に基づいて、当該見積可能期間の一時差異等のスケジューリングの結果、繰延税金資産を見積っております。スケジューリングに関しては特に個別貸倒引当金に関する将来減算一時差異等が重要であり、一定金額以上の個別貸倒引当金に関しては税務上の損金の算入要件の充足内容及び時期を詳細に分析したうえでスケジューリングしております。

② 主要な仮定

繰延税金資産の回収可能性の判断にあたり、将来の課税所得の見積りが特に重要となります。

将来の課税所得の見積りは、当行の利益計画に基づいており、当該計画は過去実績及び市場実勢利回り並びに新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等を考慮して策定されております。当該計画策定に用いた主要な仮定は、「お客さま支援の徹底と経営基盤強化」という基本方針のもと設定している「顧客支援力の強化による収益拡大の見通し」、「経費構造改革による人件費などの経費削減の見通し」であります。なお、利益計画達成の不確実性を考慮し、当該計画に対して一定のストレスを付加して繰延税金資産の回収可能性を判断しております。

③ 翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響

繰延税金資産の回収可能性の判断は、毎決算期末時点において実施しておりますが、主要な仮定である「顧客支援力の強化による収益拡大の見通し」、「経費構造改革による人件費などの経費削減の見通し」は、不確実性が高く、新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、利益計画に基づく将来の課税所得の見積りが変動することにより、繰延税金資産の回収可能性の判断に重要な影響を与えるリスクがあります。将来において将来減算一時差異等を解消させるほどの十分な課税所得が見積もれないことにより、前事業年度に計上した繰延税金資産の一部、又は全額の回収ができないと判断した場合には、当行の繰延税金資産を取り崩し、同額を法人税等調整額として計上することとなります。

財務諸表

3. 固定資産の減損

- (1) 当事業年度に係る財務諸表に計上した額
減損損失 156百万円
- (2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報
- ① 算出方法
固定資産の減損の算出方法は、「注記事項」 「(損益計算書関係)」に記載しております。
- ② 主要な仮定
減損損失を認識するかどうかの判定に際して見積られる将来キャッシュ・フロー及び使用価値の算定において見積られる将来キャッシュ・フローは、企業に固有の事情を反映した合理的で説明可能な仮定及び予測に基づいて見積る必要がありますが、当該将来キャッシュ・フローは、上記「2. 繰延税金資産」で記載した繰延税金資産の回収可能性を判断するための一定のストレスを付加した利益計画に基づいて算出しております。
- ③ 翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響
上記「2. 繰延税金資産」で記載した利益計画の策定に用いた主要な仮定は、不確実性が高く、新型コロナウイルス感染症の影響を含めた将来の経済環境等が変化した場合、利益計画に基づく将来のキャッシュ・フローの見積りが変動することにより、減損損失の認識の判定及び使用価値の算定に重要な影響を与えるリスクがあります。将来キャッシュ・フローの見積額が減少することとなった場合には、追加的な減損処理が必要となる可能性があります。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社の出資金総額 252百万円
2. 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、貸借対照表の「有価証券」中の社債(その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)によるものに限る。)、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)であります。
- | | |
|--------------------|-----------|
| 破産更生債権及びこれらに準ずる債権額 | 2,197百万円 |
| 危険債権額 | 10,489百万円 |
| 三月以上延滞債権額 | 一百万円 |
| 貸出条件緩和債権額 | 341百万円 |
| 合計額 | 13,028百万円 |
- 破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。
- 危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。
- 三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。
- 貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。
- なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。
3. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、1,348百万円であります。
4. 担保に供している資産は次のとおりであります。
- | | |
|-------------|-----------|
| 担保に供している資産 | |
| 有価証券 | 94,194百万円 |
| 担保資産に対応する債務 | |
| 債券貸借取引受入担保金 | 26,675百万円 |
| 借入金 | 67,500百万円 |

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券47,955百万円、金融商品等差入担保金20,000百万円及び現金預け金8百万円を差入れております。

また、その他の資産には、保証金126百万円が含まれております。

5. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、130,227百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの(又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)が121,246百万円あります。
- なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

6. 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1999年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める「地価税法第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額」に合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の当事業年度末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額 2,745百万円

7. 有形固定資産の減価償却累計額 17,491百万円
8. 有形固定資産の圧縮記帳額 789百万円
9. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当行の保証債務の額は15,801百万円であります。
10. 取締役との間の取引による取締役に対する金銭債権総額 65百万円
11. 関係会社に対する金銭債権総額 501百万円
12. 関係会社に対する金銭債務総額 8百万円

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引による収益
- | | |
|----------------------|--------|
| 資金運用取引に係る収益総額 | 3百万円 |
| 関係会社との取引による費用 | |
| 資金調達取引に係る費用総額 | 0百万円 |
| その他業務・その他経常取引に係る費用総額 | 683百万円 |
2. 減損損失は次のとおりであります。

区分	地域	主な用途	種類	減損損失
稼働資産	秋田県	営業店舗4カ所	土地及び建物	156百万円
合計				156百万円

営業活動から生ずる損益の減少によるキャッシュ・フローの低下や遊休状態、売却方針の決定等となった上記資産について、帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額156百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

営業店舗については、管理会計上の最小区分である営業店単位（ただし、連携して営業を行っている営業店グループは当該グループ単位、同一建物内で複数店舗が営業している営業店グループは当該グループ単位）でグループ単位としております。また、遊休資産や売却予定資産は、各資産を最小の単位としております。本部、事務センター等については、複数の資産又は資産グループの将来キャッシュ・フローの生成に寄与する資産であるため共用資産としております。

当該資産グループの回収可能額は、正味売却価額により測定しており、不動産鑑定評価額や路線価等の市場価格を適切に反映している価額から処分費用見込額を控除して算定しております。

(株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位：千株)

	当事業年度 期首株式数	当事業年度 増加株式数	当事業年度 減少株式数	当事業年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	282,339	—	—	282,339	
C種優先株式	12,500	—	12,500	—	(注1)
合計	294,839	—	12,500	282,339	
自己株式					
C種優先株式	—	12,500	12,500	—	(注2)
合計	—	12,500	12,500	—	

- (注) 1. C種優先株式の発行済株式の減少12,500千株は、自己株式の消却によるものであります。
2. C種優先株式の自己株式の増加12,500千株は2023年2月24日開催の取締役会決議に基づく取得によるものであります。また、減少12,500千株は消却によるものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項 該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 当事業年度中の配当金支払額

(決議)	株式の 種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2022年 5月12日 取締役会	普通株式	339百万円	1.20円	2022年 3月31日	2022年 5月13日
	C種優先 株式	28百万円	2.31円	2022年 3月31日	2022年 5月13日
2022年 11月9日 取締役会	普通株式	338百万円	1.19円	2022年 9月30日	2022年 11月10日
	C種優先 株式	29百万円	2.32円	2022年 9月30日	2022年 11月10日
合計		736百万円			

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当事業年度の末日後となるもの

(決議)	株式の 種類	配当金の総額	配当の 原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2023年 5月11日 取締役会	普通株式	338百万円	利益剰余金	1.19円	2023年 3月31日	2023年 5月12日

(キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	167,309百万円
預け金（日銀預け金を除く）	△237百万円
現金及び現金同等物	167,071百万円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行は、主として国内の法人や個人のお客さまへの貸出及び債券や株式、投資信託等の有価証券による運用等の銀行業務を中心とした金融情報サービスを行っております。これらの事業を健全に行っていくため、経営体力の範囲内でリスクを許容し、収益力の向上を目指しております。

当行では、主として金利変動等を伴う金融資産及び金融負債を保有していることから、金利変動等による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合管理（ALM）を行うほか、必要に応じてデリバティブ取引を実

施しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行が保有する金融資産には、主として国内の法人及び個人のお客さまに対する貸出金があり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託及び組合出資金であり、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

主な金融負債である預金及び譲渡性預金は、主として国内の法人及び個人のお客さまの預け入れによるものです。集中的な預金の解約等による流動性リスクに留意する必要がありますが、預金等の大部分は個人のお客さまによるもので小口分散されているほか、大口預金の比率を一定以下にコントロールする等により当該リスクを抑制しております。

デリバティブ取引には、ALMの一環で行っている金利スワップ取引、及びその他有価証券で保有する債券に対する先物取引、オプション取引等があります。デリバティブ取引は、投機的な取引を目的とするものではなく、主としてヘッジ目的で実施しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当行では、「リスク管理基本方針」及び各種リスク管理規程を定め、以下のリスク管理を実施する体制を整備しております。

① 信用リスクの管理

当行は、「クレジットポリシー」及び「信用リスク管理規程」等に従い、貸出金について、個別案件毎の与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、自己査定等の事後管理、保証や担保の設定、問題債権への対応、与信集中リスク管理等と信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店のほか融資担当部門により行われ、また、定期的に経営会議等を開催し、審議・報告を行っております。さらに、与信管理の状況については監査担当部門がチェックしております。

② 市場リスクの管理

市場取引については、フロントオフィス、ミドルオフィス及びバックオフィスをそれぞれ独立した部署とし、相互に牽制する体制としております。

(イ) 金利リスクの管理

当行は、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。「市場リスク管理規程」等の規程に従い、金利リスク量を計測するとともに、定期的にギャップ分析や感応度分析等によりモニタリングを実施し、定期的に経営会議等に報告しております。また、現状分析を踏まえた今後の対応等の協議を行っております。

(ロ) 為替リスクの管理

当行は、「市場リスク管理規程」等に従い、為替の変動リスクに関して、総合持高、損失限度額を設定する、若しくはヘッジ取引を行う等により管理しております。

(ハ) 価格変動リスクの管理

当行は、「市場リスク管理規程」等に従い、価格変動リスクを管理しております。有価証券のリスクはバリュー・アット・リスク（VaR）、10BPV等リスク指標に基づいて、予め設定した限度額に対する使用状況をリスク管理部門が日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(ニ) デリバティブ取引

デリバティブ取引の取扱いにつきましては、取引の執行、ヘッジ取引の有効性検証、事務管理に係る部門を分離し、取扱規程に基づいた運用・管理のもとに行っております。

(ホ) 市場リスクに係る定量的情報

トレーディング目的以外の金融商品

当行では時価が日次で変動する商品を多数保有し、その変動額も他のリスクカテゴリーと比較して大きいため、VaRを用いた市場リスク量を日次（預金・貸出金等の金利リスク量は月次）で把握・管理しております。

2023年3月期の当行のバンキング勘定の市場リスク量は次のとおりであります。

<バンキング勘定のリスク量>

(単位：億円)

	平均	最大	最小	年度末
預金・貸出金等	0	0	0	0
有価証券	145	186	124	182
債券	61	103	40	102
株式	15	19	10	11
その他	103	138	76	132

財務諸表

- (※1) VaRの計測手法は、原則として「分散共分散手法」で計測しております。
- (※2) 保有期間は、有価証券のうち市場流動性の高い金融商品（国債、地方債、上場株式（除く政策投資）等）は60営業日（上場株式のうち政策投資銘柄は250営業日）、市場流動性の低い金融商品及び預金・貸出金等は125営業日及び250営業日で算出しております。
- (※3) 信頼区間は99%、変動率を計測するための市場データの抽出期間は250営業日を使用しております。
- (※4) 有価証券の「債券」と「株式」のリスクファクター間で相関を考慮しているため、合計値が合致しません。
- (※5) 現在の預金・貸出金等の金利リスク量は、金利上昇リスクではなく、金利低下リスクを表すものとなっております。内部管理上は金利上昇リスクを管理することとしており、預金・貸出金等の金利リスク量を「0」としてしております。

なお、当行では、有価証券のVaRについて、市場リスク量の計測モデルの正確性を検証するため、モデルが計測した保有期間1日のVaRと実際の損失を比較するバックテストを実施しております。

現在使用している計測モデルは、相応の精度により市場リスクを捕捉しているものと考えられますが、変動率（ボラティリティ）の上昇により、リスク量（VaR）の増加が見込まれる局面では、随時対応を図り保守的に運営してまいります。

VaRによるリスク管理を行うにあたっては、特に以下の点に十分留意して活用することとしております。

(i) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、統計的な仮定に基づいて算定したものであり、前提条件や算定方法等によって異なる値となること

(ii) 市場リスクのVaR等の定量的情報は、前提条件等に基づいて算定した統計的な値であり、最大損失額の予測を意図するものではないこと（信頼区間に応じた頻度で損益がVaRを上回ることが想定されること）

(iii) 将来の市場の状況は、過去とは大きく異なることがあること
 なお、トレーディング目的の金融商品につきましては、保有残高が極めて少なく、経営に与える重要性が限定的であるため開示対象外としております。

③ 流動性リスクの管理

当行は、「流動性リスク管理規程」等に従い、流動性リスク管理に係る限度額を設定し、実績を日次でモニタリングするとともに、経営会議等に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2023年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は、次表には含めておりません（注1）参照。また、現金預け金、買入金銭債権、外国為替（資産・負債）、債券貸借取引受入担保金は、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額の注記を省略しております。

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 商品有価証券			
売買目的有価証券	191	191	—
(2) 金銭の信託	30,121	30,121	—
(3) 有価証券（※1）			
その他有価証券	326,764	326,764	—
(4) 貸出金	959,900		
貸倒引当金（※2）	△5,236		
	954,663	964,961	10,297
資産計	1,311,741	1,322,039	10,297
(1) 預金	1,362,004	1,362,004	0
(2) 譲渡性預金	16,375	16,375	—
(3) 借入金	67,500	67,500	—
負債計	1,445,880	1,445,880	0
デリバティブ取引（※3）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(141)	(141)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	13	13	—
デリバティブ取引計	(154)	(154)	—

- (※1) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24～3項及び第24～9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は該当ありません。
- (※2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。
- (※3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	貸借対照表計上額
非上場株式（※1）（※2）	579
組合出資金（※3）	776

(※1) 非上場株式については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 令和2年3月31日）第5項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(※2) 当事業年度において、非上場株式について3百万円減損処理を行っております。

(※3) 組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24～16項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金（※1）	149,985	—	—	—	—	—
買入金銭債権	967	—	—	—	—	—
有価証券						
その他有価証券のうち満期があるもの	21,653	41,453	53,571	34,296	78,351	70,662
うち国債	2,000	2,000	—	1,000	28,250	14,000
地方債	8,383	21,019	21,497	19,106	20,527	22,478
社債	5,402	12,356	8,103	5,859	—	34,183
その他	5,868	6,076	23,969	8,329	29,574	—
貸出金（※2）	294,182	169,036	126,511	96,682	93,456	145,294
合 計	466,790	210,489	180,082	130,979	171,807	215,956

(※1) 預け金のうち、期間の定めのないものは「1年以内」に含めて開示しております。

(※2) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない12,656百万円、期間の定めのないもの22,080百万円は含めておりません。

(注3) 借入金及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金（※）	1,201,916	45,953	3,444	—	—	—
譲渡性預金	16,375	—	—	—	—	—
債券貸借取引受入担保金	26,675	—	—	—	—	—
借入金	67,500	—	—	—	—	—
合 計	1,312,467	45,953	3,444	—	—	—

(※) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産または負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で貸借対照表に計上している金融商品

(単位：百万円)

区 分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合 計
金銭の信託	-	30,121	-	30,121
有価証券				
売買目的有価証券				
国債・地方債等	-	191	-	191
その他有価証券				
国債・地方債等	46,530	111,715	-	158,245
社債	-	49,572	15,920	65,493
株式	5,446	-	-	5,446
外国証券	1,154	21,044	-	22,198
投資信託	8,023	67,356	-	75,379
デリバティブ取引				
金利関連	-	183	-	183
通貨関連	-	157	-	157
株式関連	-	20	-	20
資産計	61,154	280,364	15,920	357,439
デリバティブ取引				
金利関連	-	134	-	134
通貨関連	-	382	-	382
負債計	-	516	-	516

(*) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は含まれておりません。第24-3項の取扱いを適用した投資信託の貸借対照表計上額はありませぬ。第24-9項の取扱いを適用した投資信託の貸借対照表計上額はありませぬ。

(2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

(単位：百万円)

区 分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合 計
貸出金	-	-	964,961	964,961
資産計	-	-	964,961	964,961
預金	-	1,362,004	-	1,362,004
譲渡性預金	-	16,375	-	16,375
借入金	-	67,500	-	67,500
負債計	-	1,445,880	-	1,445,880

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

資 産

金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている金融商品については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっております。観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

売買目的有価証券及びその他有価証券

売買目的有価証券及びその他有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に地方債、社債がこれに含まれます。

相場価格が入手できない場合には、将来キャッシュ・フローの現在価値技法などの評価技法を用いて時価を算定しております。評価に当たっては観察可能なインプットを最大限利用しており、インプットには、TIBOR、国債利回り、期限前返済率、信用スプレッド、倒産確率、倒産時の損失率等が含まれます。算定にあたり重要な観察できないインプットを用いている場合には、レベル3の時価に分類しております。

また、市場における取引価格が存在しない投資信託について、解約又は

買戻請求に関して市場参加者からリスクの対価を求められるほどの重要な制限がない場合には基準価額を時価とし、レベル2の時価に分類しております。

貸出金

貸出金のうち、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限る等の特性により返済期限を設けていないものについては、返済見込期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を信用格付ごとの信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。また、変動金利によるものは、内部格付、期間に基づく区分ごとに、原則として金利満期までの元利金の合計額を信用格付毎の信用リスクスプレッド及び市場金利で割り引いて時価を算定しております。

なお、信用リスクスプレッドは信用格付ごとの累積デフォルト率、債務者区分別ロス率を基に残存期間帯別に計算しております。

貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は決算日における貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

時価に対して観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

負 債

預金、及び譲渡性預金

要求払預金については、決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価としております。また、定期預金については、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いた現在価値により時価を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際の店頭表示基準利率を用いております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

借入金

借入金の時価は、期間に基づく区分毎に、元利金の合計額を市場金利で割り引いて時価を算定しております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しており、主に債券先物取引や金利先物取引がこれに含まれます。ただし、大部分のデリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しないため、取引の種類や満期までの期間に応じて現在価値技法やオプション価格計算モデル等の評価技法を利用して時価を算定しております。それらの評価技法で用いている主なインプットは、金利や為替レート、ボラティリティ等であります。また、取引相手の信用リスク及び当行自身の信用リスクに基づく価格調整を行っております。観察できないインプットを用いていない又はその影響が重要でない場合はレベル2の時価に分類しており、金利スワップ取引、為替予約取引等が含まれます。重要な観察できないインプットを用いている場合はレベル3の時価に分類しております。

(注2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(1) 重要な観察できないインプットに関する定量的情報（2023年3月31日）

区 分	評価技法	重要な観察できないインプット	インプットの範囲	インプットの加重平均
有価証券				
その他有価証券				
社債				
私募債	現在価値技法	倒産確率	0.06% - 6.70%	0.24%
		回収率	24.10%	24.10%

財務諸表

(2) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益
(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	期首 残高	当期の損益又は 評価・換算差額等		購入、 売却、 発行及 び決済 の純額	レベル3 の時価 への 振替 (*2)	レベル3 の時価 からの 振替 (*3)	期末 残高	当期の 損益に 計上し た額の うち貸 借対照 表日お いて保 有する 金融資 産及び 金融負 債の評 価損益
		損益に 計上	評価・ 換算差 額等に 計上 (*1)					
有価証券								
その他の有価証券								
社債								
私募債	12,244	-	118	3,557	-	-	15,920	-

- (*1) 貸借対照表の「評価・換算差額等」の「その他の有価証券評価差額金」に含まれております。
- (*2) レベル2の時価からレベル3の時価への振替であり、該当事項はありません。
- (*3) レベル3の時価からレベル2の時価への振替であり、該当事項はありません。
- (3) 時価の評価プロセスの説明

当行はリスク管理部門において時価の算定に関する方針及び手続きを定めており、これに沿って各取引部門が時価を算定しております。算定された時価は、独立した評価部門において、時価の算定に用いられた評価技法及びインプットの妥当性並びに時価のレベル分類の適切性を検証しております。検証結果は毎期リスク管理部門に報告され、時価の算定の方針及び手続に関する適切性が確保されております。

時価の算定に当たっては、個々の資産の性質、特性及びリスクを最も適切に反映できる評価モデルを用いております。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。

- (4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

社債の時価の算定で用いている重要な観察できないインプットは、倒産確率、回収率であります。なお、倒産確率の著しい増加（減少）は、時価の著しい低下（上昇）を生じさせることになり、回収率の著しい増加（減少）は、時価の著しい上昇（低下）を生じさせることとなります。一般に、倒産確率に関して用いている仮定の変化は、回収率に関して用いている仮定の逆方向への変化を伴います。

(ストック・オプション等関係)

譲渡制限付株式報酬制度

当行は、当行の取締役（社外取締役及び監査等委員を除く）及び執行役員に対する報酬として譲渡制限付株式報酬制度を導入しており、2022年7月21日開催の当行取締役会決議に基づき、以下のとおり、譲渡制限付株式報酬として当行親会社であるフィデアホールディングス株式会社（以下、「当行親会社」という。）の普通株式の処分を行っております。

1. 譲渡制限付株式報酬に係る費用計上額及び科目名

	当事業年度
人件費（「営業経費」）	14百万円

2. 譲渡制限付株式報酬の内容

	2022年7月付与
付与対象者の 区分及び人数	当行の取締役 6名（注） 当行の執行役員 5名
付与された株式の 種類及び数	当行親会社普通株式 15,500株
付与日	2022年7月21日
勤務対象期間	当行の2022年開催定時株主総会から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限期間	当行親会社株式の処分日である2022年8月10日から2023年開催予定の定時株主総会までの期間
譲渡制限解除条件	当行親会社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日まで継続して、当行の取締役若しくは執行役員のいずれかの地位にあったことを条件として、期間満了時点をもって、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の全部につき、譲渡制限を解除いたします。ただし、割当対象者が、取締役会が正当と認める理由により、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日の前日までに当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、2022年7月から割当対象者が当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した日を含む月までの月数を12で除した数に、当該時点において割当対象者が保有する本割当株式の数を乗じた数（ただし、計算の結果1株未満の端数が生ずる場合には、これを切り捨てるものとする。）の本割当株式につき、当該退任の直後の時点をもって、これに係る譲渡制限を解除するものいたします。
付与日における 公正な評価単価	1,289円

(注) 社外取締役及び監査等委員を除く。

3. 譲渡制限付株式の規模及びその変動状況

前事業年度末（株）	—
付与（株）	15,500
無償取得（株）（注）	—
譲渡制限解除（株）	—
未解除残（株）	15,500

(注) 当行親会社は、割当対象者が、本譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当行の定時株主総会の開催日の前日までに当行の取締役及び執行役員のいずれの地位からも退任した場合には、取締役会が正当と認める理由がある場合を除き、本割当株式を、当該退任の時点をもって、当然に無償で取得するものいたします。

また、本割当株式のうち、本譲渡制限期間が満了した時点（以下、「期間満了時点」という。）において上表の譲渡制限解除条件の譲渡制限の解除事由の定めに基づき譲渡制限が解除されていないものがある場合には、期間満了時点の直後の時点をもって、当行親会社はこれを当然に無償で取得するものいたします。

4. 付与日における公正な評価単価の見積方法

恣意性を排除した価格とするため、譲渡制限付株式の付与に係る当行取締役会決議日の直前営業日の東京証券取引所における当行親会社普通株式の終値としております。

(税効果会計関係)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ次のとおりであります。

繰延税金資産	
貸倒引当金	5,006百万円
その他有価証券評価差額金	1,750百万円
退職給付引当金	1,080百万円
減価償却	439百万円
税務上の繰越欠損金	278百万円
繰延ヘッジ損益	166百万円
未払賞与	90百万円
有価証券償却	65百万円
その他	396百万円
繰延税金資産小計	9,276百万円
評価性引当額	△6,165百万円
繰延税金資産合計	3,110百万円
繰延税金負債	
前払年金費用	△158百万円
その他	△257百万円
繰延税金負債合計	△416百万円
繰延税金資産の純額	2,694百万円

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(単位：百万円)

区分	当事業年度
役務取引等収益	4,117
預金・貸出業務	999
為替業務	714
証券関連業務	24
代理業務	1,877
保護預り・貸金庫業務	31
その他業務	470
顧客との契約から生じる経常収益	4,117
上記以外の経常収益 (注)	18,318
経常収益	22,436

(注) 主に、企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」の範囲に含まれる金融商品に係る取引及び金融商品の組成又は取得に際して受け取る手数料が含まれております。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「重要な会計方針 8. 収益の計上方法」に記載しているため、省略しております。

(関連当事者との取引関係)

1. 親会社及び法人主要株主等

(単位：百万円)

種類	会社等の名称	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
親会社	フィデアホールディングス(株)	被所有 直接 100.00%	役員兼任 経営管理等	経営管理 資金の貸付 (注1,2)	656 500	- 貸出金	- 500
				自己株式の 取得(注3)	5,418	-	-

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等
一般の取引先と同様に決定しております。
2. 資金の貸付の取引金額については平均残高を記載しております。
3. 取引条件及び取引条件の決定方針等
自己株式の取得は2023年2月24日開催の取締役会決議に基づくC種優先株式の取得であり、株式譲渡申込の方法により取得価格を1株につき433円48銭にて行っております。なお、取得価格は預金保険機構が2005年10月に公表した「資本増強のために引受け等を行った優先株式等の処分に係る当面の対応について」に基づき検討した金額によっております。

2. 子会社及び関連会社等

会社法第2条第3号に定める子会社及び関連会社との取引はありますが、各取引項目につきまして重要性がないため記載を省略しております。

3. 兄弟会社等

(単位：百万円)

種類	会社等の名称	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
親会社の子会社	フィデアカード(株)	所有 直接 - 間接 -	役員兼任 貸出金の 被保証	住宅ローン 等の保証	(注1,2)	-	-

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等
一般の取引先と同様に決定しております。
2. フィデアカード(株)は、当行の住宅ローン等の保証を引受けており、2023年3月末の保証残高は144,586百万円であります。また、当行の当社に対する期中の保証料の支払額は246百万円であり、代位弁済額は137百万円であります。
なお、上記以外につきましても、兄弟会社との取引はありますが、各取引項目につきまして重要性がないため記載を省略しております。

4. 役員及び個人主要株主等

(単位：百万円)

種類	会社等の名称又は氏名	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
所有している会社等(当該会社等の子会社を含む)	株秋田クボタ(注1)	-	与信取引	資金の貸付	136	貸出金	116
	ネットトヨタ秋田(株)(注2)	-	与信取引	資金の貸付	965	貸出金	1,380
	株トヨタレンタリース秋田(注2)	-	与信取引	資金の貸付	540	貸出金	540
	株ロイヤルセンチュリーゴルフクラブ(注3)	-	与信取引	資金の貸付	40	貸出金	40
	奥山ポーリング(株)(注4)	-	与信取引	資金の貸付	776	貸出金	671
				債務の保証	247	支払承諾 見返	311

(注) 1. 株秋田クボタは当行取締役石井資就及びその近親者が議決権の過半数を所持する石井商事(株)の子会社であります。
2. 当行取締役石井資就並びに近親者及び石井商事(株)がネットトヨタ秋田(株)の議決権の過半数を所有しております。また、株トヨタレンタリース秋田はネットトヨタ秋田(株)の子会社であります。
3. 株ロイヤルセンチュリーゴルフクラブは当行取締役石井資就が議決権の過半数を所有しております。
4. 当行取締役(監査等委員)奥山和彦及びその近親者が奥山ポーリング(株)の議決権の過半数を所有しております。
5. 取引条件及び取引条件の決定方針等
一般取引先と同様であります。
6. 取引金額は平均残高を記載しております。

(持分法損益等)

当行の関係会社は、損益及び利益剰余金その他の項目からみて重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(1株当たり情報)

1株当たりの純資産額	134円16銭
1株当たりの当期純利益金額	5円43銭

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

決算公告・財務諸表に係る確認書

❖決算公告について

決算公告につきましては、当行ホームページに掲載しております。

❖財務諸表に係る確認書

「財務諸表の正確性、内部監査の有効性についての経営者責任の明確化について（要請）」（平成17年10月7日付金監第2835号）に基づく、当行の財務諸表の適正性、及び財務諸表作成に係る内部監査の有効性に関する代表者の確認書は以下のとおりです。

確認書

2023年6月23日

株式会社 北都銀行
取締役頭取 伊藤 新

私は、当行の2022年4月1日から2023年3月31日までの事業年度（2023年3月期）に係る財務諸表の適正性、及び財務諸表作成に係る内部監査の有効性を確認しております。

以 上

損益の状況

◆国内・国際業務部門別粗利益

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用収支	13,948	1,057	15,006	14,704	984	15,689
役務取引等収支	2,579	△4	2,575	2,800	△3	2,796
その他業務収支	△1,228	△1,396	△2,625	△477	△3,277	△3,754
業務粗利益	15,299	△343	14,955	17,027	△2,296	14,730
業務粗利益率	1.20%	△0.69%	1.17%	1.30%	△7.80%	1.12%

(注) 1. 国内業務部門は国内店の円建取引、国際業務部門は国内店の外貨建取引であります。但し、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分は国際業務部門に含めております。

$$2. \text{業務粗利益率} = \frac{\text{業務粗利益}}{\text{資金運用勘定平均残高}} \times 100$$

◆業務純益

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
業務純益	3,428	△422	3,006	5,715	△2,378	3,338
実質業務純益	3,378	△421	2,957	5,593	△2,378	3,215
コア業務純益	4,692	912	5,605	5,900	134	6,035
コア業務純益 (除く投資信託解約損益)	2,315	912	3,228	2,046	134	2,181

◆役務取引の状況

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
役務取引等収益	4,100	11	4,111	4,254	9	4,264
役務取引等費用	1,520	16	1,536	1,454	13	1,468

◆その他業務収支の内訳

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
その他業務収支	△1,228	△1,396	△2,625	△477	△3,277	△3,754
その他業務収益	888	376	1,264	933	194	1,127
外国為替売買益	—	—	—	—	—	—
商品有価証券売買益	—	—	—	—	—	—
国債等債券売却益	802	376	1,178	910	194	1,104
国債等債券償還益	—	—	—	—	—	—
金融派生商品収益	83	—	83	—	—	—
その他	2	—	2	23	—	23
その他業務費用	2,117	1,772	3,890	1,410	3,471	4,882
外国為替売買損	—	61	61	—	764	764
商品有価証券売買損	1	—	1	1	—	1
国債等債券売却損	2,116	1,710	3,827	1,216	2,707	3,923
国債等債券償還損	—	—	—	—	—	—
国債等債券償却	—	—	—	—	—	—
債券費・社債費	—	—	—	—	—	—
金融派生商品費用	—	—	—	191	—	191
その他	—	—	—	—	—	—

損益の状況

❖資金運用・資金調達勘定平均残高、利息、利回り

(単位：百万円)

		2022年3月期			2023年3月期		
		国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用勘定	平均残高	(43,374) 1,264,425	49,361	1,270,412	(28,197) 1,307,178	29,441	1,308,422
	利息	(1) 13,978	1,076	15,048	(0) 14,778	995	15,773
	利回り	1.10%	2.18%	1.18%	1.13%	3.38%	1.20%
資金調達勘定	平均残高	1,530,963	(43,374) 49,395	1,536,984	1,507,389	(28,197) 29,474	1,508,666
	利息	25	(1) 18	42	73	(0) 11	84
	利回り	0.00%	0.03%	0.00%	0.00%	0.03%	0.00%

- (注) 1. () 内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息（内書き）であります。
 2. 国際業務部門の外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式（前月末TT仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式）により算出しております。
 3. 合計欄において国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。

❖営業経費の内訳

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
給料・手当	3,885	3,823
退職給付費用	188	172
福利厚生費	781	769
減価償却費	799	846
土地建物機械賃借料	495	489
営繕費	11	11
消耗品費	129	86
保守管理費	348	369
給水光熱費	137	160
旅費	24	26
通信費	246	268
広告宣伝費	138	130
諸会費・寄付金・交際費	65	74
租税公課	925	809
業務委託費	1,521	1,412
臨時費用費	737	711
役員賞与引当金繰入額	14	19
その他	1,566	1,338
合計	12,017	11,520

❖受取利息・支払利息の分析

(単位：百万円)

	2022年3月期						2023年3月期					
	国内業務部門			国際業務部門			国内業務部門			国際業務部門		
	残高による 増減	利率による 増減	純増減	残高による 増減	利率による 増減	純増減	残高による 増減	利率による 増減	純増減	残高による 増減	利率による 増減	純増減
受取利息	△213	1,531	1,318	△55	129	74	472	332	804	△434	354	△80
支払利息	9	△87	△78	△2	△32	△34	0	48	48	△7	0	△7

(注) 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、利率による増減に含めて記載しております。

経営諸比率

◆利鞘

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用利回り	1.10	2.18	1.18	1.13	3.38	1.20
資金調達原価	0.78	0.19	0.78	0.76	0.31	0.76
総資金利鞘	0.32	1.99	0.40	0.37	3.07	0.44

◆利益率

(単位：%)

	2022年3月期	2023年3月期
総資産経常利益率	0.15	0.16
資本経常利益率	5.00	5.42
総資産当期純利益率	0.08	0.09
資本当期純利益率	2.74	3.24

(注) 1. 総資産経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常（当期純）利益}}{\text{総資産（除く支払承諾見返）平均残高}} \times 100$

2. 資本経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常（当期純）利益}}{\text{純資産勘定平均残高}} \times 100$

3. 分母となる純資産平均残高は「期中平均残高」を使用し算出しております。

◆預貸率

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	63.38	—	63.35	69.25	—	69.23
期中平均	62.54	—	62.51	65.43	—	65.41

(注) 預貸率は、預金・譲渡性預金の合計に対する貸出金の比率です。

◆預証率

(単位：%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	22.13	4,935.09	24.48	22.20	5,515.08	23.80
期中平均	22.56	6,010.51	25.99	20.76	5,452.29	22.73

(注) 預証率は、預金・譲渡性預金の合計に対する保有有価証券の比率です。

◆従業員1人当たり預金残高・貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
従業員1人当たり預金	2,301	2,515
従業員1人当たり貸出金	1,459	1,751

(注) 1. 預金には譲渡性預金を含んでおります。

2. 従業員数は、出向者を除いた期中平均人員にて算出しております。

◆1店舗当たり預金残高・貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
1店舗当たり預金	16,584	16,606
1店舗当たり貸出金	10,513	11,565

(注) 1. 預金には譲渡性預金を含んでおります。

2. 店舗数には出張所を含んでおりません。

預金

◆預金科目別残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
流動性預金	886,182	65.0	886,182	—	910,074	66.8	910,074	—
うち有利息預金	769,789	56.4	769,789	—	793,253	58.2	793,253	—
定期性預金	473,611	34.7	473,611	—	448,257	32.9	448,257	—
うち固定金利定期預金	465,631	34.1	465,631	—	440,199	32.3	440,199	—
うち変動金利定期預金	141	0.0	141	—	132	0.0	132	—
その他	4,460	0.3	3,802	658	3,672	0.3	3,269	402
合計	1,364,255	100.0	1,363,596	658	1,362,004	100.0	1,361,602	402
譲渡性預金	12,219		12,219	—	16,375		16,375	—
総合計	1,376,474		1,375,816	658	1,378,380		1,377,977	402

〈平均残高〉

(単位：百万円、%)

	2022年3月期				2023年3月期			
	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
流動性預金	852,215	62.5	852,215	—	896,455	64.5	896,455	—
うち有利息預金	735,822	54.0	735,822	—	779,634	56.1	779,634	—
定期性預金	506,807	37.2	506,807	—	490,497	35.3	490,497	—
うち固定金利定期預金	499,071	36.6	499,071	—	482,733	34.7	482,733	—
うち変動金利定期預金	147	0.0	147	—	136	0.0	136	—
その他	3,524	0.3	2,723	801	3,075	0.2	2,559	515
合計	1,362,547	100.0	1,361,746	801	1,390,028	100.0	1,389,512	515
譲渡性預金	36,616		36,616	—	31,714		31,714	—
総合計	1,399,164		1,398,362	801	1,421,742		1,421,226	515

- (注) 1. 流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金
 2. 定期性預金＝定期預金＋定期積金
 固定金利定期預金：預入時に満期日までの利率が確定する定期預金
 変動金利定期預金：預入期間中の市場金利の変化に応じて金利が変動する定期預金
 3. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式により算出しております。

❖定期預金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日
3ヵ月未満	定期預金	93,137	90,323
	うち固定金利定期預金	93,134	90,313
	うち変動金利定期預金	2	9
3ヵ月以上 6ヵ月未満	定期預金	97,038	91,233
	うち固定金利定期預金	97,017	91,230
	うち変動金利定期預金	21	3
6ヵ月以上 1年未満	定期預金	215,249	198,480
	うち固定金利定期預金	215,200	198,456
	うち変動金利定期預金	49	23
1年以上 2年未満	定期預金	9,493	8,676
	うち固定金利定期預金	9,453	8,641
	うち変動金利定期預金	39	35
2年以上 3年未満	定期預金	6,043	5,902
	うち固定金利定期預金	6,015	5,841
	うち変動金利定期預金	27	61
3年以上	定期預金	3,063	3,395
	うち固定金利定期預金	3,063	3,395
	うち変動金利定期預金	—	—
合計		424,026	398,012

(注) 本表の預金残高には、積立定期預金を含んでおりません。

❖預金者別預金残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
個人預金	974,364	71.4	983,348	71.3
法人預金	304,088	22.3	308,124	22.4
その他	85,803	6.3	86,908	6.3
合計	1,364,255	100.0	1,378,380	100.0

(注) 譲渡性預金を除いております。

❖財形貯蓄預金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
財形貯蓄預金	10,901	10,837

貸出金

◆貸出金科目別残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	期末残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
手形貸付	9,807	1.1	9,807	—	9,766	1.0	9,766	—
証書貸付	791,914	90.7	791,914	—	871,789	90.8	871,789	—
当座貸越	69,418	7.9	69,418	—	76,997	8.0	76,997	—
割引手形	1,488	0.1	1,488	—	1,348	0.2	1,348	0
合計	872,628	100.0	872,628	—	959,900	100.0	959,900	0

〈平均残高〉

(単位：百万円、%)

	2022年3月期				2023年3月期			
	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門	平均残高	構成比	国内業務部門	国際業務部門
手形貸付	10,114	1.1	10,114	—	9,082	1.0	9,082	—
証書貸付	796,994	91.1	796,994	—	853,869	91.3	853,869	—
当座貸越	66,479	7.6	66,479	—	71,059	7.6	71,059	—
割引手形	1,566	0.2	1,566	—	1,522	0.1	1,522	0
合計	875,154	100.0	875,154	—	935,533	100.0	935,533	0

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

◆貸出金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日
		1年以下	貸出金
	うち変動金利		
	うち固定金利		
1年超	貸出金	165,761	169,486
3年以下	うち変動金利	44,244	43,675
	うち固定金利	121,516	125,810
3年超	貸出金	134,199	127,388
5年以下	うち変動金利	36,068	34,802
	うち固定金利	98,131	92,585
5年超	貸出金	91,198	97,528
7年以下	うち変動金利	29,024	27,764
	うち固定金利	62,173	69,764
7年超	貸出金	241,855	244,150
	うち変動金利	109,592	107,320
	うち固定金利	132,262	136,830
期間の定め のないもの	貸出金	25,314	23,992
	うち変動金利	3,649	3,525
	うち固定金利	21,664	20,466
合計		872,628	959,900

(注) 残存期間1年以下の貸出金については、変動金利・固定金利の区別をしておりません。

◆貸出金業種別残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
製造業	57,234	6.6	56,963	5.9
農業、林業	2,267	0.3	2,205	0.2
漁業	64	0.0	99	0.0
鉱業、採石業、砂利採取業	2,145	0.2	2,218	0.2
建設業	45,698	5.2	42,943	4.5
電気・ガス・熱供給・水道業	57,571	6.6	60,476	6.3
情報通信業	5,325	0.6	4,458	0.5
運輸業、郵便業	11,581	1.3	10,057	1.0
卸売業、小売業	59,404	6.8	60,200	6.3
金融業、保険業	11,585	1.3	32,633	3.4
不動産業、物品賃貸業	56,599	6.5	60,708	6.3
学術研究、専門・技術サービス業	9,463	1.1	15,917	1.7
宿泊業、飲食サービス業	14,374	1.7	13,960	1.4
生活関連サービス業、娯楽業	11,229	1.3	10,417	1.1
教育、学習支援業	842	0.1	838	0.1
医療、福祉	39,072	4.5	38,182	4.0
その他のサービス	18,046	2.1	14,131	1.5
地方公共団体	243,132	27.9	230,661	24.0
その他	226,986	26.0	302,825	31.6
合計	872,628	100.0	959,900	100.0

※「その他」には、中央政府（財務省特別会計）向け貸出金（2022年3月31日は52,250百万円、2023年3月31日は139,657百万円）が含まれております。

◆貸出金の担保別内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
有価証券	805		802	
債権	3,035		2,655	
商品	—		—	
不動産	83,819		86,756	
その他	3,535		3,350	
小計	91,196		93,565	
保証	297,253		277,161	
信用	484,177		589,173	
合計	872,628		959,900	
(うち劣後特約付貸出金*)	(1,905)		(1,905)	

※貸出金のうち、劣後特約付貸出金の残高を表記しております。

◆支払承諾見返の担保別内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
有価証券	—		—	
債権	—		—	
商品	—		—	
不動産	1,092		998	
その他	—		—	
小計	1,092		998	
保証	297		1,778	
信用	10,886		10,460	
合計	12,277		13,237	

◆貸出金使途別残高

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	構成比	残高	構成比
設備資金	320,052	36.7	313,356	32.6
運転資金	552,576	63.3	646,543	67.4
合計	872,628	100.0	959,900	100.0

貸出金

❖中小企業等に対する貸出金残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
中小企業等貸出金残高 (貸出金に占める比率)	539,382 (61.81%)	547,386 (57.02%)

(注) 中小企業等とは、資本金3億円（ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円）以下の会社又は常用する従業員が300人（ただし、卸売業、物品賃貸業等は100人、小売業、飲食業は50人）以下の企業等であります。

❖個人ローン残高

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
住宅ローン	148,468	136,719
その他ローン	32,044	30,470
合計	180,513	167,190

❖貸倒引当金内訳

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	期中増減額	残高	期中増減額
一般貸倒引当金	2,351	△49	2,227	△123
個別貸倒引当金	2,576	137	3,018	442
合計	4,927	87	5,246	319

❖貸出金償却額

2022年3月期及び2023年3月期とも該当事項はありません。

❖特定海外債権残高

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

❖リスク管理債権及び金融再生法開示債権

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	残高	総与信に占める割合	残高	総与信に占める割合
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	2,831	3.15	2,197	0.22
危険債権	9,034	1.00	10,489	1.06
要管理債権	594	0.06	341	0.03
三月以上延滞債権	—	—	—	—
貸出条件緩和債権	594	594	341	0.03
合計	12,461	1.38	13,028	1.31
正常債権	885,166	98.66	976,436	98.68
総与信（末残）	897,628	100.00	989,464	100.00

※部分直接償却を実施しております。

証券

◆保有有価証券残高 (期末残高)

(単位：百万円、%)

	2022年3月31日			2023年3月31日		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
国債	46,220(15.2)	－	46,220(13.7)	46,530(15.2)	－	46,530(14.2)
地方債	125,539(41.2)	－	125,539(37.2)	111,715(36.5)	－	111,715(34.0)
社債	67,352(22.1)	－	67,352(20.0)	65,493(21.4)	－	65,493(20.0)
株式	6,343(2.1)	－	6,343(1.9)	6,026(2.0)	－	6,026(1.8)
その他の証券	59,028(19.4)	32,494(100.0)	91,523(27.2)	76,156(24.9)	22,198(100.0)	98,355(30.0)
うち外国債券	－	32,494(100.0)	32,494(9.6)	－	22,198(100.0)	22,198(6.7)
うち外国株式	－	－	－	－	－	－
合計	304,485(100.0)	32,494(100.0)	336,979(100.0)	305,922(100.0)	22,198(100.0)	328,120(100.0)

〈平均残高〉

(単位：百万円、%)

	2022年3月期			2023年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
国債	57,473(18.2)	－	57,473(15.8)	43,702(14.8)	－	43,702(13.5)
地方債	129,676(41.1)	－	129,676(35.6)	122,556(41.5)	－	122,556(37.9)
社債	67,480(21.4)	－	67,480(18.6)	66,191(22.4)	－	66,191(20.5)
株式	5,206(1.6)	－	5,206(1.4)	4,468(1.5)	－	4,468(1.4)
その他の証券	55,732(17.7)	48,187(100.0)	103,919(28.6)	58,249(19.8)	28,130(100.0)	86,379(26.7)
うち外国債券	－	48,187(100.0)	48,187(13.2)	－	28,130(100.0)	28,130(8.7)
うち外国株式	－	－	－	－	－	－
合計	315,569(100.0)	48,187(100.0)	363,756(100.0)	295,169(100.0)	28,130(100.0)	323,299(100.0)

(注) 1. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。
2. () 内は構成比であります。

◆公共債引受額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	－	－
地方債	15,298	7,974
政府保証債	－	－
その他の商品有価証券	28	27
合計	15,326	8,002

◆公共債窓口販売実績

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	102	282
地方債	76	570
政府保証債	－	－
その他の商品有価証券	－	－
合計	178	852

◆商品有価証券平均残高

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
国債	－	－
地方債	163	191
政府保証債	－	－
その他の商品有価証券	－	－
合計	163	191

◆有価証券の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2022年3月31日	2023年3月31日	
国債	1年以下	3,500	2,000	
	1年超3年以内	4,000	2,000	
	3年超5年以内	0	—	
	5年超7年以内	0	1,000	
	7年超10年以内	31,000	28,250	
	10年超	8,200	14,000	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	46,700	47,250	
地方債	1年以下	5,583	8,383	
	1年超3年以内	23,356	21,019	
	3年超5年以内	18,633	21,497	
	5年超7年以内	24,819	19,106	
	7年超10年以内	27,819	20,527	
	10年超	24,703	22,478	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	124,916	113,013	
社債	1年以下	2,746	5,402	
	1年超3年以内	8,698	12,356	
	3年超5年以内	12,000	8,103	
	5年超7年以内	5,959	5,859	
	7年超10年以内	100	—	
	10年超	37,574	34,183	
	期間の定めのないもの	—	—	
合計	67,079	65,906		
株式	期間の定めのないもの	6,343	6,026	
その他の証券	1年以下	12,972	5,868	
	1年超3年以内	9,765	6,076	
	3年超5年以内	8,644	23,969	
	5年超7年以内	12,486	8,329	
	7年超10年以内	26,948	29,574	
	10年超	2,520	—	
	期間の定めのないもの	18,184	24,536	
	合計	91,523	98,355	
	うち外国債券	1年以下	2,716	—
		1年超3年以内	2,117	264
		3年超5年以内	7,706	16,603
		5年超7年以内	12,446	1,953
		7年超10年以内	5,272	3,376
		10年超	2,234	—
期間の定めのないもの		—	—	
合計		32,494	22,198	
うち外国株式	期間の定めのないもの	—	—	

有価証券等の時価等情報

有価証券関係

○貸借対照表の「商品有価証券」、「有価証券」について記載しております。

1. 売買目的有価証券

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
	当事業年度の損益に含まれた評価差額	当事業年度の損益に含まれた評価差額
売買目的有価証券	△1	△1

2. 満期保有目的の債券

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

3. 子会社株式及び関連会社株式

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(注) 市場価格のない子会社株式及び関連会社株式等

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
	貸借対照表計上額	貸借対照表計上額
子会社株式	—	—
関連会社株式	—	—
組合出資金	179	252
合計	179	252

4. その他有価証券

(単位：百万円)

	種類	2022年3月31日			2023年3月31日		
		貸借対照表計上額	取得原価	差額	貸借対照表計上額	取得原価	差額
貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	3,654	1,895	1,758	3,148	1,720	1,428
	債券	85,742	84,157	1,584	52,908	52,297	611
	国債	6,022	5,994	27	2,537	2,528	8
	地方債	53,452	52,490	962	24,856	24,685	171
	社債	25,671	25,671	595	25,514	25,084	430
	その他	54,819	54,819	3,659	15,368	14,085	1,282
	小計	147,876	140,873	7,003	71,425	68,103	3,322
貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	2,201	2,373	△172	2,297	2,437	△139
	債券	153,370	154,942	△1,572	170,830	174,140	△3,309
	国債	40,197	40,751	△553	43,993	44,735	△742
	地方債	72,087	72,753	△666	86,858	88,562	△1,704
	社債	41,085	41,437	△351	39,979	40,842	△863
	その他	32,318	34,672	△2,353	82,312	87,934	△5,621
	小計	187,890	191,988	△4,098	255,441	264,511	△9,070
合計		335,766	332,861	2,905	326,867	332,615	△5,748

有価証券等の時価等情報

5. 当該事業年度中に売却した満期保有目的の債券

2022年3月期及び2023年3月期とも該当事項はありません。

6. 当該事業年度中に売却したその他有価証券

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	8,584	1,041	529	11,161	833	503
債券	63,832	165	305	33,377	383	493
国債	50,398	81	302	17,439	6	459
地方債	12,934	83	1	15,381	326	33
社債	499	0	2	556	50	-
その他	122,253	1,365	3,927	72,422	532	3,774
合計	194,669	2,572	4,762	116,961	1,749	4,771

7. 保有目的を変更した有価証券

2022年3月期及び2023年3月期とも該当事項はありません。

8. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券（市場価格のない株式及び組合出資金を除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当事業年度の損失として処理（以下、「減損処理」という。）しております。

前事業年度及び当事業年度における減損処理額はありません。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、次のとおり定めております。

- (1) 時価が取得原価に比べて50%以上下落している場合。
- (2) 時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落した場合について、発行会社の財務内容や一定期間の時価の推移等を勘案し、当行が制定した基準に該当した場合。

金銭の信託関係

1. 運用目的の金銭の信託

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	貸借対照表計上額	損益に含まれた評価差額	貸借対照表計上額	損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託	26,062	25	30,121	△12

2. 満期保有目的の金銭の信託

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

3. その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

その他有価証券評価差額金

貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
評価差額	2,905	△5,748
その他有価証券	2,905	△5,748
その他の金銭の信託	—	—
(△) 繰延税金負債	△884	—
その他有価証券評価差額金	2,020	△5,748

有価証券等の時価等情報

デリバティブ取引関係

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益
店頭	金利スワップ 受取変動・ 支払固定	—	—	—	—	4,500	4,500	83	83
合計				—	—			83	83

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益
店頭	為替予約								
	売建	34,129	—	△1,818	△1,818	24,887	—	△265	△265
	買建	4,335	—	8	8	2,112	—	41	41
合計				△1,809	△1,809			△224	△224

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

(3) 株式関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(6) クレジットデリバティブ取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

ヘッジ会計の方法	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価
原則的処理方法	金利スワップ受取変動・支払固定	その他有価証券(国債)	6,500	6,500	81	その他有価証券(国債)	17,750	17,750	△34
合計					81				△34

(注) 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

(2) 通貨関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

(3) 株式関連取引

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	2022年3月31日				2023年3月31日			
		主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価
原則的処理方法	株式先渡取引売建	その他有価証券(株式)	1,599	—	102	その他有価証券(株式)	1,607	—	20
合計					102				20

(注) 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

(4) 債券関連取引

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

暗号資産

2022年3月末及び2023年3月末とも該当事項はありません。

国際業務等

❖内国為替取扱高

(単位：千口、億円)

		2022年3月期		2023年3月期	
		口数	金額	口数	金額
送金為替	各地へ向けた分	3,479	24,424	3,456	38,746
	各地より受けた分	5,121	26,608	5,246	46,020
代金取立	各地へ向けた分	9	4,424	18	141
	各地より受けた分	35	3,819	32	478
金額合計			59,275		85,387

❖外国為替取扱高

(単位：百万米ドル)

		2022年3月期		2023年3月期	
		仕向為替	売渡為替	34	
	買入為替	0		0	
被仕向為替	支払為替	39		28	
	取立為替	—		—	
合計		74		51	

❖外貨建資産残高

(単位：百万米ドル)

	2022年3月31日	2023年3月31日
外貨建資産残高	279	176

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖自己資本の充実の状況（単体）

当行は、銀行法施行規則（昭和57年大蔵省令第10号）第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項（自己資本比率規制の第3の柱（市場規律））として、当期（2022年4月1日から2023年3月31日まで）及び前期（2021年4月1日から2022年3月31日まで）の開示事項を、以下のとおり、開示しております。

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第19号。以下、「自己資本比率告示」又は「告示」という。）に定められた算式に基づき、算出しております。

また、当行は、国内基準を適用の上信用リスク・アセットの算出においては標準的手法（注）を採用しております。

（注）標準的手法とは、あらかじめ監督当局が設定したリスク・ウェイトを使用して信用リスク・アセットを算出する手法のことです。

❖自己資本の構成に関する開示事項（単体）

自己資本の構成及び自己資本比率（単体）

（単位：百万円、％）

項目	2022年 3月31日	2023年 3月31日
コア資本に係る基礎項目（1）		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	46,579	42,053
うち、資本金及び資本剰余金の額	26,852	25,000
うち、利益剰余金の額	20,095	17,392
うち、自己株式の額（△）	-	-
うち、社外流出予定額（△）	368	338
うち、上記以外に該当するものの額	-	-
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	-	-
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	2,538	2,386
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	2,538	2,386
うち、適格引当金コア資本算入額	-	-
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	-	-
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	220	107
コア資本に係る基礎項目の額（イ）	49,338	44,547
コア資本に係る調整項目（2）		
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	886	752
うち、のれんに係るものの額	-	-
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	886	752
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	218	85
適格引当金不足額	-	-
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	-	-
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	-	-
前払年金費用の額	322	363
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	-	-
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	-	-
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	-	-
特定項目に係る十パーセント基準超過額	-	-
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	-	-
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	-	-
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	-	-
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	-	-
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	-	-
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	-	-
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	-	-
コア資本に係る調整項目の額（ロ）	1,427	1,201
自己資本		
自己資本の額（（イ）－（ロ））（ハ）	47,910	43,346
リスク・アセット等（3）		
信用リスク・アセットの額の合計額	457,738	461,615
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	454	453
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	-	-
うち、土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額	454	453
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	-	-
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	30,671	31,977
信用リスク・アセット調整額	-	-
オペレーショナル・リスク相当額調整額	-	-
リスク・アセット等の額の合計額（ニ）	488,409	493,592
自己資本比率		
自己資本比率（（ハ）／（ニ））	9.80	8.78

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

◆定性的な開示事項（単体）

1. 自己資本調達手段（その額の全部又は一部が、自己資本比率告示第25条又は第37条の算式におけるコア資本に係る基礎項目の額に含まれる資本調達手段をいう。）の概要

2022年3月末の自己資本調達手段の概要は以下のとおりであります。

発行主体	北都銀行	北都銀行
資本調達手段の種類	普通株式	C種優先株式
コア資本に係る基礎項目の額に算入された額		
単体自己資本比率	21,852百万円	5,000百万円
配当率又は利率	—	1株あたり46円40銭 (中間期末23円20銭、 期末23円20銭)
償還期限の有無	無	無
その日付	—	—
償還等を可能とする特約の概要	—	2020年4月1日以降、取締役会が別に定める日が到来したときは、C種優先株式の全部または一部を取得することができる。
初回償還可能日及びその償還金額	—	2020年4月1日
償還特約の対象となる事由	—	取締役会決議による。
他の種類の資本調達手段への転換に係る特約の概要	—	C種優先株式の取得と引換えに、普通株式を交付する。
元本の削減に係る特約の概要	—	—
配当等停止条項の有無	無	無
未配当の剰余金又は未払の利息に係る累積の有無	無	無

当行は、2021年10月1日付でC種優先株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。当該株式併合の影響を考慮しない場合の「配当率又は利率」は、1株あたり4円64銭（中間期末2円32銭、期末2円32銭）となります。

2023年3月末の自己資本調達手段の概要は以下のとおりであります。

発行主体	北都銀行
資本調達手段の種類	普通株式
コア資本に係る 基礎項目の額に 算入された額	
単体自己資本比率	25,000百万円
配当率又は利率	—
償還期限の有無	無
その日付	—
償還等を可能とする 特約の概要	—
初回償還可能日及び その償還金額	—
償還特約の対象と なる事由	—
他の種類の資本調達 手段への転換に係る 特約の概要	—
元本の削減に係る 特約の概要	—
配当等停止条項の 有無	無
未配当の剰余金又は 未払の利息に係る 累積の有無	無

当行は、2023年2月24日開催の取締役会決議に基づき、公的資金に係るC種優先株式の全株式を取得及び消却いたしました。

2. 自己資本の充実度に関する評価方法の概要

2022年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法として、第一に銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有している資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第19号）に定められた算式に基づき算出した自己資本比率の十分性を評価基準としております。当行の2022年3月期の単体自己資本比率は9.80%であり、内部留保の蓄積のほか、資本政策の実行等により引き続き自己資本を充実させてまいります。

当行では、自己資本の充実度について、自己資本比率、銀行勘定の金利リスク及び統合リスク量（信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスク）により評価しております。また、結果をリスクマネジメント会議等に報告するほか、内部環境や外部環境の状況に照らし、主要シナリオの妥当性の検証、リスクごとのストレステストの実施等を踏まえて評価、管理を行っております。

2023年3月期

自己資本の充実度に関する評価方法は、前期と変更ありません。当行の2023年3月期の単体自己資本比率は8.78%であります。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

※以下の「3. 信用リスクに関する事項」から「9. 金利リスクに関する事項」までの開示内容については、特にことわりがない限りは2021年度、2022年度とも相違はありません。

3. 信用リスクに関する事項

イ. リスク管理方針及び手続の概要

① リスクの定義

当行では、信用リスクを、信用供与先の財務状況の悪化等により、資産（オフ・バランス資産を含む）の価値が減少ないし消失し、当行が損失を被るリスクと定義しております。

② リスク管理の方針

当行では、個々の信用リスクの度合いを適正に把握した上で、信用リスクの分散を基本とした信用集中リスクの管理を行い、最適な与信ポートフォリオの構築と、資産の健全性及び収益性向上を図る方針としております。

個々の信用リスクの度合いについては、デフォルト率を基に信用格付を設定し、さらには自己査定を通じて債務者ごとの信用状態を把握することを基本としております。また、評価・計測した信用リスク量や個社の信用リスクの状況等について、定期的に経営会議等への報告を行っております。

③ リスク管理の手続の概要

当行では、リスク管理の方針に則り、デフォルト率を基にして信用格付の設定を行い、信用格付に基づき将来見通し等を踏まえ債務者区分の判定を行っております。債務者の財務状況、担保・保証等の状況について、継続的なモニタリングによる与信管理を行い、債務者の状況の変化に応じて、適宜、信用格付及び債務者区分等の見直しを行う随時査定態勢を構築しております。

信用リスク量の計測につきましては、信用格付別等のデフォルト率や回収見込率等のパラメータを基に、EL（Expected Loss：期待損失）及びUL（Unexpected Loss：非期待損失）等の信用リスク量を定期的に評価・計測し、また、計測したULやそのストレステストの結果を基にリスク資本を配賦しております。

個別融資の取組みにあたっては、法令等を遵守した上で融資業務の規範として位置付けている「クレジットポリシー」に基づき、また、貸出の最終決裁権限を取締役に置き、適切な運営を行っております。

大口先の与信管理については、取締役会承認基準を設定し、信用集中リスクの管理を行っております。さらに、重要な大口先や経営支援先等については、クレジットレビューに報告し、該当先の信用リスクの状況等について情報の共有に努めております。

経営会議等ではこれらの報告等を踏まえ、適時適切に指示等を行う態勢としております。

④ 貸倒引当金の計上基準

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している先に係る債権及びそれと同等の状況にある先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないものの、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる先の債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除し、その残額のうち、必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績率等を基に予想損失率を算出し計上しております。

当行の全ての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査した上で、最終的に経営会議にて承認しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

ロ. 標準的手法が適用されるポートフォリオについて、リスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称及びエクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インベスターズ・サービスの3格付機関を採用しております。

4. 信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. 信用リスク削減手法

自己資本比率の算出において、告示第80条の規定に基づく信用リスク削減手法として「包括的手法」を採用しております。信用リスク削減手法とは、当行が抱える信用リスクを軽減するための措置であり、担保、保証、貸出金と預金との相殺等が該当します。

ロ. 方針及び手続

エクスポージャーの信用リスクの削減手段として有効と認められる適格金融資産担保については、自行預金、日本国政府または我が国の地方公共団体が発行する円建て債券、上場会社の株式を対象として取り扱っております。また、保証については、独立行政法人住宅金融支援機構や政府関係機関、我が国の地方公共団体及び十分な保証能力を有する保証会社等を信用リスク削減手法に使用しております。

貸出金と自行預金の相殺にあたっては、債務者の担保（総合口座を含む）登録のない定期預金を対象としております。

ハ. 信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスクの集中

同一業種へ偏ることなく、信用リスクは分散されております。

5. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

イ. リスク資本及び与信限度枠の割当方法に関する方針

当行では、派生商品取引にかかる取引相手の信用リスクに関して、カレント・エクスポージャー方式(*)により算出し、取引先ごとに明確に与信限度枠を定めて管理しております。また、リスク資本配賦枠に関しては、オン・バランス取引と合算した上で、配賦したリスク資本の範囲内に収めるよう管理しております。

(*) デリバティブの信用リスク額の算出方法の一つ。「想定元本×契約残存期間別の掛け目+再構築コスト」で算出。

当行における派生商品取引は、ヘッジ目的で利用されており、投機的な取引は行っておりません。また、追加的な担保提供を必要とする場合においても、派生商品取引の額が限定的であることや適格担保となりうる国債等の有価証券を十分に保有しており、影響は極めて軽微であります。

ロ. 長期決済期間取引に関する事項

当行では長期決済期間取引に係る与信相当額はありません。

6. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. リスク管理の方針及びリスク特性の概要

当行は、新規の証券化または再証券化の予定はありません。

なお、当行が投資有価証券として運用している投資信託の一部に証券化取引が組み込まれている場合があります。

ロ. 告示第248条第1項第1号から第4号までに規定する体制の整備及びその運用状況の概要

当行では、証券化商品等（投資信託等に含まれるものを含む）について、発行体及びその裏付資産等の包括的なリスク特性や構造上の特性が継続的に把握できるように、継続的な情報収集とモニタリングを実施し、適切な管理態勢を構築しております。

ハ. 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針

信用リスク削減手法として証券化取引を用いておりません。

ニ. 証券化エクスポージャーの信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称

当行では、「外部格付準拠方式」により証券化エクスポージャーの信用リスク・アセット額を算出しております。

ホ. 証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称

マーケット・リスク相当額にかかる額は算入しておりません。

ヘ. 当行が証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行った場合には、当該証券化目的導管体の種類及び当該証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているかどうかの別

当該証券化取引は行っておりません。

ト. 当行の子法人等（連結子法人等を除く）及び関連法人等のうち当行が行った証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているものの名称

該当事項はありません。

チ. 証券化取引に関する会計方針

証券化取引の会計上の処理につきましては、金融資産の契約上の権利に対する支配が他に移転したことにより金融資産の消滅を認識する売却処理を採用しております。証券化取引における資産の売却は、証券化取引の委託者である当行が、優先受益権を売却した時点で認識しております。

リ. 証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称

リスク・ウェイトの判定において、日本格付研究所（JCR）、格付投資情報センター（R&I）、ムーディーズ・インバスターズ・サービスの3格付機関を採用しております。

なお、証券化エクスポージャーの種類に応じた格付機関の使い分けは行っておりません。

ヌ. 内部評価方式を用いている場合には、その概要

内部評価方式は用いておりません。

ル. 定量的な情報に重要な変更が生じた場合には、その内容

該当事項はありません。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

7. オペレーショナル・リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

① オペレーショナル・リスク

オペレーショナル・リスクとは、業務の過程、役職員の活動もしくはシステムが不適切であることまたは外生的な事象により損失を被るリスクをいい、当行ではシステムリスク、事務リスク、その他オペレーショナル・リスクに大別して管理しております。

当行では、各オペレーショナル・リスク管理に関する基本方針を「リスク管理基本方針」に定め、その方針に基づき「オペレーショナル・リスク管理規程」を制定し、これを遵守しております。また、これらオペレーショナル・リスクに係る諸問題はリスク管理委員会等で協議・報告を行うなど、管理態勢の強化に努めております。

② 事務・システムリスク

事務リスクとは、役職員が正確な事務を怠る、あるいは事故・不正等を起こすことにより、損失を被るリスクをいいます。

システムリスクとは、コンピュータシステムの停止または誤作動、システムの不備、コンピュータの不正使用、顧客データの紛失・破壊・改ざん・漏洩等により、損失を被るリスクをいいます。

当行では、事務・システムリスクの管理にあたり、それぞれのリスク管理の基本事項を定めた「事務リスク管理規程」、「システムリスク管理規程」を制定したうえで、事務・システムリスク管理部署が業務運営に係る事務・システムリスクの把握・管理を実施するとともに、各リスク所管部がより専門的な立場からそれぞれのリスクを管理しております。

事務・システムリスクは、業務運営を行っていく上でその影響や重要性に鑑み可能な限り回避すべきリスクであり、適切に管理するための組織体制や行内牽制態勢を整備し、リスク発生の未然防止やリスク発生時の影響極小化に努めております。

また、監査部門による厳格な内部監査の実施により、全店における再発防止策等リスク対応策への取組状況や有効性を検証するなど、行内牽制を図っております。

③ その他オペレーショナル・リスク

その他オペレーショナル・リスクとは、システムリスク、事務リスク以外のオペレーショナル・リスクをいいます。具体的には法務リスク、人的リスク、有形資産リスク、危機管理のことをいい、当行では各種のその他オペレーショナル・リスクの管理部門を定め、各リスクの特性に応じたリスク管理態勢の構築を図っております。

ロ. オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

当行はオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたり「基礎的手法」を使用しております。

8. 銀行法施行令第4条第4項第3号に規定する出資その他これに類するエクスポージャー又は株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針及び手続の概要

当行では、市場リスク管理にかかる基本方針として、「最適の有価証券ポートフォリオの構築を通してリスク対比の収益性向上を図るため、フィデアグループの経営体力、投資スタイル、取引規模及びリスク・プロファイル等に見合った適切なリスク限度枠等を設定のうえ、市場取引部門（フロント）、事務管理部門（バック）、リスク管理部門（ミドル）が相互牽制機能を発揮するなど、適切なリスク管理態勢を整備する。」ことを掲げております。

市場リスクを有する出資・株式等エクスポージャーにつきましては、その他の保有有価証券と同様に、残高、リスク量（信頼区間99%、保有期間は保有区分・リスク特性等に応じて60日から250日で設定）、評価損益等の状況を日次でモニタリングし、リスク管理部門が直接経営に報告するなど、市場リスク管理にかかる基本方針に沿って適切な管理を行っております。

出資・株式等エクスポージャーは、相対的に価格変動リスクが大きいと見られるため、ポジション枠を設定して過大なリスクを許容しないよう配慮しております。

有価証券の評価は、その他有価証券のうち時価のあるものについては、決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価のないものについては移動平均法による原価法または償却原価法により行っております。

9. 金利リスクに関する事項

イ. リスク管理の方針及び手続の概要

① リスクの管理及び計測の対象とする金利リスクの考え方及び範囲に関する説明

金利リスクとは、銀行勘定の預金・貸出金や国債等の債券について、金利変動により損失を被るリスクであり、市場リスクの一つであります。当行では、自己資本等の経営体力に見合った適正な水準の金利リスクを許容し、安定的な収益（利息収入）の獲得を目指しております。

② リスク管理及びリスク削減の方針に関する説明

リスク限度額やモニタリング方法など金利リスクの管理については、半期毎にリスクマネジメント会議において協議のうえ、承認を得ております。

期中においては、リスク管理部署がリスクの状況をモニタリングし、定期的にリスクマネジメント会議及び取締役会に報告し、各種リスクのコントロールについて検討を行っております。

③ 金利リスク計測の頻度

金利リスク量につきましては、債券等の有価証券は日次、貸出金や預金等を含む銀行勘定の金利リスク量は月次でVaR、10BPV等を計測しており、原則として半期ごとに配賦するリスク枠の使用状況、リスクの推移・状況等をリスクマネジメント会議等へ報告しております。

④ ヘッジ等金利リスク削減手法に関する説明

金利変動リスクを適切に管理するため、ヘッジ会計処理規程を制定しております。

ロ. 金利リスクの算定手法の概要

- ① 開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII並びに銀行がこれらに追加して自ら開示を行う金利リスクに関する事項
 - (i) 流動性預金に割り当てられた金利改定の平均満期
2022年3月末は4.64年、2023年3月末は4.65年としております。
 - (ii) 流動性預金に割り当てられた最長の金利改定満期
10年としております。
 - (iii) 流動性預金への満期の割当て方法及びその前提
普通預金等の満期のない流動性預金については、コア預金内部モデルを使って預金種類別や人格別の残高推移を統計的に解析し、将来残高推移を保守的に推計することで実質的な満期を計測しております。推計値については月次でバックテストを実施しており、モデルの検証は十分に行っております。
 - (iv) 固定金利貸出の期限前返済や定期預金の早期解約に関する前提
金融庁が定める保守的な前提を考慮しております。
 - (v) 複数の通貨の集計方法及びその前提
通貨間の相関は考慮しておらず、通貨別に算出した正の金利リスクのみを合算して算出しております。
 - (vi) スプレッドに関する前提
スプレッド及びその変動は考慮しておりません。
 - (vii) 内部モデルの使用等、△EVE及び△NIIに重大な影響を及ぼすその他の前提
コア預金については、前項（iii）に記載の通りです。その他の内部モデルは使用しておりません。
 - (viii) 前事業年度末の開示からの変動に関する説明
2023年3月末の△EVEが最大となる金利ショックは、下方パラレルシフトによる122億円であります。前期末比24億円の増加となっております。
 - (ix) 計測値の解釈や重要性に関するその他の説明
金利リスクをコントロールすべき事象として、金利上昇を想定しており、上方パラレルシフトによる△EVEの自己資本に対する比率は基準値である20%を下回っていることから、問題のない水準と認識しております。
- ② 銀行が自己資本の充実度の評価、ストレス・テスト、リスク管理、収益管理、経営上の判断その他の目的で、開示告示に基づく定量的開示の対象となる△EVE及び△NII以外の金利リスクを計測している場合における、当該金利リスクに関する事項
当行では市場取引のリスク量について、VaR法、BPV法のほか、業務の特性や運用方針に合った効果的・効率的な計測方法を組合せて活用しております。また、以下の考え方に沿って管理手法の高度化・精緻化に取り組んでおります。
 - (i) リスクを計量化して把握・管理することが可能なリスクについては、VaR、BPV、ギャップ分析、シミュレーション等を用いたリスク分析によって計量化し、当行の経営体力に見合うようコントロールしております。
 - (ii) バックテストやストレステストなどにより、計量化手法や管理方法の妥当性・有効性を検証するとともに経営に与える影響を分析するなど、リスク管理の実効性を確保しながら計量化手法の高度化・精緻化に努めております。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖定量的な開示項目（単体）

1. 自己資本の充実度に関する事項

イ. 信用リスクに対する所要自己資本の額

（単位：百万円）

項目	2022年3月31日		2023年3月31日	
	リスク・アセット	所要自己資本	リスク・アセット	所要自己資本
【資産（オン・バランス）項目】				
1. 現金	—	—	—	—
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—	—	—
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	278	11	146	5
4. 国際決済銀行等向け	—	—	—	—
5. 我が国の地方公共団体向け	—	—	—	—
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	—	—	—	—
7. 国際開発銀行向け	—	—	—	—
8. 地方公共団体金融機構向け	—	—	—	—
9. 我が国の政府関係機関向け	4,930	197	4,440	177
10. 地方三公社向け	—	—	—	—
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	11,919	476	11,860	474
12. 法人等向け	203,209	8,128	214,444	8,577
13. 中小企業等向け及び個人向け	116,287	4,651	108,151	4,326
14. 抵当権付住宅ローン	13,166	526	12,287	491
15. 不動産取得等事業向け	42,958	1,718	46,839	1,873
16. 三月以上延滞等	974	38	469	18
17. 取立未済手形	—	—	—	—
18. 信用保証協会等による保証付	4,380	175	4,209	168
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—	—	—
20. 出資等	4,757	190	4,737	189
(うち出資等のエクスポージャー)	4,757	190	4,737	189
(うち重要な出資のエクスポージャー)	—	—	—	—
21. 上記以外	18,875	755	17,729	709
(うち他の金融機関等の対象資本調達手段のうち対象普通株式等に該当するもの以外のものであるエクスポージャー)	—	—	19	0
(うち特定項目のうち調整項目に算入されない部分に係るエクスポージャー)	6,616	264	5,665	226
(うち上記以外のエクスポージャー等)	12,259	490	12,044	481
22. 証券化（オリジネーターの場合）	—	—	—	—
(うち再証券化)	—	—	—	—
23. 証券化（オリジネーター以外の場合）	—	—	—	—
(うち再証券化)	—	—	—	—
24. 複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）のうち、個々の資産の把握が困難な資産	—	—	—	—
25. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（ルック・スルー方式）	21,669	866	20,768	830
26. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（マンドート方式）	—	—	—	—
27. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式250%）	—	—	—	—
28. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（蓋然性方式400%）	—	—	—	—
29. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算（フォールバック方式1250%）	—	—	—	—
30. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	454	18	453	18
31. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額	—	—	—	—
資産（オン・バランス）項目 計	443,861	17,754	446,538	17,861
【オフ・バランス取引等項目】				
1. 原契約期間が1年以下のコミットメント	42	1	752	30
2. 短期の貿易関連偶発債務	—	—	—	—
3. 特定の取引に係る偶発債務	2,051	82	2,482	99
4. 原契約期間が1年超のコミットメント	3,065	122	3,370	134
5. 信用供与に直接的に代替する偶発債務	7,727	309	7,650	306
6. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	—	—	—	—
7. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	514	20	142	5
8. 派生商品取引	162	6	290	11
9. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—	—	—
オフ・バランス取引等 計	13,564	542	14,688	587
【CVAリスク相当額】（簡便的リスク測定方式）	243	9	301	12
【中央清算機関関連エクスポージャー】	68	2	86	3
合計	457,738	18,309	461,615	18,464

(注) 所要自己資本額＝リスク・アセット×4%

ロ. オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
所要自己資本の額	1,226	1,279

(注) 当行は基礎的手法により算出しております。

ハ. 単体総所要自己資本額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
総所要自己資本額	19,536	19,743

2. 信用リスクに関する事項（リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャー及び証券化エクスポージャーを除く。）

イ. 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及びエクスポージャーの主な種類別の内訳（地域別、業種別、残存期間別）

(単位：百万円)

	2022年3月31日				2023年3月31日			
	信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高				信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高			
		うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引		うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	うち債券	うちデリバティブ取引
国内計	1,538,618	929,904	239,264	559	1,489,177	1,022,492	226,632	1,187
国外計	33,383	—	33,161	221	23,179	—	22,961	217
地域別合計	1,572,002	929,904	272,426	780	1,512,356	1,022,492	249,593	1,405
製造業	65,115	60,063	2,066	7	65,398	59,568	3,064	11
農業、林業	2,386	2,290	94	—	2,370	2,241	127	—
漁業	64	64	—	—	99	99	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	2,159	2,134	25	—	2,348	2,207	115	—
建設業	52,903	47,938	4,751	—	51,130	45,411	5,440	—
電気・ガス・熱供給・水道業	61,522	61,429	—	—	67,040	66,827	—	—
情報通信業	5,805	5,325	—	—	5,020	4,458	—	—
運輸業、郵便業	18,914	11,722	6,940	—	16,023	10,188	5,567	—
卸売業、小売業	62,680	60,339	1,928	—	64,180	61,553	2,270	—
金融業、保険業	416,999	57,870	73,540	773	298,473	80,739	65,433	1,393
不動産業、物品賃貸業	57,576	56,581	850	—	61,762	60,599	1,080	—
学術研究、専門・技術サービス業	9,475	9,463	—	—	15,924	15,917	—	—
宿泊業、飲食サービス業	14,545	14,321	160	—	14,352	14,024	310	—
生活関連サービス業、娯楽業	11,771	11,072	550	—	10,952	10,338	600	—
教育、学習支援業	869	869	—	—	861	861	—	—
医療、福祉	39,448	39,314	132	—	38,673	38,408	263	—
その他のサービス	20,200	19,180	952	—	17,693	15,751	1,613	—
地方公共団体	369,227	243,132	126,020	—	344,165	230,661	113,442	—
その他	360,335	226,787	54,414	—	435,885	302,633	50,265	—
業種別合計	1,572,002	929,904	272,426	780	1,512,356	1,022,492	249,593	1,405
1年以下	190,470	181,142	8,462	780	278,063	266,910	10,126	955
1年超3年以下	109,055	83,443	25,551	—	107,132	82,746	24,350	—
3年超5年以下	106,814	80,885	25,823	—	112,642	75,957	36,508	—
5年超7年以下	85,929	53,807	32,021	—	87,448	61,346	26,061	—
7年超10年以下	251,975	185,269	66,647	—	223,379	181,005	42,318	—
10年超	411,076	296,916	113,919	—	415,281	304,363	110,227	450
期間の定めのないもの	416,681	48,438	—	—	288,410	50,162	—	—
残存期間別合計	1,572,002	929,904	272,426	780	1,512,356	1,022,492	249,593	1,405

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

ロ. 三月以上延滞エクスポージャーの期末残高（地域別、業種別）

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
国内計	2,194	1,284
国外計	—	—
地域別合計	2,194	1,284
製造業	569	218
農業、林業	31	14
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	10	10
建設業	284	126
電気・ガス・熱供給・水道業	4	4
情報通信業	—	—
運輸業、郵便業	—	—
卸売業、小売業	278	290
金融業、保険業	—	—
不動産業、物品賃貸業	269	110
学術研究、専門・技術サービス業	—	—
宿泊業、飲食サービス業	267	128
生活関連サービス業、娯楽業	178	94
教育、学習支援業	—	—
医療、福祉	24	11
その他のサービス	74	82
地方公共団体	—	—
その他	200	193
業種別合計	2,194	1,284

ハ. 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金及び特定海外債権引当勘定の期末残高及び期中増減額

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
一般貸倒引当金	2,400	△49	2,351	2,351	△123	2,227
個別貸倒引当金	2,439	136	2,576	2,576	442	3,018
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—	—	—
合計	4,840	86	4,927	4,927	319	5,246

二. 個別貸倒引当金の地域別、業種別内訳

(単位：百万円)

	2022年3月期			2023年3月期		
	期首残高	当期増減額	当期末残高	期首残高	当期増減額	当期末残高
国内計	2,439	136	2,576	2,576	442	3,018
国外計	—	—	—	—	—	—
地域別合計	2,439	136	2,576	2,576	442	3,018
製造業	568	84	653	653	130	783
農業、林業	14	△3	11	11	△11	—
漁業	20	△0	20	20	△1	19
鉱業、採石業、砂利採取業	6	0	7	7	△0	7
建設業	140	6	146	146	△33	112
電気・ガス・熱供給・水道業	—	4	4	4	△0	4
情報通信業	21	3	25	25	△2	23
運輸業、郵便業	—	3	3	3	△1	2
卸売業、小売業	535	△92	442	442	△43	398
金融業、保険業	—	—	—	—	96	96
不動産業、物品賃貸業	648	△235	413	413	△30	382
学術研究、専門・技術サービス業	—	—	—	—	—	—
宿泊業、飲食サービス業	55	467	523	523	365	889
生活関連サービス業、娯楽業	187	△137	49	49	△3	45
教育、学習支援業	—	—	—	—	—	—
医療、福祉	62	51	113	113	△20	93
その他のサービス	89	7	96	96	△6	90
地方公共団体	—	—	—	—	—	—
その他	88	△24	64	64	5	69
業種別合計	2,439	136	2,576	2,576	442	3,018

ホ. 業種別の貸出金償却の額
該当事項はありません。

ハ. 標準的手法が適用されるエクスポージャーについて、リスク・ウェイトの区分ごとの信用リスク削減手法の効果を勘案した後の残高並びに自己資本比率告示第79条の5第2項第2号、第177条の2第2項第2号、第248条（自己資本比率告示第125条及び第127条において準用する場合に限る。）並びに第248条の4第1項第1号及び第2号（自己資本比率告示第125条及び第127条において準用する場合に限る。）の規定により1,250パーセントのリスク・ウェイトが適用されるエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	格付あり	格付なし	格付あり	格付なし
0%	6,306	912,951	1,830	841,023
10%	—	91,031	—	88,880
20%	68,445	733	65,695	450
35%	—	37,617	—	35,105
50%	24,007	385	20,551	318
75%	—	153,240	—	143,004
100%	7,085	259,014	11,804	271,369
120%	—	—	—	—
150%	—	438	13	147
200%	—	—	—	—
250%	—	2,646	—	2,266
350%	—	—	—	—
1,250%	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	105,845	1,458,059	99,894	1,382,566

3. 信用リスク削減手法に関する事項

標準的手法が適用されるポートフォリオについて、適格金融資産担保及び保証による信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
適格金融資産担保合計	5,011	48,138
適格保証・クレジットデリバティブ合計	126,780	121,483

4. 派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項

イ. 与信相当額の算出に用いる方法

派生商品取引の与信相当額は、カレント・エクスポージャー方式により算出しております。

ロ. 派生商品取引のグロス再構築コスト

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
外国為替関連取引	25	157
金利関連取引	81	183
株式関連取引	102	20
合計	208	361

ハ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額（派生商品取引にあたっては、取引の区分ごとの与信相当額を含む。）

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
派生商品取引	780	1,405
外国為替関連取引	410	431
金利関連取引	178	858
株式関連取引	192	116
合計	780	1,405

二. ロ. に掲げる合計額及びアドオン合計額からハ. に掲げる額を差し引いた額
ロ. における開示内容と同様であります。

ホ. 担保の種類別の額
該当事項はありません。

ハ. 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額
ハ. における開示内容と同様であります。

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

ト. 与信相当額算出の対象となるクレジットデリバティブの想定元本をクレジットデリバティブの種類別、かつ、プロテクションの購入又は提供の別に区分した額
該当事項はありません。

チ. 信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジットデリバティブの想定元本額
該当事項はありません。

5. 証券化エクスポージャーに関する事項

イ. オリジネーターである場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項
該当事項はありません。

ロ. 投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項
該当事項はありません。

ハ. 銀行がオリジネーターである場合におけるマーケット・リスク相当額の算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項
該当事項はありません。

6. 出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項

イ. 貸借対照表計上額及び時価

(単位：百万円)

	2022年3月31日		2023年3月31日	
	貸借対照表計上額	時価	貸借対照表計上額	時価
上場している出資等又は株式等エクスポージャー	14,414		13,469	
上記に該当しない出資等又は株式等エクスポージャー	487		579	
合計	14,902	14,902	14,049	14,049

ロ. 出資等又は株式等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
売却及び償却に伴う損益	△616	△403
売却益	2,030	1,170
売却損	2,644	1,570
償却	3	3

ハ. 貸借対照表で認識され、かつ、損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位：百万円)

	2022年3月期	2023年3月期
その他有価証券	1,615	675

ニ. 貸借対照表及び損益計算書で認識されない評価損益の額
該当事項はありません。

7. リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャーに関する事項

リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャー

(単位：百万円)

	2022年3月31日	2023年3月31日
ルック・スルー方式	51,850	79,782
マンドート方式	—	—
蓋然性方式 (250%)	—	—
蓋然性方式 (400%)	—	—
フォールバック方式	—	—
合計	51,850	79,782

- (注) 1. 「ルック・スルー方式」とは、ファンド内の個々の組入資産のリスクアセットを合算する方式です。
2. 「マンドート方式」とは、ファンドの運用基準に基づき、ファンド内の組入資産構成を保守的に仮定し、個々の資産のリスクアセットを合算する方式です。
3. 「蓋然性方式 (250%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが250%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト250%を適用する方式です。
4. 「蓋然性方式 (400%)」とは、ファンド内の組入資産の加重平均リスクウェイトが400%を下回る蓋然性が高いことを疎明できる場合に限り、リスクウェイト400%を適用する方式です。
5. 「フォールバック方式」とは、上記のいずれの方式も適用できない場合に、1,250%のリスクウェイトを適用する方式です。

8. 金利リスクに関する事項

(単位：百万円)

IRRB1：金利リスク		イ		ロ		ハ		ニ	
項番		△EVE		△NII					
		当期末	前期末	当期末	前期末				
1	上方パラレルシフト	3,566	1,386	7,330	8,046				
2	下方パラレルシフト	12,225	9,735	2,755	2,441				
3	スティープ化	1,082	269						
4	フラット化								
5	短期金利上昇								
6	短期金利低下								
7	最大値	12,225	9,735	7,330	8,046				
		ホ		ヘ					
		当期末		前期末					
8	自己資本の額	43,346		47,910					

自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項

❖報酬等に関する開示事項（2023年3月期）

※当行は、連結子法人等を有しておらず、以下の項目については、当行単体について記載しております。

1. 当行の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

イ. 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」及び「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

① 「対象役員」の範囲

対象役員は、当行の取締役であります。なお、社外取締役を除いております。

② 「対象従業員等」の範囲

当行では、対象役員以外の当行の役員及び従業員のうち、「高額な報酬等を受ける者」で当行の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当行の対象役員以外の役員及び従業員で、対象従業員等に該当する者はありません。

(i) 「高額な報酬等を受ける者」の範囲

「高額な報酬等を受ける者」とは、「対象役職員の報酬の総額」を「対象役職員の員数」により除すことで算出される「対象役職員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

(ii) 「業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」の範囲

「業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当行の業務の運営に相当程度の影響を与え、又は取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

ロ. 対象役職員の報酬等の決定について

当行では、株主総会において役員報酬の総額（上限額）を決定しております。株主総会で決議された取締役（監査等委員である取締役を除く）の報酬の個人別の配分については、取締役会に一任されております。また、監査等委員である取締役の報酬の個人別の配分については、監査等委員である取締役の協議に一任されております。

ハ. 報酬委員会等の構成員に対して払われた報酬等の総額及び報酬委員会等の会議の開催回数

	開催回数 (2022年4月～2023年3月)
取締役会（株式会社北都銀行）	6回

(注) 報酬等の総額については、報酬委員会等の職務執行に係る対価に相当する部分のみを切り離して算出することができないため、報酬等の総額は記載していません。

2. 当行の対象役職員の報酬等の体系の設計及び運用の適切性の評価に関する事項

報酬等に関する方針について

対象役職員の報酬等に関する方針

当行は、取締役（監査等委員である取締役を除く）は取締役会にて、監査等委員である取締役は監査等委員会にて、それぞれ経営内容等を考慮した上で報酬等の額の決定に関する方針を定めております。

具体的な役員報酬制度といたしましては、役員の報酬等の構成を、役割や責任に応じて固定額を月額で支給する基本報酬と中長期的な企業価値向上に対するインセンティブを高めることを目的として支給する譲渡制限付株式報酬と当行の業績に応じて支給する賞与としております。

役員の報酬等の額は、取締役（監査等委員である取締役を除く）は株主総会が決定する報酬等総額の限度内において取締役会が決定しております。また、監査等委員である取締役は株主総会が決定する報酬等総額の限度内において、監査等委員である取締役の協議により決定しております。

3. 当行の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性並びに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役職員の報酬等の決定にあたっては、株主総会で役員全体の報酬総額が決議され、決定される仕組みになっております。

4. 当行の対象役職員の報酬等の種類、支払総額及び支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

区分	人数	報酬等の 総額 (百万円)	固定報酬の総額			変動報酬の総額			その他
			基本報酬	自社株取得 目的報酬		基本報酬	賞与		
対象役員（除く社外役員）	8	158	134	131	3	11	-	11	11
対象従業員等	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(注) その他には、従前支給していた自社株取得目的報酬に代えて2022年5月13日に導入を決定した譲渡制限付株式報酬が該当します。

5. 当行の対象役職員の報酬等の体系に関し、その参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。

索引

	フィデア ホールディングス
フィデアホールディングスグループ	
経営の組織（コーポレートガバナンス）	本編53
子会社等に関する事項	本編68
資本金・株式等の状況	
資本金及び発行済株式の総数	3
株式所有者別内訳	3
大株主	4
役員の状況	本編51,52
会計監査人の氏名又は名称	14
組織・沿革	
組織図	本編67
沿革	本編3,4
事業の概況	
業績の概況	13,14
会社法に基づく監査を受けている旨	14
金融商品取引法に基づく監査を受けている旨	14
主要な経営指標等の推移（連結）	14
連結財務諸表	
連結貸借対照表	15
連結損益計算書	15
連結包括利益計算書	15
連結株主資本等変動計算書	16,17
連結キャッシュ・フロー計算書	18
連結情報	
連結セグメント情報	30
リスク管理債権及び金融再生法開示債権（連結）	30
自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項	
自己資本の充実の状況	31
自己資本の構成に関する開示事項	31
定性的な開示事項（連結）	32~38
定量的な開示事項（連結）	39~45
報酬等に関する開示事項（連結）	46,47

索引

	荘内銀行	北都銀行
荘内銀行・北都銀行のグループ企業		
経営の組織（コーポレートガバナンス）	本編53	本編53
資本金・株式等の状況		
資本金の推移	4	5
株式所有者別内訳	4	5
大株主	4	5
役員の状況	本編51	本編52
組織・沿革		
組織図	1	2
沿革	本編3,4	本編3,4
店舗ネットワーク	9,11	10,12
当行を所属銀行とする銀行 代理業者の商号、名称又は氏名	11	—
業務案内		
主要な業務の内容	8	8
手数料	6	7
事業の概況		
業績の概況	48	95
主要な経営指標等の推移（単体）	49	96
財務諸表		
貸借対照表	50	97
損益計算書	51	98
株主資本等変動計算書	52,53	99,100
キャッシュ・フロー計算書	54	101
損益の状況		
国内・国際業務部門別粗利益	64	111
業務純益	64	111
役務取引の状況	64	111
その他業務収支の内訳	64	111
資金運用・調達勘定平均残高、利息、利回り	65	112
営業経費の内訳	65	112
受取利息・支払利息の分析	65	112
経営諸比率		
利鞘	66	113
利益率	66	113
預貸率	66	113
預証率	66	113
従業員1人当たり預金残高・貸出金残高	66	113
1店舗当たり預金残高・貸出金残高	66	113

	荘内銀行	北都銀行
預金		
預金科目別残高（期末残高／平均残高）	67	114
定期預金の残存期間別残高	68	115
預金者別預金残高	68	115
財形貯蓄預金残高	68	115
貸出金		
貸出金科目別残高（期末残高／平均残高）	69	116
貸出金の残存期間別残高	69	116
貸出金業種別残高	70	117
貸出金の担保別内訳	70	117
支払承諾見返の担保別内訳	70	117
貸出金使途別残高	70	117
中小企業等に対する貸出金残高	71	118
個人ローン残高	71	118
貸倒引当金内訳	71	118
貸出金償却額	71	118
特定海外債権残高	71	118
リスク管理債権及び金融再生法開示債権	71	118
証券		
保有有価証券残高（期末残高／平均残高）	72	119
公共債引受額	72	119
公共債窓口販売実績	72	119
商品有価証券平均残高	72	119
有価証券の残存期間別残高	73	120
有価証券等の時価等情報		
有価証券関係	74,75	121,122
金銭の信託関係	76	123
その他有価証券評価差額金	76	123
デリバティブ取引関係	77,78	124,125
暗号資産	78	125
国際業務等		
内国為替取扱高	79	126
外国為替取扱高	79	126
外貨建資産残高	79	126
決算公告・財務諸表に係る確認書	63	110
自己資本比率規制の第3の柱に基づく開示事項		
自己資本の充実の状況（単体）	80	127
自己資本の構成に関する開示事項（単体）	80	127
定性的な開示事項（単体）	81～85	128～133
定量的な開示事項（単体）	86～92	134～139
報酬等に関する開示事項	93,94	140

フィデアホールディングス株式会社

〒980-0021 宮城県仙台市青葉区中央三丁目1番24号

TEL.022-290-8800

<http://www.fidea.co.jp/>

株式会社 荘内銀行

〒997-8611 山形県鶴岡市本町一丁目9番7号

TEL.0235-22-5211

<https://www.shonai.co.jp/>

株式会社 北都銀行

〒010-0001 秋田県秋田市中通三丁目1番41号

TEL.018-833-4211

<https://www.hokutobank.co.jp/>

